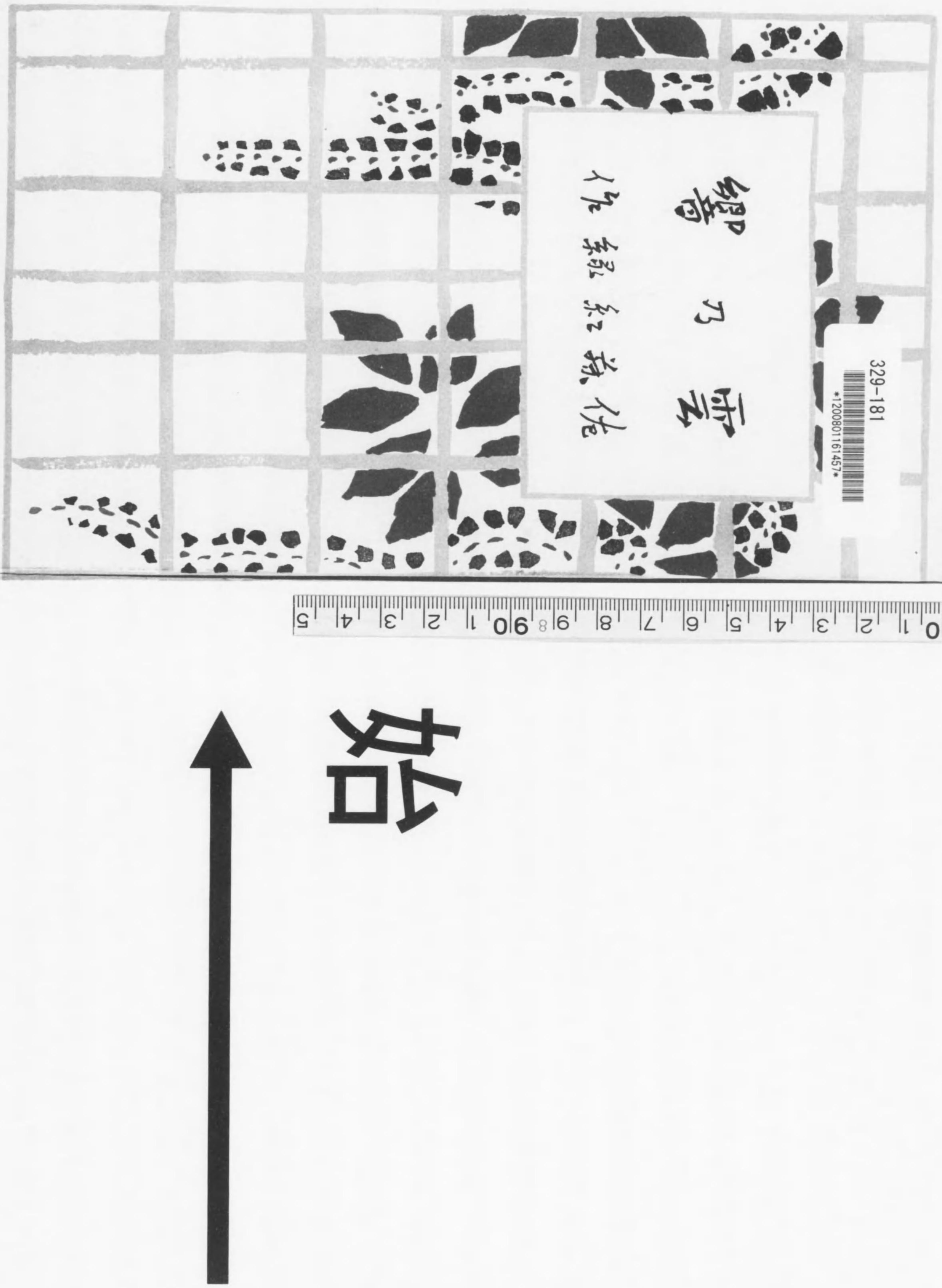
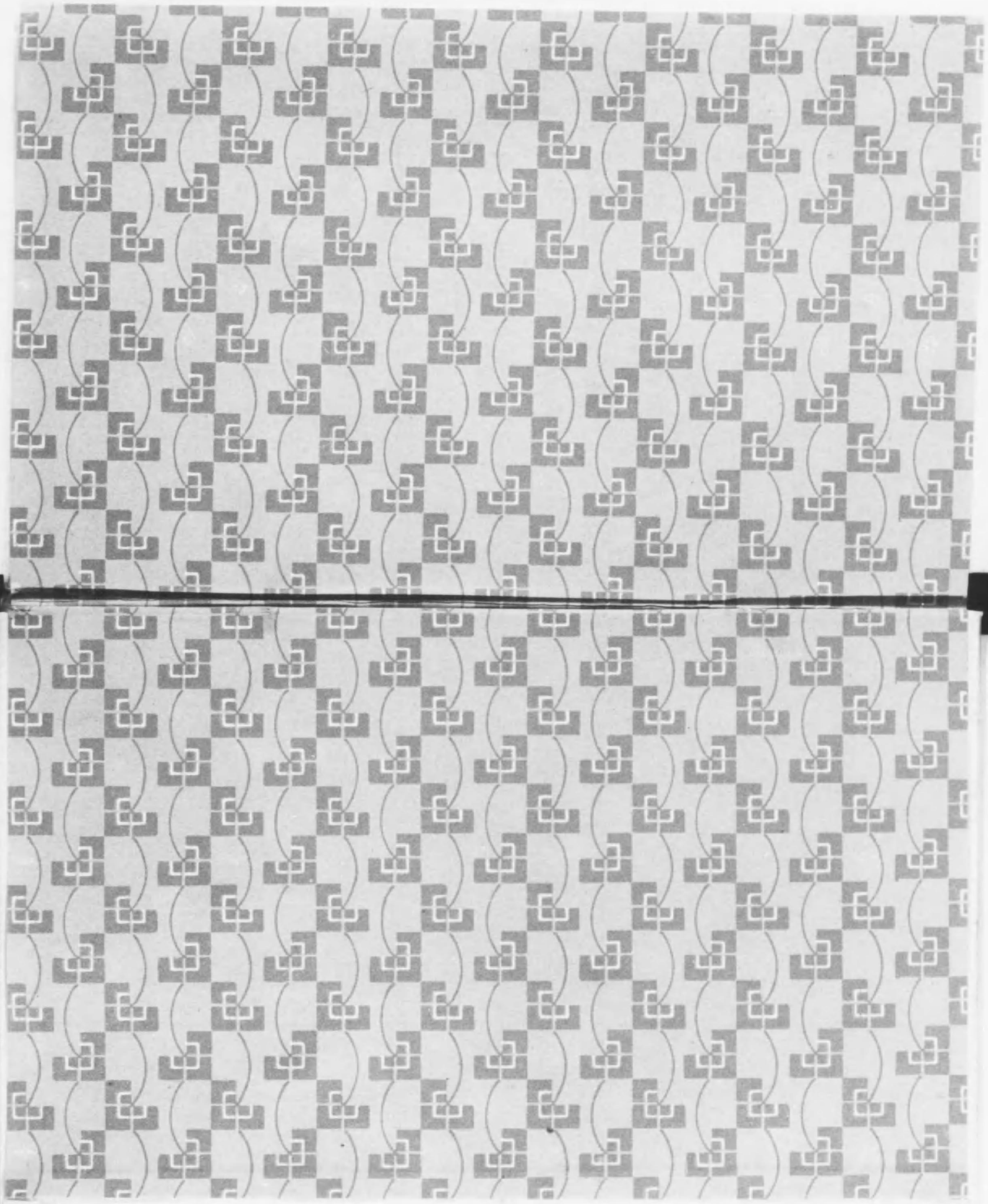

即
當
乃
帝
云
作
紫
紅
黃
佛
329-181
1200801161457



雲の響

329
181

I種
W

1200801161457

雲の響目次

第一章　園遊會……一
其二　舟の中……一〇
其三　應接室……三五
第二章　炭燒小屋……四八
其二　遺言……六三
其三　呪の火……八七
其四　怨の焰……一〇一
第三章　池の畔……一一九
第四章　藤の茶屋……一七六

雲の響

佐藤紅緑著

第一章

春の夜星の輝きに
照りこそ渡れ祕事の
深くも包む柔肌に

咽ぶやうに、又、忍び泣くやうに、細かに顫へ乍ら流れ出る絃の音に連れて、人の心を唆るやうな温かい息の籠つた男の柔らかな肉聲は、恰かも美しい泉の水が、汲み

其二　兄の歸郷……一九二
其三　生みの母……二一〇
其四　追ひ立て……二三〇
第五章　父と子……二四一
其二　哀別……二五二
第六章　松並木……二六一
其二　捕縛……二七二
其三　逃走……二八九
第七章　鐘樓……三〇八
其二　雲の響……三一二

出しても〳〵盡きることなく滾々として湧き出るやうに限りもなく迸り出る。

外は麗の春の宵である。眩しい程明るく室一ぱいに輝き溢れた花電燈の光りの下に照らし出された貴婦人や令嬢達の、高貴な寶石や贅を盡した衣服に着飾つた姿が、恰かも温室に咲き誇つた色彩の強い熱帶の花でも見るやうに、目暉く程美しい。絃の顫へと肉聲と縺れ合つて奏で出される美妙なメロディは飽くまで人の心を蕩かさずには置かないやうに、甘い息の香や肌膚の臭ひや鋭い刺戟を持つた香料が混り合ひ蒸れ合つて、むつとする程生温かな空氣を嫋々と搖つて、柔らかな肌の小さな毛孔の悉くから心の臓までも浸み込んで來る。其の妙へなる音色に聽衆は最う骨の髓まで醉はされて、恍とりとして息を通はす者もなかつた。曲が次第に複雜になつて來るに從つて、若いヴァイオリストの柔らかな線を持つた白い顔はしつとりと汗ばんで、頰のあたりにはほんのりと紅味を潮した。キュウを持つた手は少し神經的に顫へ乍ら忙しなく動いて、絃を押へる左の指は、恰も幾尾の白魚が躍り跳るやうに目眩ろしく動く。そして調子が迫るやうに強く、鋭く、急劇に重なつて行くに連れて、聽衆の心は息苦しいま

でに急迫して來る――。と、又調子はキュウや、指と共に何時か緩やかになつて、媚びるやうな、訴へるやうな、泣くやうな、得も言はれぬ物悲しいメロディは、堪へられぬまで惱ましい氣分の中へ人々の心を誘つて行く。絶えるかと思へば續き、續くかと思ふと又消え入るやうに細く幽かに綿々として限りなく流れ出る、其の自由自在な惡魔のやうな力のある音樂の魅力に、男も女も、總ての聽衆は身も魂も捉へ盡されて、自ら昂ぶり動いて來る波のやうな感情を抑へることも出來ないで、聲をも得立てず忍び泣く者すらあつた。そして、曲が止んで暫くの間は、恰も幻の世界へ連れ込まれた魂が、容易に現の世界へ歸つて來ないものゝやうに、急には聲を立てる者もなかつた。靜かな――恰度湖の底でもあるやうな靜かさが一時の間續くと、やがて、室の中は急に甦つたやうにざはめき出した。

「まあ、好かつたわね。」

夜會に髮を結つた春の高い令嬢が、溜息を吐くやうにそつと感嘆の聲を洩らすと、其所に一團に集つた四五人の令嬢は口を揃へて、

「本當に！」と思はず聲を高めて同じた。――其の若々しい幾つもの眼は、殆んど涙含まんばかりに輝いて居た。

「天才ね。」

「全く！何て恐ろしい力でせう。――全で身體中搔きまはされたやうよ。」

「何と云ふ方か知ら？」

「確か江守とかつて云つてましたわ。」

「さう、聞いたことのない人ね。」

「何でもつい近頃巴里から歸つたばかりなんですつて……。」

「まあ――貴女は能く御存じなのね。」

彼方でも此方でも、感嘆の聲に交つて身の上の噂などがボッ〳〵囁かれて、嘆賞するやうな人々の眼は、チラ〳〵と若い樂手の綺麗な顏に注がれるのであつた。

子爵佐原家では、當主子爵が長く患つて床に就いて居たチブスの全快祝ひと、今年學習院女學部の業を終へた、令孃輔音の卒業披露を兼ねて、春漸く酣なる今日四

月十日、極く親近の人々のみを招いて、小園遊會を催したのである。それで餘興プログラムの最後のヴァイオリンの獨奏が終ると共に、樂しい半日の清興は茲に終りを告げたので、來賓は何れもゾロ〳〵と歸途に就いた。フロックコートや、紋附羽織に袴の紳士や、花のやうに着飾つた洋裝和裝の貴婦人令孃達の姿は、音樂室に當てられた西洋室の大廣間のドアーを間斷なく潜つて、廣い玄關まで續いた。玄關から門まで美しい玉川砂利を敷き詰めた長く廣い庭道の兩側には、馬車や、自動車や、又は定紋を打つた人力車などがずらりと並んで、主人を待つ車夫や、馬丁や、運轉手達は、眼を白黑さして自分々々の主人を求めて居る。そして、首尾好く主人を迎へ乘せた自動車や馬車は重々しく轍を軋らして、靜かに門の外へと出るかと思ふと、急に勢ひ好く馳り去る。タイヤの砂利に軋る音、馬の轡を嚙む音、蹄の音、取り止まりもない人の聲などが雜然と入り混つて聞える中に動いて居る人々の姿は、高く點つたアーク燈の光りに浮き上つて見える。其の雜沓も一頻りで、やがてそれも靜まると、大波の退いた後のやうにひつそりとした廣い庭には、未だ見えぬ主人を待つ人力車が一臺と、自動

車が二臺、馬車が一臺だけ淋しく取殘されて、アーク燈の紫色の光りは、手入好く刈込んだ植込みの常磐樹や、今を盛りと咲き溢れた櫻や、敷き込まれた砂利を空しく照らして居る。

やがて、開け放つた玄關の眩しい程明るい電氣の下に、ぱつと目覺めるやうな派手な姿を現はしたのは同じぐらゐの年恰好の令嬢で、二人は踏段に降りると、大きな花崗石の切石の上に揃へられた空氣草履を穿いて、何か囁き乍ら靜かに門の方へと歩いた。それと見た二臺の自動車は忙しく重いタイヤを軋らせて令嬢の傍近く寄つて來た。

「一寸話し乍ら歩いて行くから、門まで先へ行つて待つて居て……。」と、一人の令嬢が命ずると、運轉手はハンドルを廻して、緩かに遠い門の方へ自動車を運んだ。

一人の令嬢は若葉色の絹レースの白い華奢な手袋を嵌め乍ら、

「江守先生の獨奏、ほんとに好う御座んしたわね。」と、先刻聞いた美しい音色の美妙なメロディが未だ身體の中に細々と顫へて居るのを、凝つと耳を傾けて味ふと云ふやうな眼附をして、云つた。

「ほんとに今日の獨奏は特別だつたのぬ。――何時もと違つて斯う……情熱が燃えて居たわ。」

「あの時の江守先生の身體は、全で電氣でも感じて居るやうにブル〳〵顫へて居てよ。其の顫へが聽衆に傳つて、皆の魂が恰度一つの波の中に搖れてるやうな心持だつたのね。――私、未だ身體がフラ〳〵してるやうで、何だか變なの。」

「私も！」

と云つて左の手を乳の上に持つて行くと、そつと首を傾げて、時間と空間との存在を超越したやうな其の時の氣分を、追ひ求めるやうに恍とりとしたが、偶と思ひ付いたやうに、

「貴方あの……鞆音さんのお話をお聞きなすつて？」と云つて笑顔に相手を眺めた。

「いゝえ、私、何も知らなくつてよ。」

「まあ、迂遠なのね。」

「何うして？何か面白いことがあつて……？。」
「あるどこぢやないわ。」と、微笑む。
「さう、私些つとも知らないの。――どんなことがあるの。」
「今日、江守先生をお呼びなすつた意味を何う思つて？」
「意味つて……別に何とも思へないわ。只園遊會の餘興を助ける爲めにお呼びなすつたんでせう。――當り前ぢやありませんか。」
「いゝえ、それに意味があるのよ。」
「どんな意味？」
「あの江守先生は、何でも鞆音さんの希望で、將來佐原家と深い關係をお持ちになるのですつて。」
「へえ――。」と驚いたやうに云つたが、思ひ返して、「ですが、それは貴女の邪推ぢやなくて。」
「あら、失禮ね。」と少し眉を上げたが、「そんなことがあるものですか。私、確かな處

から聞いたのですもの。」
「御免なさいね。――でも鞆音さんが眞逆そんな方とは思へないんですもの。」
「それや貴方は鞆音さんを信じてらつしやるからよ。」
「さうか知ら？」と、未だ疑ふやうに小首を傾けたが、「ぢや、今日の獨奏に力の籠つたのも其の意味ね。」
「まあさうよ。」
「ホ、、、、。ぢや、今度鞆音さんにお目にかゝつたら、外ながらお祝ひを云ふわ。」
「そんなことお止しなさいよ。」
話しながら歩く中に、可也長い道も歩き盡して何時か門の處まで來た。其所には先刻の自動車が二臺、待つて居た。
「何うも失禮。」
「私こそ。」と、二人は手を伸べて握手した。
「又、お近い中にお目にかゝりませうね。」

「是非。」

と握手を輕く振ると、つと身を退いて、慎ましく自動車に乘つた。二人とも柔らかな揉皮のクションの上に身を置くと、二臺の自動車は緩にか動き出した。

「左樣なら。」

「左樣なら。」

お互ひに挨拶を交すのを待ち兼ねたやうに、運轉手の忙しく廻すハンドルに、車は獸の吼えるやうな凄じいラッパの音を高く上げて、勢ひ好く馳り出した。

其二

先刻方まで多勢の人聲や、ざはめきに賑はつて居た佐原家の邸も、それ等の人々が各々歸つて了つた後は、急にひつそりと靜まつた。廣い家の窓々の硝子や緣側の障子

を洩れて居た電氣の光りもぱつたり消えて、何時も遲くまで明るい居室から今宵も變らず射す燈火のみが、朧に煙つた春の夜の庭先にほんのりと薄い光りを投げて居る。極く〳〵の親しい人々のみが未だ一人二人殘つて居ると見えて、隔てのなさゝうな高話の聲が洩れる合間々々には、腹の底から出るらしい搖れるやうな笑ひの響が聞こえた。

其の時、長い緣側の廊下を辷るやうに歩く人の氣勢がして、塵埃除の硝子戸をそつと開くと、庭に降りた男女の人影があつた。男は洋服を着て庭下駄を突つかけて、女は草履を穿いた。そして、植込や、築山や、花園の間の曲つた小徑を縫つてひたと肩と肩とを寄せ合つて縺れ乍ら歩く二人の姿が、朧月夜の淡々しい明るみの漂つた中に、暫くの間仄のりと見えたり、隱れたりして居た。

やがて、二人の姿は屋敷内にある大きな池の傍に出た。周圍には樫や、欅や、杉などの大木がすく〳〵と生えて、仰ぐと枝と枝とは空も見えないまでに重なり合ひ茂り交して、樹下は眞の闇である。其の闇の中に二つの白い顏と、女の足袋の白さとが、

少し蒼味を持つて見えた。――何に驚いたのか、默つて歩いて居る二人の頭の上で、バタ〳〵とけたゝましい羽擊の音が聞えた。

「あら！」

其の時、女はわざとらしい驚きの聲を上げて、男の身體にひたと我が身を寄せると、そつと其の手を握つた。――男は默つて其の儘にして置いて、矢張り靜かに歩いた。

女は何事をか待ち構へて居るものゝやうに、男の顏を眤と見詰めて居た。――其の眼は火のやうに輝いて居る。けれども、男は少し頭垂れた儘矢つ張り默つて歩いて居るので、女は焦れつたさうにほつと一つ溜息を吐いて見せて、

「先生、何を考へて居らつしやるの。」と、顏を覗き込んだが、それでも男は默つて居る。

女は握つた男の手を自棄らしく振つて、

「ね、先生何を考へて居らつしやるのよ。」

「え。」と、男は怪えたやうに顏を上げて、「何か仰言つたんですか。」

「あら、あんなことを――何うせ私の云ふことなどお耳へ入れては下さらないんですわ。」

「まあ、そんなこと！何を仰言るんです。」と呆れたやうに云つて、拗ねて顏を背けた女のすつきりとした横顏を、美しいと思つて眺めた。――何時か二人の足は止まつて居たのである。

「ね、最う一度仰言つて下さいよ。」と、男は賴むやうに云ふと、女は一寸しなをして、

「何を考へて居らつしやるのつて、お訊ねしたんですわ。」

「さうですか。――別に何も考ちや居なかつたのです。」

「だつて人の云ふことが耳に入らない程考へて居らつしやつたんでせう。――屹度幸子さんだの、芳子さんなどのことを思つて居らつしやつたのだわ。」

「いゝえ其の……今日は實にお芽出度う御座います。園遊會も中々盛大でしたね。」

「あら、あんなことを云つて誤魔化して居らつしやるわ。」と、涼しい眼元で優しく男の顏を睨めたが、直ぐ機嫌を直して、「先生の獨奏が一番好かつたわ。――私、聽いて

て涙が滾れてよ。」

「え、貴女が涙をこぼして下すつたのでしたか、難有う。そんなこと貴女から伺ふと何だか勿體ないやうな氣がします。他の人は何うでも好いのですが、只貴女だけに聽いて頂きたかつたのでした。――其のお言葉で私は實に滿足です。」

「今日の獨奏はほんとに好かつたわ。皆そりや感動して聽いて居たので、私も何だか鼻が高いやうな氣がしたわ。」

「さうですか。――實に難有う。」

「私、あそこのどこが一番好かつたわ。照りこそ渡れ祕事の、深くも包む肌柔に……」と小聲で歌つて見て、其の時の情緒を追うて波打つやうに搖れて來る感情に思はずほつと幽かな溜息を洩した。

「まあ、何て美しいチャームのある音樂でしたでせう。――思ひ出しても身體が自然と顫へて來るやうよ。」

「そんなにお氣に入りましたか。それで私も實に滿足です。」感謝と喜びに躍る心を籠

めて、女の手を犇と握つた。――女も強く握り返した。ひつそりとして毛筋の動く程の物音もしない四邊には、土の匂ひや、水の匂ひや、木の肌の匂ひなどがもや〳〵と入り混つて漂うた。飽まで靜かな春の夜の温かみを含んだ柔かな空氣は、顏や身體をしつとりと包んで、男も女も胸の鼓動が高くなつて、息は次第に喘んで來る。――二人の手はしつかりと握り交された儘であつた。

暫くしてから女は、

「先生、舟へ乘つて緩くりお話して下さいな。」と甘へるやうに云つて、手を離した。

「えゝ。」

男も女の後に從つて、二人は又ノロ〳〵と歩いた。

やがて彼等は、ひた〳〵と忍びやかに水の寄せて居る汀に降りると、其所の杭に舫つてあつた小舟に手を取つてひらりと飛び乘つた。そして男は手早く綱を解いて、櫂に力を入れて陸を押した。と、見る〳〵舟は汀を離れて、少し白く光りを帶びた滑らかな水の上を辷つて進む。女は肘を舟縁に持たして快く身體を搖られ乍ら、巧みに櫂

を操る男の白く細い手元を眤と眺めて居た。舟が進むに連れて少し風が起つて、少し上氣せ氣味に熱つた頰に爽かに當つた。――二人は全で幸福の中に身を浸して居るやうに、歎びと、樂しさとに滿たされて其の儘口も利かなかつた。男も何時か櫂を廻す手を止めたので、舟は二人を乘せて池の面に浮いた儘、動かなかつた。

しつとりと水氣を含んだ空氣の中に、何處からともなく木犀の香りが薄く漂つて、偶と鼻に來た。

「あら、木犀の香ひがしてよ。」

女は初めて口を切つた。

「さうですか」と、男も鼻を働らかしたけれども、何の香ひもなかつた。

「私には分りません。」

「さう、先刻は確かに香つて來たんですけれど……。」

男は何時か又櫂を靜かに操り始めたので、舟は緩かに進んで居る。

「しかし」と、男は思ひ出したやうに云つた。「貴女のやうに音樂の趣味を解して居らつしやる婦人が、此の上流社會にせめて三人でも五人でもありましたら、日本の音樂もきつと發達するのですがなあ。少なくとも今の儘ぢや居ないのですが。――何しろ、日本の音樂界の現狀ぐらゐ憐れむ可きものはありませんからね。世界の文明國として恥かしい次第ですよ。」

「さうでせうね、全く。ですが私など未だ〳〵先生に敎はらなきや、音樂に貢獻するなんてこと、とても思ひ及ばないことですわ。」

「何ういたしまして、最う私の方で敎へて頂くぐらゐなものです。――それに貴女は音樂ばかりでなく、其の美しいお顏が……。」と薄く笑ふ。

「いやよ先生」と女は其の顏を嬉しさうに流し眼に見て、「先生は隨分外國でいろんな貴婦人方と御交際なすつたでせうね。」

「えゝ。ですけれども、貴女のやうに、私の心の底まで捧げようと云ふ婦人は、一人もなかつたのです。」

「あら、あんなお上手なこと！」と、優しく睨めた。

「いゝえ、上手なぞ云ふものですか。」と強く打消して、「たとへば今日お庭の櫻を拜見しましても、さう思ひました。佛蘭西の百合、英吉利の薔薇、愛蘭の蓮華草、蘇格蘭の薊、日本では春は櫻、秋は菊ですが、其の中でも日本の菊のやうな花は世界にはありません。人間で云ひますと恰度貴女のやうに、美しくつて、氣品があつて、それで……。」

「最う止して頂戴よ。――先生こそ本當に……。」

「えゝ私が何うかいたしましたか。」

「いゝえ。」

「本當に何うしたんです。」

「皆でさう云ひますの。」

「何う云ふのです。」

「先生はあの……。」

「私はあの……。」

「先生は……。」

「私は……？　厭な奴だとでも云ふのでせう。」

「さうぢやありません。皆で先生を賞めて居ますわ。」

「これは何うも恐縮ですな。ですが、私は多くの人には賞めて貰はなくとも、鞆音さん、貴女一人に賞めて頂けば、それで嬉しいのですよ。」

「先生、本當？」

「本當ですとも。」と強く云つて、「私は貴女を僞つたら、それこそ天の罰が當ります。」

「では先生もそんなに私を想つて下すつて？」

「え、想つて居ります。」

男はキッパリ云つた。

「私、嬉しい！」と強く云つて其の後を何か言はうとして少し躊躇つたが、やがて思ひ切つて、

「私もとうからあの……。」と、面を男の膝の上に伏せて了つた。白い襟脚にこぼれ

た黒い髪が慄へて居る。――舟は何時か築山の下の汀に着いて、靜に搖れて居た。

「鞆音さん、それは本當ですか。」

暫くしてから漸く云つた男の聲は上ヅヽて、少し顫へを帶びて居た。

「本當ですとも！考へて見て下さい。女の身で、こんなことに嘘や僞りが言へるものですか。」

「あヽ、それが本當でしたら、私はどんなに幸福でせう。」と、男は嘆息するやうに云つた。

「未だ疑つて居らつしやるの。」

「疑がふわけぢやありませんが。」

「私、先生を僞つたら天の罰が當りますわ。」

と云つた其の言葉は、火のやうに男の胸を打つた。

「あヽ、何う云つたら好いか……私は口に云へない此の幸福を、神に感謝します。」

と息も喘んで熱した聲で云ふ。

「私も！」

「貴方も？」

「えヽ！」

「あヽ！」と只溜息を吐いて、そつと腕を丸く伸すと、女の首を抱へた。そして、二人の脣は強い力を以て相觸れた。――先刻から築山の上の亭に人が居ることには、二人とも少しも氣が付かなかつた。

やがて、男はそつと離して、

「ですが……。」と何か云ひかけて、考へ込んだ。

「ですが何です？云ひかけてお止めになつて、何だか氣になるぢやありませんか。」と心配さうに男の顏を覗き込んだ。

「えヽ別に……。」

「仰言つて下さいよ。」

「先のことを考へると何だか心細くなつて來るのです。」

「何うして？」

「だつて考へて見れば貴女は子爵家の御令嬢で、私は身分もない音樂師でせう。とても釣合はない仲ですからね。先に行つて悲しい思ひをするよりも、一そ今の中に、諦めた方が却つて好いかとも思ふのです。——私だけが苦しい胸を抑へて辛抱すれば濟むことですから。」

「それぢや、私は何うなつても好いんですか。」と、女は早や涙聲になつた。

「いゝえ、貴女の御爲めを思ふからです。——貴女の將來の幸福の爲めに私の胸に燃えてる此の愛を犧牲にするのです。」

「そんなこと御心配には及ばないことよ。私の心一つで何うにでもなることですもの。」

「でも、貴女にはお父樣がおありなさるぢやありませんか」

「父なぞ何と云つても構ふもんですか。自分だつて好き勝手に妾など家に置くのですもの、私の云ふことを聞かないて法はありませんわ。」

「それもさうですが、それでは却つて私の爲めに御一家に騒動を起すやうなものですから。」

「いゝえ、私が斯うと思つたことは誰が何と云つても構やしませんわ。——一體、妾の久世を家に入れて置くことは私の氣に入らないから、何うかして折があつたら追ひ出して了はうと思つてるのですもの。」

「しかし、現在彼の方には貴女の弟御の秋夫さんがあつて見れば、貴女の御一存でとてもさうは行かないでせう。」

鞆音は、さも厭はしいものにでも觸つた時のやうに、眉を顰めて、

「秋夫を、私の弟だなどゝ言はないで下さいまし。彼は妾腹ですから、そんなこと言はれるだけでも、私は汚らはしいのですもの。——それに最う近々の中に伊豆の長安寺の方へ遣つて了ふのですから、さうなれば私の心一つで何うともなりますわ。」

「しかし、それでは若しや貴女のお身に御難儀が掛るやうなことがあつてはと……。」

と心弱く云ひかけるのを、「好いことよ。」と強く抑へて、「貴方は存外臆病なのね。——

愛の爲めにはどんなことも覺悟の上ですわ。」

「さうですと、私は幸福なんですが……。」

「大丈夫ですから、安心して居らつしやい。」

「えゝ、賴るのは貴女の愛だけなんですから。」

「貴方もお心が變つちや厭ですよ。」

「私に、何でそんなことがあるもんですか！」

「あゝ、それで私漸つと安心いたしました。」

舟は人の重みに搖れて、何時か汀から少しばかり離れて居たのを、男は再び岸に着けて其所に舫つた。

「長話して居て大分遲くなつたやうですね、最う歸りませう。」

「えゝ。」

江守は鞆音の手を取つて陸に降りた。と、思ひ掛けなく築山の上の亭の中で何か人らしいものゝ氣勢がしたので、鞆音は思はずぎよつとして足を止めると、聞耳を立て

た。けれども、それ切り別に何の氣勢も聞こえなかつた。

「誰か居たやうぢやなくて？」と、小さく男の耳に囁いた。

「何か聞こえたやうですけれども、眞逆人間ぢやないでせう。」

「さうか知ら？」

と、半ば疑ふやうに云つて、何か不安らしくせか〳〵と其の邊に氣を配つた。

「兎に角、一寸行つて見た方が好いわ。」と、男を誘つて築山へ上つて行つたが、偶と足音を忍ばして物影に身を潛めようとする人影を、鞆音は目敏く認めた。

「おや人よ。」と、流石に胸は高く鳴り出したがそれでも氣を落着けて、正體を見極めやうと、朧月の薄明りに眤と透して見た。

髮を銀杏返しに結つて、色の白い十八九の女の姿をしつかり認めた。

「お澄！お澄ぢやなくて？」

突然鞆音の口から、怒りを含んだ甲走つた聲が迸るやうに洩れた。

物影に身を忍だせやうとした人影は、はつとして立竦んだが、遽かには返事も出な

かつた。

「お澄！一寸お待ち。」と、邪慳に呼んで、づか〳〵と近寄つて行つた。

「お澄！」

鋭い聲は三度び恰かも鷹に睨まれた小雀のやうに顫へて居る可憐な少女の耳を打つた。

「はい。」

「お前は先刻から何だつて人の話を立聞きしてるの。失禮ぢやないか。」

「はい。」

「はいぢや分らない。何故立聞きなどするんです。」と、ぢり〳〵とお澄の身體に迫つた。

お澄は其の烈しい劍幕におづ〳〵身を避けるのであつた。

「お待ちと云ふに！」

「はい、何うぞ御免遊ばして……」

「お前は此所で何をしてゐたのです。――一體、人の話を立聞しろと誰が言ひ付けました。」

「お嬢樣、私、決して立聞きなどして居たのぢや御座いません。先刻から頭痛がして仕方がないものですから、それで暫く此處に休まして頂いて居りましたのです。貴方方がこんな處に二人切りで居らつしやらうとは、夢にも氣が付きませんで御座いました。」

「嘘をお言ひ。暗くなつてから一人でなぞこんなところに休んでる者があるものですか。屹度あの久世に言ひ付けられたのだらう。」

「いゝえ、お室樣は決してそんなことを……。」と、言ひ譯しようとするのを鞆音は鋭く押つ被せて、

「屹度久世が言ひ付けたに違ひありません。――お前、久世の探偵になつてるのだねえ。」

「滅相なことをお嬢樣、お室樣が何でそんなことを私などに仰言るもので御座いませ

う。」

「それでは何故人の話を立聞きしてるの。お前は不斷から何ぞと云ふとお室様〳〵と妾の肩を持つて、私を輕蔑するのねえ。」

「まあ、お嬢様、私決してそんな意は些しも御座いません。」

「嘘をお吐き、ないことがあるものか——久世に言ひ付けられたのでなければ、秋夫に言ひ付かつたのだらう。」と、眼元が一層險しくなる。

「若様には夢にも御存知ないことで御座います。私が惡うございましたから、何うぞ御免遊ばして——。之れから氣を付けます。全くお嬢様が居らつしやるとは夢にも存じませんでしたものですから……。」

「いゝよ最う聞かなくても可いよ。——久世にさう云ふが好い。お嬢様は江守先生と舟の中で貴方の讒訴を云つて居ましたと、さうお言ひな。」と、突離すやうに云つた。

お澄は口惜しさうに、其の白い齒で屹と下脣を噛んだが息を呑んで思ひ返した。

「何うぞ御免遊ばして……。」

燃ゆるやうに切ない胸を抑へてさう云つて俯向いたお澄の面色は蒼褪めて、脣のあたりの筋肉は痙攣やうに微かに顫へを帶びて居た。

鞆音は鋭い眼付をして其の樣子を睨と見て居た。

池の畔では雌に媚びる蛙のグル〳〵と咽喉で啼く音が恰かも土の底からでも響いて來るやうに、忍びやかに聞こえて、風もない靜かな夜を、咲き溢れた櫻の花の老いたのがホロ〳〵とこぼれる。

其所へ突然暗がりから、

「あ、お姉さま、此處でしたか、僕は尋ねて居たところでした。お父様が鳥山さんと夜櫻を眺めるからつてお呼びです。」と聲をかけられて、鞆音は振り返つた。

其所には十六七の青年が立つて居た。それは、鞆音とは腹違ひの妾腹の弟で名は秋夫と云つた。女にでもして見たいやうな色の白い、優しい顏立で、すつきりと高い鼻、緒つた脣、キリ、と濃い眉の下に、二重瞼の凉しく澄んだ瞳が、賢し氣にチラ〳〵と瞬く。

「……」。鞆音は返事もしないで邪慳な眼を秋夫の上に移した。

「お姉さま。」

秋夫は姉の其の眼色を訝るやうに再び呼ぶのを、鞆音は鋭い聲で抑へた。

「何ですよ。私は貴方に、姉さまと言はれる身分ではありません。人樣の前で私をお姉さまなぞと云つておくれでない。」

「お姉さま、何うかなすつたのですか？」

「何うもしやしないわ。私は、貴方のやうな血の汚れた弟を持つて居ないと云ふことだけなの。」と、白々しく云つて顏を背けた。

「え？」秋夫の聲は少し顫へて居た。

「貴方は妾の子さ。貴方がある爲めにお父樣の不道德が世間へ知れるやうなものですよ。」

「……。」秋夫は、其の美しい齒で屹と下脣を嚙むと、面を伏せた。——長い睫毛には見る〳〵涙が一ぱい溜つて來る。

先刻から其所に突つ立つて居た江守は、

「まあ、鞆音きん、そんなに一克に云ふものぢやありません。——お父樣が呼んで居らつしやると云ふのですから、さ、皆で彼方へ參りませう。」と、宥めるやうに云つた。

江守が口を出すと、鞆音は却つて聲を慄はして、

「いゝえ、私口惜しいの。口惜しくつて堪らないの。——私は佐原家の正しい血統を受けた者でせう。それが、秋夫さんのやうな汚れた血を享けた者と一緒にされて、姉弟だなぞと言はれると思ふと私こんな口惜しいことはない！」と、前齒に屹と袂の褄を嚙んで、身を揉んだ。

「お孃樣、それは餘まりで御座います。若樣はたとへどの樣なお腹をお借り遊ばしても、矢張り殿樣の血統をお享け遊ばした正しい御身では御座いませんか。」

今迄蔭の方に小さくなつて居たお澄は、餘りの言葉に最う堪り兼ねて、一歩前に進むと、主人でも容赦はないと云ふやうに、屹と云つたのである。

鞆音の眉は見る／＼キリ、と上つた。

「おや、お前は能くまあそんなことが言へるのね。――いゝわ〳〵。皆で私を苛めやうと云ふんだから……。」

「だつてお嬢様……。」

お澄が何か言はうとするのを、秋夫は優しく止めて、

「お姉さま、僕が惡かつたんですから勘忍して下さいね。貴方が姉弟だと言はれるのがお厭なら、僕は…僕はもう姉さまとは言ひませんから。」と、ホロ〳〵と涙を滾して、

「お澄、僕はねえ、僕は妾腹の子に違ひないのだから、何と言はれても默つてるより外仕方がないのだ。――お澄、妾腹の子なら何故汚れてるのだらうねえ。」と、儚なげに云つて俯向くと、再び屹と下脣を嚙んだ。

お澄も涙に咽んで、

「若様、最う何も仰言いますな……。」

「妾腹は汚れてないと云ふの、妾と云ふものは貞操を賣つて男の玩弄になるものゝことだよ。――人間と動物との違ひがないのだよ。」

「お姉さま。幾ら何でも、僕の前でそんなことを仰言るのは、餘り酷いぢやありませんか。」と、怨ずるやうに云つて、姉の顏を眺めた。

輒音はかさにかゝつて、

「何が酷いの――私の云ふことを酷いと思つたら久世を怨むが好い。私は當然のことを云つてる意りよ。」

秋夫は聲を呑んで泣いた。――お澄も、我がことならねど、餘りに邪慳な言葉の口惜しさに、眉を刻んで貰ひ泣く。

「泣くが好い。そんな涙になど些つとも驚きやしないから……。」

と昂然と云つて、手持無沙汰に突つ立つて居る江守に向つて、「さあ、彼方へ參りませう。こんな處に居ても不愉快ですから……。」

さう云つて二人は五六歩歩いたが、肩を並べて左に折れると、深い樹立の蔭に其の妾は見えなくなつた。

お澄は涙に濡れた眼を口惜しさうに見張つて、二人の後姿を見送つて居たが、

「若様！」と叫んで両手を乳の下に遣ると、犇と自分の胸を抑へるのであつた。

「お、お澄！」之も顔を背けて涙に咽んだ。

「さぞお愁いことでせう。――傍で聞いて居る私でさへ、ほんとに口惜しくて〳〵……殿様にさう仰言つて、お姉様が餘り我儘をなさらないやうに、お願ひなさいましよ。」

「だけども、そんなことを云つてもお父様に御心配をかけるばかりだからねえ。――屋敷に居てこんな愁い思ひをするぐらゐなら、僕は早く長安寺の方へ行きたい！」

「えゝ長安寺へ……。」

「あゝ。――お澄！人間は愁いものだねえ。」

「ほんとに、若様……。」

惨として相對した二人の頭の眞上を、五位鷺が叫ぶやうな聲に鳴いて通つた。

其三

不斷一寸した客の時に、些い〳〵使ふ客間を兼ねた應接室には、先刻から明るく電氣が點つて、郷かしい其の光りは美しい花模様のカアペットや、飾り付けられた器具などにキラ〳〵と光つて居た。子爵はアーム、チェヤーの柔らかいクションの上に身を埋めるやうに置いて、香りの高いシガアの煙を緩かに吹かして居た。何處か未だ元氣の滿ち足りないやうなところはあるが、それでも、赭ら顔のがつしりとした骨組の顔丈な身體に、大島の重ねをべつとりと着流して、大巾の白縮緬の兵子帶をゆつたりと其の太い腹に卷き付けたところは、長い間患つた病後の人とは思へない。テーブルを間に置いて向ひ合つた相手は當時海軍部内の重鎮と稱せらるゝ子爵の親友海軍中將鳥山則人で、今日の園遊會に招かれた儘未だ留まつて靜かな春の夜の花を賞し乍ら、閑談に耽つて居るのであつた。維新の當時、或は西南の役などに、官軍に屬して

砲煙彈雨の間を潜つた時のことやら、海外に遊んだ時の失敗談やら、日清戰爭の時の海戰など、話はそれからそれへと果しもなく賑つて、興熱して來ると中將は其の便々たる腹を叩いて、雷の如く大笑するのであつた。

「どうだ、ウキスキイでも遣らんか。」

と、話の切れ間を待つて主人の子爵がベルを押すと、中將は急いで止めた。

「いや貴方が飲まんちや一向充らん。」と置時計を眺めたが、「おう、最う八時を過ぎたか。——それちや最う一ぱいコーヒーを貰はうか。」

「さうか、ちやコーヒーをさう言はう。」と、又、ベルを押した。

暫くして、

「お召しになりましてゝ？」

と、ドアーを開けてしとやかに入つて來たのは久世であつた。肉付きの好い面長な顏に眼鼻立が揃つて、どつしりした大柄な身體に、黑茶地に紹を織り出した潰し縮緬の着物を着て、褊珍の丸帶を高く締めた。其の大樣な姿には、何處か自然に供はる氣

高い品があつて、子爵夫人としても恥かしからぬ風采であつた。——久世は、子爵が昔、政爭の巷に其の手腕を揮ふ劇務の間に、偶々小閑を偸んで鬱を散ずる爲め折花攀柳の風流を樂しんだ砌り、當時何家何子と云つて嬌名を歌はれて居た今日の久世に深い馴染を重ねた。それで、緣あつて其の腹に情けの胤の秋夫まで宿したので、到頭根引をしたのであつた。それが十四五年以前に夫人が亡くなると共に、家に入れたのである。さう云ふ卑しい境遇に居た女にも係らず、身を謹んで能く家を治めた。雇人や親戚の者の信望を得たばかりでなく、子爵の不愍も一層加はつたのだ。

子爵は少しばかり身體を曲げて、入口のところに立つて居る久世を見ると、

「おゝ、久世か。——澄は何うしたんだ。」

「あの、先刻方頭痛がするとか申して、お庭の方へ參りましたやうで御座います。」

「ふむ、今日餘り忙しい思ひをさしたからな——ちやお前コーヒーを誰かに代へさしてくれ。そしてお前も此所へ來て鳥山さんをもてなしたら何うぢや。」

「いや、最う可也遲いから、我輩はコーヒーを一つ御馳走になつたら、失敬するとし

よう。お蔭で今日は大いに愉快ぢやつた。」

「まあ好いさ。」

「ぢや、只今直ぐ……。」

と靜かにドアーを押して出て行く久世の後姿を、中將は眤と見送つて、

「久世さんはあれで却々感心さな。」と、獨言のやうに感嘆の聲を洩した。

「うむ。まあ何うにか遣つてくれる。」と、口では何氣なく云つたけれども、子爵も内心は嬉しかつた。

開け放した窓からは庭の深い植込が小暗く見えて、櫻の花の雪のやうに咲き溢れたのが其の暗い闇の中にハラ〳〵と散つては消える。――二人は其の風情ある眺めに、言葉もなく恍つとりと見惚れて居た。――灰皿の上に置かれたシガアから、薄紫色の煙が緩かに立上つて、室の中に靜かに迷ふのであつた。

「お父さま。」

其所へ、涙含んだ聲で云つて、入つて來たのは秋夫であつた。――其の後にはお澄

が、之れも睫毛に涙を溜めて、おづ〳〵從つて居た。

「おゝ、秋夫か、何うしたんだ。」と、子爵はそれを見ると興醒めたやうに眉を寄せた。

「お父樣、何うぞ僕を早く長安寺へ遣つて下さい。」

中將も秋夫の泣いた顏を見て、

「何うしたんだ。又姉さんに苛められたな。」

「お澄、お前が付いて居て何故よく取りなしをせんのぢや。」

と、子爵は、お澄を睿めた。

「いゝえ、お父樣、僕は汚れてゐますから……。」と、歔欷る。

「そんなことを誰が云うた？男の癖にそんな女のやうな小さな氣で、何うするぢや――。」

と中將は秋夫を勵まして「佐原さん、貴方の家庭にも困り切るのう。こんな有樣で貴方何ともお思ひにならんか。」

と、先刻の愉快らしい色は顏から消えて、ピク〳〵と眉根を顰める。

「いや、斯う云ふ有樣をお目にかけて、全く面目がない。」と、子爵は如何にも恥づるやうに云つて、睫毛を屢瞬いた。

「お父樣、貴方は何も鳥山樣に面目を失することは御座いますまい。」

何時の間にか歸つて來て其所に立つて居た鞆音は突然聲を勵まして云つた。夜露に濡れた面がしつとり蒼味を帶びて、束髮に結んだ髮の根元に、櫻の花のこぼれの一片が止まつて居た。——江守も其の傍に並んでゐた。

中將は其の烱々たる雙の眼に二人をじろりと眺めて、

「貴女は默つとれ。——貴女のやうな令嬢があるから、佐原さんは面目を失するのぢや。」

「はい、大きに左樣で御座いませう。今の新しい敎育を受けました者と、黴の生えたやうな舊式の頭腦を持つて居らつしやる方とは、自然理想が合はないので御座いますから。」

「はゝは……貴女は中々理窟だけは達者だ。理想家ぢや。其の理想家の身持は何う

ぢやらうな。——女は女らしうして居れば好いぢや。」

「私が女らしくないと仰言るのですか……？」と、口を少し歪めて思はず一足進んで、未だ何か言はうとするのを子爵は靜かに抑へた。

「まあ、待て。——いや、何事も私が惡い。妾などを置いたのがとんだ不心得ぢやつた。——其の爲めに此の子にも、」と、秋夫を腮で指して「飛んだ悲しい思ひをさせる。」

「妾？何が惡いのぢや、一向構はん。貴方がそんな弱いことを云ふから、此の理想家が付上るのぢや。妾を以て馬にかへるは男子の本分ぢや。」

「それで、宜しいものでせうか。——假りにも人の夫たり、人の父たる身が妾なぞを置いても宜しいものでせうか！」

「おゝ、宜しいとも、男の器量で置く以上は、三人五人の妾を蓄るのは一向構はん。」

「それは餘り亂暴なお話のやうですな。——申すまでもなく西洋文明國の家庭に置きましては……。」

と、其の時江守が口を挿んで、何か言はうとするのを、

「お前は默つとれ！」と破れ鐘のやうな聲に一喝して眉を上げて江守を睨み付けたが、やがて鞆音の頭を見て、「貴女の其の髪は何だ。菌の化物ぢやあるまいし、あゝ、おつ母さんが生きて居て其の頭を見たら、何と云つて嘆くことぢやらう。又、江守さんとか、お前の頭も假りにも男子たるものがぢや、婦女子輩の如く油など塗りつけて、蜻蛉のやうにテラ〳〵光らし居る。其の態は何たることぢや。今の世は女は女らしくしないでお轉婆ぢやし、男はぢやらくらと女のやうぢやし、之れで十年も過ぎたら男女入れ代りになることぢやらう。斯う云ふ奴等の態を見ると、實に胸糞が惡うなるわ。」と、吐き出すやうに云つて、江守の頭を睨み付けた。

鞆音はつんとして、

「鳥山さん、餘り失禮ですね。――十八世紀の方には、二十世紀のスタイルは分りませんよ。」

「うむ。私には分らん。――いやはや佐原さん、苦々しいことぢやのう。」と、嘆息した。

「妾などを置いても好いと仰言るので御座いませう。――妾腹の不純潔な弟と、私と同等に御覽なので御座いませう。」

「不純潔？」と、鳥山の長髯はブル〳〵と慄へて、光つた雙の眼は鞆音の顏に眞直ぐに來て居る。

「はい、秋夫は血統の汚れた者で御座います。」と、臆するところなく、キッパリと答へた。

「そんなに血統々々〳〵と云ふたら、終ひには兄妹同志夫婦にならなけりやならんわ。馬鹿な。度に過ぎて血統を重んずるのは虛飾ぢや。虛飾の爲めに、生きとる人間を生き乍ら殺す。そんな弊害は宜しく匡正すべしぢや。」

「小父さん、最うそんなに姉樣に仰言らないで下さいまし。僕は出家になつても好いのですから、早く此の邸を出て了ひたいのです。――お父樣、早く長安寺の方へ遣つて下さい。」

今迄瞑目して居た子爵は、情を含んだ目に可憐らしさうに秋夫の顔を眺めて、

「お前が其の氣で居てくれゝば何より都合が好い。」

「何だ。貴方は秋夫を坊主にする氣か。」

「うむ。先祖からの家法で五代目毎には一人出家をさせにやならん。俺には男は秋夫一人よりないから、已むを得ん。秋夫は疾から出家さすことに決めとるのぢや。」

口では立派に云つたけれども、流石に黯然として涙を呑んだ。――妾腹とは言へ、只一粒種の男の子である。それに妾腹とあつて我儘勝氣な姉からッケ〳〵と蔑視まれ、未だ十六や十七の惡戯盛の男の子がそれを辨へて、自分でも肩身を狹くして早く出家になりたいと云ふ。其の悲しい心根を親の身として思ひ遣れば、一層不憫が加はる。子爵の胸には口に言へない男の切なさがあつた。

江守は何時の間にかコソ〳〵と見えなくなつた。そして、コーヒーを淹れて來た久世が思ひ掛けない此の場の樣子に、避けるには避けられず、先刻から胸の潰れるやうな思ひをして立つて居た。

其の時堪らなくなつて、「若樣、御出家のことには決して御異存が御座いますまいねえ。」と、涙に濡れた眼で、そつと秋夫を見るのであつた。

「あゝ。僕は邸に居るよりも、寺へ行つた方が好いよ。」

「馬鹿なことを云ふな。家法が何だ。――秋夫君、男子がそんな卑怯な考へを持つて何うするか。出家したり、隱居したりするのは、戰場に臨んで逃走するやうなものぢや。」

「でも、僕は此の邸には居たくないのですもの。」

「居たくない？」

「え。――早く寺へ行つた方が好いのです。」

「然うぢやらう。」と、子爵は引取つて、「秋夫、俺は何もお前を虐待するわけぢやないが、先祖からの家法もあることだし、それに、邸に居てはお前も亦何彼と心苦しからう、――何事も運命ぢや。忍んで寺へ行つてくれ。」

「其の方が秋夫の爲めで御座いませうよ。」と、鞆音は捨臺詞のやうに云つて、ぷつと

室を出て行つた。

久世は顔を背けると、瞼に溢れて來る熱い涙を、そつと拭つて、

「お嬢樣の仰言る通り、若樣の爲めには却つて其の方がお幸せで御座います。」

「貴方もさうお思ひですか。」と、中將は鞘音の行つた後を見送つて居た眼を久世の上に移して、眤と眺めたが、やがて太い息を洩らして、「うむ。さうぢやらう。」

と、左の手に白髯をしごくと共に、大きく頷いた。

「何事も俺の罪ぢや。」と、子爵は秋夫の手を取つて、「寺へ行つたらよう辛抱してくれ。」

「若樣は愈々御出家遊ばしますので……。」

と、久世と、お澄とは双の袂にひたと顔を蔽うた。

子爵は暗然として顔を背けた。

「厭になつたら還俗しろ、俺が貰はう。」と鳥山中將は秋夫に云つたが、椅子を立つてつか〳〵と子爵の傍へ進むと、

「佐原さん。そんなに面倒なら、久世さんも一緒に俺が貰ふ、何うぢや。」

と、沈默した子爵の肩を叩いて、大笑した。

第二章

山上の夜は更けるに從つて、物悽いまでの靜寂が、森々と四邊に迫つた。其の靜かさを破つて、遠くの方から、又は近くから、時々猿猴の群の怪し氣な叫びが際立つて聞えて來るが、それが止むと、世はさながら生物と云ふものゝ絶滅した幾百萬年の後の世界でも思はせるやうに、毛を吹く程の氣勢もなく、ひつそりとして靜まり返る。

――伊豆の國結城山、晝ならでは樵夫も上らぬ一千尺の其の山の頂に、此の恐しい夜を罩めて淋しく瞬く灯影が一つあつた。それは、山巓に近く少しばかり平らな地があつて、其所に櫟や杉の大木が鬱々と茂つた。其の間に挾まるやうに建てられた、家とはほんの名ばかり、枯草で掩うたやうな粗末な小屋から洩れる灯であつた。中は庭にも座敷にも只一間の見通しで、土間に厚い板を少しばかり並べて、其の上に荒筵が四枚ばかり敷いてある。其所が人間の寢起するところと見えて、古ぼけてぼろ〳〵にな

つた赤毛布を一枚被つて、切なさうに唸き乍ら苦しんで居る老人が横はつて居る。幾月にも刈つたことのない髪も髯も薄のやうに茫々と生え伸びて、二つの穴のやうに落ち窪んだ双の眼を時々見開いては、光りの衰ろへた鈍さうな眼に、何物かを求めるやうにギロ〳〵四邊を見廻すのであつた。しかし、家の内には、人間の住むに必要な道具らしいものは何一つなく、蓋の壞れた土鍋や、緣の缺けた片口、口の落ちた德利など、普通の家では最うとつくに塵埃箱に投り込まれて居さうな、勝手道具が五つ六つゴロ〳〵と轉つて居る外は、家根からも、壁からも外の見える家の中は、全で空家同然である。爐にしてあるらしい土間の一部分にはトロ〳〵と火が燃えて、其の火の明りで仄かに眺められる家の中の有樣は、二目とは見られぬ程悽慘なものである。

老人は苦しさうに身を足掻いて起き上りかけたが、到底其の力はなくて、ばつたりと倒れる。暫くの間は其の儘、潰されたやうに横はつて唸いて居た。と、力の拔けた聲を切なさうに振り絞つて、

「音や、音。」

と、トロ〳〵と燃え上る火の傍に、犬のやうに丸くなつて寢て居る十六七の男の子を呼んだが、しかし、深く眠り入つた彼は、急には起きさうな氣勢も見せなかつた。塵埃に汚れた髪が蓬のやうに額を隱すまで伸びて、其の尖はチリ〳〵と卷れて居た。ウヂャ〳〵と生毛の一面に生えた赤い顏から襟元にかけて、肌が埋もれる程垢が一ぱいたかつて、だらしなく口を開けて眠り込んだ其の顏に焚火が赤く映つて居る樣は、全で獸のやうだ。――老人は續けて呼び起す元氣もなく、幽かに唸つて居た。外には何時か風が出たと見えて、若葉を渡る其の音が、忍びやかに聞えるのであつた。

「音や。」

再び斯う呼んだ老人の皺枯れた聲は、靜かな四邊の空氣を搖つて響いた。が、それも只一聲で、又元の沈默に歸つた。――爐に焚べられた粗朶が燃え退つて、火は何時か微かに、家の中も暗くなつた。

「音や。」

老人は又哀れな孱弱い聲で呼ぶ。

「音次。起きてくれろよ、父は死ぬわ。」

乾からびた身體から絞り出すやうな聲は、四度び周圍の寂寞を破つた。――其の勢のない聲が、深く眠り入つた魂に通じたと見えて、寢返りを一つ打つと長く伸びをして、うつそりと起き上つた。そして、最う粗朶が燃え盡したので、殆んど闇のやうに暗くなつた中に眼を光らして、爺の唸き聲を聞いて居たが、

「父樣、呼んだゃか。」と、間の延びた聲で聞いた。

「おゝ、音や、兄やは未だ歸らねえやうだか。」病人の貧しい聲は闇の中に哀れ氣に響いた。

「未だ歸らねえ。」

「あゝ、兄やが早く歸つてくれゝば好いんだが……」と、獨言のやうに呟いて、其の儘默り込んでしまつた。――闇の中からは、切なさうな息ざしが絶え間もなく聞えて來る。

音次はのつそりと立上ると、庭の隅に積み重ねられた粗朶を一束爐の傍に持つて來

て、四五本抜くと、僅かに消え殘つた火の中に焚べた。白い煙のみ上つて、容易に燃え付かないのを、音次は兩の頰を丸く膨らして、息の續く限り吹いた。――ぱつと燃え上る赤い焰と共に、家の中は薄明るくなつた。

「あゝ、切ねえ。」

病人は僅かに寢返りを打つと唸いた。

「切ねえだか、父樣。」と、父の方を眺めた。其の横顔に焚火は赤く映つて居る。

「音、兄やは未だかなア。」

「未だいよ。――何うせ今晩は歸らねえんだべえ。」

「さうかな――あゝ惣太が歸つてくれると言ひてえことがあるんだが、……。」と溜息と共に何事をか考へるやうに、それ限り默り込んで了つた。音次は、燃え上る焰にほと〳〵と身體の心から温まつて來る快さに、又甘い眠氣を催して、瞼が次第に重くなつて來る。と、うつ〳〵と居眠りを始めた。

「あゝ――あ。」

やがて病人は長い溜息を一つ吐くと、又、音次を呼ぶのであつた。

「音や。」

しかし何の返事もないので、「又、眠つたんか。」と、口の中で呟いた。

「音次。」

「父樣、呼んだいか。」

ポカリと鈍さうな眼を開いて、父の方に面を向けた。

「あゝ、お前に話して置きてえことがあるだで、一寸くら此所へ來てくれ。」

音次はのつゝそりと立つと、眠い眼をこすり乍ら父の枕元に突つ立つて、

「何よ、父樣。」

病人は、吾が子乍ら其の心の空虛な有樣を眺めると、つく〳〵と情けなさが胸に迫つた。――こんな子を殘して死んで行くのかと思ふと、熱い涙は止め度もなく瞼に溢れて、仰向いた目尻から冷たく耳の邊りへ流れるのであつた。

「何だよ。」

音次は矢張り突つ立つた儘で云つた。

「まあ、其所に坐れよ。――父が云つて聞かしとくことがあるだに……。」

父にさう言はれて、音次は初めてぺつたりと坐つた。そして、的もない空に眼を遣つて、けろりとして居る。――其の愚かしい顔付から、締りのない姿を見るに付けても、病人の心には今手元に居らぬ一人の娘と、子息のことが思はれてならなかつた。其の二人の中一人でも今傍に居てくれたなら、言ひたいことがある。――云つて殘したいことがあるものを。しかし、それも所詮叶はぬことなのだ。あゝ、貧ゆゑの苦しさに、廿幾年前の秋の或る朝、可愛い女房が長の患ひから死んで行く今はの際に、飲みたがる牛乳を何うにも飲ますことが出來ないで、惡いことゝは知りつゝも、死ねば再び此の世に歸ることの出來ない女房の可憐しさに、切迫詰まつた果てに近所の家に配達された牛乳を一合盗んで飲ました。それで女房は望みを果して喜んで死んで行つたけれども、其のたつた一合の牛乳の爲めに盗人の汚名を負うて、翌日は此の手は最う後ろに廻された。女房の死骸を始末することも出來ず、九つを頭に三人の頑是ない

子供を殘して、邪慳なお上の手に引つ張られて行く時の切なさ！愁さ！あゝ、骨の髓まで沁み徹つた其の時の心持を、幾年經つとも何うして忘れることが出來やう。そして、世間の人々は、其の苦しみに胸を焦られ乍ら引つ張られて行く自分を、「盗人！」「こそどろ！」と、嘲罵と侮蔑の聲と眼とを以て送つてくれた。事情は事情、盗んだものは確かに盗んだものと、慈悲も情けもない審きに五ヶ月の苦役を果して、出獄して見れば三人の子供は食つたり食はなかつたり、疊もない家の中に鼠の子のやうに固まつて喘いで居た。之れから一働きして、貧故の不名譽を取り返さうと決心した。が其の時は既に遲かつた。盗人！前科者！と云ふ汚名の下に世間は最早や誰一人として相手にしてくれる者もない。働かうにも、働く道はない。死んで行く哀れな女房を喜ばす爲めに、只一度盗んだ一合の牛乳の罪はこんなにも重いものか！五ヶ月の苦役は犯した罪の罰なれば仕方もないとして、死んだ女房や、三人の子供に何の罪科があらう。罪に對する苦役を果して働かうとする人間に何の罪があらう。しかし、冷酷無情な世間はそれを許さなかつた。飽くまで執拗く一合の牛乳を盗んだ罪が附き纏つて、

四人の父と子が廣い世間に生きて行くことも出來ない。――あゝ怨みを呑んで三人の子供を抱へて人跡を絶つた此の伊豆の山中に引つ込んで、世を呪ひ、人を呪ひつゝ送つて來た長い二十幾年の憤恨の月日！思つても胸が引裂かれるやうだ。さうして怨み乍ら、呪ひ乍ら死んで行く自分は諦めるとしても、哀れなのは三人の子供である。中の女の子は東京の邸に奉公して居るから、身分を明しさへせねばそれで好い。が、案じられるのは世を憤り、人を憤つて、間違つた道に踏み込んで居る兄の惣太と、此の白痴の末の弟である。

病人は、差迫る死の苦痛を忍ぶ間にも、苦しみ、あがいて漸く辿つて來た我が艱難の生涯をまざ〳〵と展げて見た。そして、人からも世からも離れた此の山上で、苦しい生涯を終つて行く吾が運命の慘虐を思ひ、哀れな骨肉の身の上を思つて、遣る瀬ない切なさと、怨めしさとに其の病み衰へた力のない眼からは煮えるやうな熱い涙が新しく湧いて、急には口も利けなかつた。――父の苦痛も、其の怨みも分らない音次は何時か又、こくり〳〵と居眠りを初めて居た。

病人は、怨み乍ら、次第に其の意識が鈍つて、恰度霞にでも包まれたやうな氣分になつて行つた。と、はつとして氣が付いた。云ひたいことがある。――言つて置きたいことがある。縱しや木の柱にも等しい此の音次にでも、生きて居る者の耳に殘して置かねばならぬことがある。自分で自分を勵まして、しつかりと眼を見開いた。

「音次。」

斯う呼んだ聲は、皺枯れた力のない聲でありながら、靜かな四邊に、嚴かに響いた。

音次は、其の一聲にポカリと眼を開けて、

「何だよ。」

病人は起き上らうとしたが、それは叶はなかつた。

「お前、今私が云ふことを能く覺えといて、兄やが歸つたら忘れないように話してくれ。」

「あゝ。」

「父は最う死ぬからな。――今、父の云つて聞かすことを忘れちや可けねえぞ。」

「父様、死んぢや俺厭だ。」

「お前等のことを思ふと、私も死にたくはねえが、之れも壽命なら仕方がねえ。――だから能く聞いといてくれ。そして、兄やが歸つたら話すんだぞ。」と、苦しさうに溜息を吐いて、「親と云つても只生んでくれたと云ふばかりで、何一つ親らしいこともしねえで、今日が日まで苦勞な目ばかり見せて來たのは、實に濟まねえ。だが、それも各々の運だと諦めてくれ。血を分けた親だもの、甘いものも食はせたけりや、美しい着物も着せたし、面白い思ひもさせてえ。しかし、それが出來なかつたのだ。皆私が意氣地がねえばつかりだ。――勘辨してくれ。」

と、痩せた手を顫へ乍ら、音次の手を握つた。

「父様、死なねえで、生きてゝくれ。――俺あ恐ねえ。」と、顏の色を變へて、愚かしく顫へて居る。

病人は其の有様を眤と眺めて、

「あゝ、お前に此の私の云ふことが分つてくれたらなあ――。」と、嘆息して眼を閉ぢた。

焚火は何時か又燃え盡きて、焰が弱くなると共に家の中は暗くなつた。――病人は其の時急迫して來る呼吸が咽喉に絡んで、暫くの間苦しさうに身を悶へたが、やがてそれが少しく收まると、

「音や。」と幽かに呼んだ。土色をした額から、脊筋に、膏のやうな冷たい汗がギツトリと浮いて居た。

「あ。」

「水一ぱいくれろよ。」と、舌が粘つて口が動かない。

「今持つて來てやるよ。」と、ノッ〳〵立つて行くと、又粗朶を焚べて、爐傍に轉がつて居た口の缺けた土瓶を持つて外に出た。――月のない黑い空には銀色の星がチラチラと瞬いて、若芽の萠えた樣々の立木が、夜目には只一色の氣味の惡いやうな黑色に見えた。音次は茶碗を持つたまゝ、暫くはうつかりとして空を眺めて居たが、病人の

苦しさうな唸きに、慌てゝ水を吸んだ。それを持つて家に入つた時には、再び勢ひの好い焰は燃え上つて、其の邊は明るくなつて居た。

「父様、水吸んで來たに――飲まねえだか。」

と、口に當てゝ遣るのを甘さうに一口こつくりと飲んで、後は頭を振つた。

「最う飲まねえだか。」

「……。」默つて頷いて見せる。

音次は又、父の枕元に坐つて、默つて居た。

病人は苦しさうに口を動かして何か言はうとしたが、容易には言葉にならなかつた。長い間の患ひに疲勞し切つた身體に、絶え間もなく襲つて來る劇しい苦痛！氣丈な性質であればこそ、今迄はつきりと持ちこたへて居たやうなもの丶、實際、最う口を利く元氣もないばかりか、呼吸は迫り、舌が硬張つて何分にも聲が出ない。しかし病人は言はねばならぬことがある。氣味の惡い程落ち窪んだ眼に力を籠めてポカリと見開くと、全身の勇氣を其の舌に集めて、漸く云つた。

「……」と、初めは言葉にならないで、ごくりと咽喉を高くして唾を一つ呑込んで、「兄やが歸つたらな、能く云つてくれ……」

滿潮時の波のやうに迫つて來る死の苦痛！それに抵抗するだけで今は勢一ぱいである。――身體は恰かも水に浸つたやうにガタ〳〵と慄へて舌が縺れる。

「どうぞ、腹も立たうが、眞人間になつて、立派な道を歩いて世間の奴等を見返して父の怨みを晴らしてくれつて……それが父が一生のお願ひだ。――兄やに之れだつて……。」と、手を合せようとしたけれども、顫へる手は幾度も行違つて、合はなかつた。

「分つたか。――そして、お前も兄やの云ふことを能く聞くんだぞ。死んでも父の魂は生きて居て、屹度お前等の身を護るからな。」

さう云つて居る中に、身體の顫へは止まつたけれども、息ざしは愈々忙しくなつて幾らしつかりと持ちこたへて居ようと努めても、氣は次第にぼうとして、遠くなつて行く。

「音次や。手を……手を……。」と、斷れ〴〵に叫ぶ。

「父、死んぢや厭だ。」

泣き乍ら差し出す太い手を、枯木のやうに痩せ衰へた手にしつかりと握つて、段段白くなつて行く眼を漸う〳〵元に戻して、僅かに見開いたのである。

「あゝ最う一度顏を見せてくれろ。」

音次は自分の顏を持つて行つた。けれども病人は定まらぬ瞳で探るやうにして、

「見えない……見えない……。」と云ふ。

「父樣、俺の顏は此所にあるだのに……。」と親父の顏にぴつたりと押し付けた。

「見えない……見えない。——段々暗くなるわ。兄や……兄や……。」

何か言はうとしても、最う舌が廻らなかつた。烈しく身體が慄へると、咽喉の邊りでゴトリと大きな音がした。

「父よ、——死んぢや厭だ。」然し次第に硬張つて行く脣からは何の返事もなかつた。

「父樣、俺恐ねえ。」

けれども何の返事もなかつた。次第に冷たくなつて行く痩せ細つた手は、矢張り音次の手をしつかりと握つて居た。——何時までも〳〵離さうとはしなかつた。

其二

「あゝ腹が空つた。腹が空つた。——何か食ひてえなあ。」

小屋の前の日向に坐つて、音次は獨言を呟き乍ら、愚かしく箸で茶碗を叩いて居た。蒸れるやうに暖かな五月初めの日は青い中空に照つて、空一ぱいに漲つた其光りは、爽かな樹々の若葉に、燃えるやうに輝いて居た。

「あゝ、兄や歸つて來ねえかなア。」と眩しさうに眼をチラ〳〵さして、遙かに山の下を見た。けれども眼を遮るものは樹立と、山の岩角とで、其の先は朧に霞んで何も見えなかつた。厚い脣の中で何か呟くと、やがて又箸で茶碗を叩くのであつた。

「腹が空つた。腹が空つた。」

罅の入つた茶碗の音が、カチ〳〵と聞えた。

其所へ、脊負臺を脊にして樵夫が二人上つて來たが、音次の有樣を見ると、

「はゝ……音の野郎、たわけてけつかる。」

と一人を顧みた。

「始末に終えねえ阿呆だな。」

二人が斯う云つて通り拔けるのを、音次は認めて、

「おい、小父さん、寄らねえか。」

「手前一人か。」と、後から行く年若い方が立止まつて聞いた。

「あゝ。」

「惣太は何うした。」

「村へ行つた。」

「父は？」

「死んだ。」

「死んだ――？嘘吐け！」

「何で嘘吐くべえ。昨夜死ぬ〳〵つて俺の手を掴まつておつ死んだゞ。」

「本當か。」

「寄つて見さつせ――本當に死んどるだ。」

「おい、音の父が死つたとよ。」と、先に行く一人を呼び止めた。

「何、五助が死んだと？」と、立止まつて振返つたが、引つ返して來た。

「一體そりや本當か。」

「どうも本當らしいよ。――入つて見べえ。」

斯う云つて二人は小屋の中に入つた。塵垢臭いやうな臭ひがぷんと鼻を襲つた。――音次も、のつそりと其の後に立つて居た。

明り取りの十分でない家の中の荒筵の上に、蒲團も敷かずに、冷たい死骸は横はつて居た。身體は、手足を伸した儘最う固くなつて、落窪んだ眼を苦しさうに半ば開いた。薄濁つた白目を少しばかり見せ、土色をした脣がわんぐりと開いて、黄色く汚れ

た齒が見える。

「到頭死つたか。――好い業晒しだ。牛の乳を一合盜んで東京に居られなくなつて逃げて來て、こんな山中の炭燒小屋で死ぬなんて、矢張り天罰は恐ろしいもんだ。」

「惡黨も病にや勝てねえと見える。――惣太の野郎が村を荒して皆に迷惑を掛けるのも、全く此奴の指圖だつたんだ。」

「爭へねえものさ。惡いことをしやがる奴は、生きてたつて人交際は出來ず、揚句の果は此の態だ。」

「惣太の惡黨奴も序に死つて了ひやがりや好い。」

「生きて居やがる程爲めにならねえや。」

「さうとも。――だが一人だけでも大助かりさなア。」

二人は、長い間五助親子の爲めに自分達の村を荒されて來た怨みを、此の時に腹一ぱい晴さうと云ふやうに、死骸を前に置いて氣味好がつた。

心ない白痴の音次の耳にも、其の意味が分つたと見えて、今迄ケロリと聞いて居たが、

「あんだ畜生奴！父つさん化けて行くだぞ。」

と頬を膨らした。

「あゝおつかねえ。」

二人はおどけた調子で音次に調戯ひながら外に出た。

「兄やに言ひつけて遣るぞ。」音次は追つかけ乍ら云つた。

「何だと？」と若い方は振り返つて、「言ひ付けやがつたつて些つとも恐なかァねえや。――惣太の野郎なざア、之れだ。」

と、拳固を拵へて張り倒す眞似をした。

「何だ馬鹿！」と、音次は眼を怒らした。

二人は其の樣子を可笑しさうに笑つて、

「馬鹿が人のことを馬鹿と云つてけつかるわ。――手前等もさつさと何處かへ行つて了へ。」

「何ッ。」

と、言ふと穿いて居た草履を脱いで、一人の面上を目掛けて投げ付けた。――風を切つて飛んで來た草履は危く肩のあたりを掠めて、遙か先の地上に落ちた。

「やつ、手前打つ氣か！」と一人が踏み止まつて睨み付けると、音次は恰も獸の怒つた時のやうに眼を赤くして、猛然と飛んで來た。

「危ねえ。――かもうな〳〵。」と、年を取つた方が叫び乍ら逃げたが、若い方は面白がつて、

「なアに面白えや。べつかつこう――。」と、眼を剝き、口を歪めて見せる。

音次は口惜しさうに齒を鳴らして、手早く木片を拾ひ取ると烈しく放り付けた。――木片は横に反れて飛んで行つた。

「打つて見ろ――馬鹿音やアい。」

「行かう〳〵。」

二人は、憤りに顏を赤くして顚へながら追つかけて來る音次の樣子を、全で動物でも調戯つて居るやうな興味を感じて、面白さうに笑ひながら逃げて行つた。

音次は、とても追ひ切れないことを諦めると、うつそりと家の前に戻つて來た。暫くの間はブツ〳〵怒つて何か獨言をブツ〳〵口の中で呟きながら、其の邊に落ちた木片や、土塊を無暗に木や草に放り付けて居たが、やがてそれもけろりと忘れて丁つて元の日向にぼつこり坐つた。そして又箸で茶碗を叩き初めた。

「腹が空つた。――腹が空つた。」

と、歌のやうに節をつけて繰り返しては、茶碗を叩いて居た。

「音次、そんなとこに眠つて、風邪でも冒くと可けねえぞ。」

音次は、日當りの好い壁に凭れて、何時の間にか快い眠りを貪つて居たが、優しくかけられた親切な聲が偶と耳に入つたので、ぽつかりと眼を開けた。――暖かな日光を身體一ぱいに浴びて、少し上氣た顏は赤くなつて、眠覺めの眼はどんよりと濁つ

て居た。

「何だつてこんなとこに寢てるんだ。」

「お丶、兄や。」と、表情の鈍い顏に嬉しさうな色を浮べた。

惣太は、揉上から腮にかけて、濃い髯が一ぱいに生えた嚴つい大きな顏を優しくして、其のギロリと光つた鋭い眼は、愚かしい弟を哀れむやうに眤と眺めた。

「能く留守をしとつたな。土產があるぞ。ほら——。」と、左の腋に抱へて居た風呂敷包みを見せた。

「あ丶兄や、饅頭買つて來たゞか。——俺、腹が減つて〳〵終へねえだ。」と、嬉しさうに手を擴げて、にこ〳〵した。

「饅頭も買つて來たゞし、——未だ外にもどつさりあらア。まあ家へ入れ。父つさんも喜ばすだに。」

音次はそれを聞くと少し悄氣て、

「兄や、父は死んだゞ。」

「何！」と惣太はぎよつとして顏色を變へたが、直ぐ笑つて、「何阿呆を云ふだ。ハ、ハ、丶、丶。」

「本當に死んだゞ。——最う何も言はねえ。」

「眠つてゞも居るんだらう。——馬鹿で仕樣がねえな。父は鹽梅が惡いんだから、傍に居て些つたア看病して上げろ。——さア、家へ入れ。」と云ひながら、腰を少し跼めて入口を潛つた。

「父さん、只今。」

外の明るさに馴れた眼は、急には暗い家の中に馴染まないので、何も見えなかつた。足で探るやうにして上框に寄つて、包みを床の上にドサリと下した。

惣太の後ろからのつそりと入つて來て、其所に衝つ立つて居た音次は、

「は丶丶……。」と笑つた。

「何を笑ふんだ。」

「だつて兄や、死んだ者にものを云つても返事をしねえだ。」

「阿呆奴が、嘘吐け！そんな縁起の惡いこと云ふでねえぞ。」

音次の云ふことを頭から信じない惣太は、叱るやうにさう云つて、草鞋の足袋を脱ぐと、名ばかりの座敷へ上つた。其の時は眼も大分家の中に馴れたので、物の形がはつきりと見えて來た。――惣太は小暗い隅つこに薄い蒲團をすつぽり被つて寢て居る父の枕元に寄つて行つた。身體を丸くわゝぐねて、薄禿の頭の頂邊が汚ない夜具の襟元から覗いて居た。

「父さん。」と聲をかけた。

けれども、何の返事もないばかりか、蒲團の上から見た身體の量が萎びたやうにげつそり落ちて、其の邊の空氣も何となくしんとして、肌觸りがひやゝとして迫るやうに冷たい。――惣太の胸は早鐘を撞くやうに、急にドキ〳〵鳴つて來た。

「馬鹿に能く眠入つて居るな。」と、それでも平氣らしく獨言のやうに云ひながら、蒲團の襟をそつと捲つて、額に手を當てゝ見た。――氷のやうに冷たかつた。

「おゝ、父さん！」

惣太は叫ぶやうにさう云つた限り、後は口が利けなかつた。――暫くは宛ら放心した人のやうに、茫然として爲すところを知らなかつた。――死んだとは思へない。昨日の午後家を出る時には、病氣とは云ひながら、今日の今歸つて見て斯うして冷たくなつて居るやうな容態とは夢にも思へなかつた。惣太は未だ半信半疑で、最う一度父の額に手を遣つて見た。濕つぽい冷たさは、心臓までも浸み込むやうに掌を傳はつて身體はぞつとして氣味惡く總毛起つた。

「父さんは死んだ！」

思はず惣太の口から、只一聲迸つた。――そして、其の時、驚きと、悲みとが洪水のやうな勢ひを以て、今迄空虛であつた胸一ぱいに溢れて來た。呼吸は迫るやうな苦しさを覺えた。

「父は死んだゝ。――そんだで俺兄やにさう云つたゝによ。」

惣太は、音次の聲などは耳にも入らないのか、默つて石のやうに固く衝つ立つて居た。――心の中には、怨みと、憤りと、悲みとを以て滿たされた。父の苦しい生涯、

此の時まざ〳〵と生きて動いて來た。不幸な人であつた。僅かなことから、世にも人にも棄てられて、こんな山の中に遁れ込んで人をも世間をも呪ひつゝ、何の慰めるところもない長い憤恨の月日を送つて來た。そして、其の臨終には、三人の子まであり乍ら世話をする者もなく死んで行つた。何所まで不幸な人であつたらう。一度は此の父を世に出して、世間の奴等を見返して遣りたい。そればつかりが願ひであつた。只の一時でも好い、快い勝利の微笑を父の其の衰へた頬に見る爲めなら、自分の生涯は何うなつても厭はない。僅かな惡事の爲めに、其の翼も脚ももぎ取られて動くことも出來ない慘めな父の爲めに、飽くまで世間を敵として戰つて〳〵戰ひ盡す決心であつた。世間の奴を苛めもした。其の幸福を奪ひ、平和を亂し、喜びに代ふるに悲みを與へるやうな所業を、物心のついた十二の年から二十幾歳の今日まで、十何年の長い間つゞけて來た。しかし、其の結果は何うであつたか！求め願つた其の笑顔を見ることも出來ない中に、父は死んで行つた。あゝ最早や永久に此の破れた父の魂の慰められる時はないのである、何うすることも出來ない絶望と、深い悲哀は雲のやうに胸を襲

つた。

「父さん、此の儘で死ぬのは嘸ぞ口惜しかつたらう。俺が意氣地のねえばつかりに父さんの思ふやうな敵も打てなかつた。――勘辨してくれ。」

斯う云つた惣太の聲は顫へた。――大粒の熱い涙は瞼を押すやうにめく〳〵と流れた。

「兄や、泣いてるだか……。」

「音次か。」と、涙に光つた眼に弟の顏を見たが、やがて又父の死顏を見ると、屹と脣を嚙んだ。

「覺えてろ。此の惣太の息と腕とが續く限り世間の奴等ァ相手にして、惡魔になつて遣るから。」

幼い時から慘めな一家の有樣を見るにつけ、怨みと怒りとを抑へ包んで暗く沈んだ父の面を見るにつけ、之れも世間の爲めだと頭に沁み込んだ怨みの一念は、此の時一團の焰となつて胸に燃えた。――火のやうな息をほつと吐いて、宛もない空に何物か

の姿を認めて居るやうに、屹と睨んだ。

「兄や、恐ねえだ。――そんな顔してねえで、早く饅頭くんないか。俺腹が減つてるだ。」

と、物欲しさうな眼色に惣太の顔を見た。其の有様を見るにつけても、死んだ父を悲しむ心と、愚かな弟を哀れむ心とが、新らしくむら〳〵と燃えて來た。

「音次。」と、弟の身體を護ふやうに犇と抱いた。――涙は止め度もなく音次の顔から肩に降りかゝつた。

「兄や、何を泣くだ。――早く何か食ひてえな。」

「音次、父は死んだゞぞ。」

「うむ、死んだゞ。」と、けろりとして居る。

「お前父が死んでも何ともねえのか。」

「恐かねえだ。」

「恐かねえ？」と、惣太は情けないと云ふ色を深く湛へた眼に、今更のやうに弟の

顔を眤と眺めた。

四邊はひつそりとして、眞晝に近い靜かな日は、南向きの入口から二寸ばかり土間に射し込んで、其の黄金色の光りは、冷々とした黑い土の上に、チラ〳〵と動いて居た。

「父さんは何時死んだか、お前知つとるか。」

やがて惣太は、弟の身體を腕から離して、斯う聞いた。

「うん。昨夜死んだゞ。」

「何時頃？」

「何でも暗い時だ。――俺爐傍に寢とつたら、切ねえ〳〵つて起したゞ。」

「さうか――昨夜の中に歸りや好かつた。買つて來た此の藥も役には立たなかつたのか。」

と、殘り惜しさうに先刻の包みを眺めたが、「だが、そんなこと云つても最う取返しはつかねえ。――音次、せめて買つて來たものでも枕元に供へるんだ。」

と、音次に手傳はして死骸を北枕に直して、包みを解くと菓子なぞ枕元に供へた。

「あゝ、線香もねえのだな。」と、自ら哀れむやうに云つたが、偶と何か思ひ付いたやうに不安らしく、「だが音次、父さんは何うしてこんなに急に死んだんだ？。」

音次は、大口に頬張つて居た菓子をごくりと咽喉を鳴らして呑下して、

「何うして死んだゞか聞いて見ないだ。――何でも切ねえ〳〵云つたゞ。」

「うむ。それから何うした？」

「水くれ〳〵つて云つたから、俺土瓶で水飲ませて遣つた。そしたら俺の手を握つてこんなことして死んだゞ。」と、虚空を掴んで身を悶へる真似をして見せた。

「何か言はなかつたか？」

「云つたゞ。――兄やにな、何うか真人間になつてくれつて、世間の奴等が何と云つても腹ア立てずに、辛抱して人間になつてくれつて、さう云つたゞよ。――兄や人間でなかつたのけえ。」

「辛抱して真人間になれつて？」と、惣太は撥かれたやうに聞き返して、「父さんそ

んなこと云つたか。」と、最う一度繰り返した。

「あゝ、云つたによ。」

「さうか、父さんは、死ぬる間際まで俺のことをそんなに氣にしとつたんだな。」と呻くやうに嘆息して考へ込んだ。

此の時、父が臨終の其の短い言葉が、恐ろしい力を以て、大波のやうに惣太の胸を襲つて來た。

父は、あれ程世間を怨み、人間を憎んだ。世間や人間は父に取つて七生までも許すことの出來ない仇敵である。世間に反抗し、人間を呪ふのは、取りも直さず父の志を繼ぐものだと、今の今まで信じ切つて居たところが、其の遺言が腹ア立てずに真人間になれと云ふのだ。父の口から斯う云ふ言葉を聞くのは、天と地とが逆さまになつたよりも、惣太の心に取つては大きな驚きであつた。

だが、驚きの心を離れて此の言葉を深く味つて見ると、汲んでも盡きない大きな意味が含まれて居る。――惣太の心には電光の如き或る物が閃いた。そして、身體はわ

なわなと慄へた。始めて父の心持――臨終の言葉の意味が、惣太の胸にぴつたりと生きて來た。

「父さんは、俺のことをさうまで云つとつたのか！」

と、惣太は誰にともなく、火を吐くやうな熱い言葉でつく〳〵と云つたが、がつばと身を投げるやうに死骸の枕元に兩手を突いた。

「あゝ父さん、俺の考へは間違つとつたゝ。今の今迄憎い世間の奴等を、思ひ知らして遣るなア、惡黨になつて苛めるより外はないと、憎い〳〵の一圖で思ひ込んどつたが、眞人間になつて見返してくれ、其の言葉で何だか眼が覺めたやうな氣になつた。惡事をして人に勝てる道理はねえ。俺は間違つた考へに迷ひ込んで居た、十何年の長い夢が今日始めて醒めた。之れから本當の人間になつて、世間の人間どもを見返して遣るだから、何うぞ父つさん、草葉の蔭から見とつて下さい。」

と、遠く去つた父の魂も暫くは止まつて我が言葉を聞けよ！と云ふやうに、誠心籠めた惣太の言葉に連れて、熱い大きな涙は止め度もなく溢れ出て、頰から腮を傳つ

た。

善にも強ければ、惡にも強い、生れつき剛直頑固な惣太は、迷ふのも早ければ覺るのも亦早い。父が臨終の血を吐くやうな言葉を、愚かな弟の口を通して聞いた時、恰かも眼の前に奇蹟を見たやうに長い惡夢を醒まされて、全く身内の肉がブル〳〵と顫へた。そして十何年來の我が誤まれる考へを振ひ落して、心が正しい明るい道の上に始めて立つた。――あゝ、我が心の迷執を救つてくれた、難有い父の言葉よ。

「眞人間になれ！」

惣太は其の言葉を最う一度心の中に繰り返して味つた。――父の固く結んだ此の脣から嚴かに迸つて、我が心臟を貫いた其の言葉を！

「父さん、死んでも生れ代つて來て世間の奴等に祟つて遣る！　惣太は今日限り此の恐ろしい初一念を捨てました。――父さんの遺言通り、必らず眞人間になつて見せます。」と、再び口に出して云つて、吾が心にも強く誓つた。

音次は、惣太の樣子を怪訝さうに、ポッカリ口を開けて、眺めて居た。

「兄や、未だ云つたゞ、父さんが意氣地がねえばつかりに、皆に面白い思ひもさせねえで濟まねえの、兄やが居たら……のつて、いろんなことを云つたゞによ。」

「……」

惣太は、只涙のみ先に流れて、遽かには口が利けなかつた。今更返らぬことではあるけれども、昨夜の中に歸らなかつたことが返す〳〵も殘り惜しい。云ひたいこともあつたゞらう、訊ねたいこともあつたゞらう。こんな山中の茅屋で、妹は手元に居らず、總領の俺は留守、そして、こんな頑是もない子供にも劣つた馬鹿な音次を只一人枕元に置いて死んで行つた、父の心はどんなであつたらう。――さう思ふと、胸は裂かれるよりも愁かつた。

「兄弟三人ありながら、一人だつて父さんの便りになつた者はない。――あゝ、父さん、濟まなかつた。」と、又しても枕元にひたと手をついた。

「兄や、父さんにあやまつたら生きて來るだかね。」

「生きて來はしない。――どうかして最う一度生きて來てくれゝば好いのだが――生

きはせん。」

音次は、惣太の顏と、父の死顏とを眺め交してゐたが、

「俺ア何だか悲しくなつて來た。」

「あゝ、父さんを最う少し生かして置いて、世間の奴等を見返して遣りたかつた。」

「兄や、父さんは兄やに腹を立てゝは可けないと云つたゞよ。」

「うむ。――さうだな。」と云つて、惣太の眼は眤と音次の顏に來たが、「音次、お前も俺も不運な人間だなア。――だが、俺は構はないとしても、何も分らねえお前は可哀さうだ。」

嘆息するやうに斯う云つた惣太の眼には、愚かな弟を哀れむ涙が、更に新しく湧いた。

「兄や、泣くだアかね。――兄やが泣くと、俺ア心細くなるだによ。」

「音次、父さんは世間の奴等ア怨み死に死んだのだ。――之れから兄やも眞人間になつて、父さんの怨みを晴らさにやならんのだから、お前もしつかりしてくれなくちや

可けないぞ。な、しつかりしてくれ。」

音次は、饅頭をむしや〳〵食つて、何を云つても分らないやうな、けろりとした顔をして居た。

「あゝあ、何を云つても分らんのだ。こんな時にせめてお澄でも居たらなァ……。」と、獨言のやうに云つた。

「姉やか……。姉やに會ひたいなァ。兄や、お邸に行つて姉やを呼んで來べえか。」

「馬鹿なことを云ふな。――お前の姉やは華族樣に御奉公して居るんだ。若しも俺の妹だとか、お父さんの娘だとか、そんなことが知れたら、姉やはお邸に居られなくなるから、うつかりしたことを云つては可けねえぞ。」

「だつて、俺は姉やのとこへ行きたいなァ。」

「飛んでもねえこつた。――姉やに逢つても好いくらゐなら、父さんは何もこんな山奥に入りはしないのだ。」

「逢はれねえのか。」

「身分が知れると姉やの身が詰まるばかりだ。」と云つたが、遽かに氣がついたやうに

「それはさうと、父さんの葬式を何うにかしなければならねえのだが……。」

獨言のやうにさう云つて、腕を組んだ。

「うむ、さうだ。早く持つて行かねえと化けて出るぞ。」

「せめては葬式だけでも、村の奴等が贈を潰すやうな、立派なやつを出したいものだが……。」と云つたが、差當つて入るのは金である。けれど惣太の懐ろには、現在五十錢に足らぬバラ錢しかない。――此の場合父の死骸を葬る金を何う分別したら好いか、はたと當惑した。固より借れるところもなければ、惠んで呉れる者もない。さうかと云つて此の急な場合に稼ぎ出すことも出來ない。

惣太は思案に餘つた末、心に決するところがあつた。

「仕樣ねえ。――今更恥しいことだが何うしてもさうするより外にねえ。」と深い嘆息と共に斯う呟いて、立上つた。

「兄や、何處へ行くだ。」

「一寸出て來るから、お前留守をして居れ。」

「厭だ〳〵。」と、首を振る。

「何故厭だ？」

「父さんが化けて來ると恐かねえだ。」

「そんな事があるものか。——直ぐ戻つて來るから穩和しく待つて居るんだ。」

「俺も一緒に行くべえ。」

「父さんを一人置いて、二人とも出て行かれるものか。」

「父さん一人だから恐かねえだ。」

「兄やの云ふことを聞かないと、兄やは最う歸つて來ねえぞ。」

と叱るやうに云つて睨まれると、音次は少し悄氣て首を竦めた。

「ちや兄や、早く歸つてくれるだか。」

「あゝ直ぐ歸るとも。——父さんの傍を離れるでねえぞ。」と云ひ聞かして、惣太は出て行つた。

「兄や、早く歸つてくれ。——父さん化けて來ると恐かねえだから。」

音次は入口に立つて惣太の後から最う一度呼んだ。

けれども其の時、惣太の姿は遙か先に見えて返事はなかつた。音次は、のつそりと立つて其の後姿を見送つて居た。

其二

四月八日——釋迦の誕生日とて、長安寺でも說敎は、固より甘茶の接待などがあつて賑はつた。不斷は仕事や用事にかまけて寺詣りの御無沙汰をして居る連中も、今日が信仰の洗濯とでも云ふやうに、午前から午後にかけて、ひし〳〵と詰めかけて來て、流石に廣い本堂も人を以て埋つた。讀經があり、難有いお說敎があつて、數珠をつまぐる音、唱名の聲などが、絕間なく其方でも此方でも聞えて來る。

しかし、それも夕方になつて、各々ばら〳〵に歸途に着いて了ふと、後は全で大風

でも落ちたやうに、廣いお寺の境内はひつそりとして物音一つしない。其の寂寞たる庭に落ち散つた紙屑や塵切を、耳の遠い寺男の爺さんは、せつせと掃き集めて居た。

一週間ばかり前、先祖からの家法と、姉鞆音の排斥とに、當然子爵佐原家を繼ぐ可き權利を吾から進んで放棄し、兩親の膝下を離れ、邸を遁れて此の伊豆の長安寺へ來た秋夫は、其の翌日から最う頭を丸め、袖の廣い衣を纏つて十九の若い春を殊勝な青道心の姿と變つて、名さへ正念と改めた。今日も住寺の後ろにかしこまつて、讀經に連れて念佛を唱へつゝ鉦を叩いた。集つた人々は、此の新しく東京から來た名門の子の可憐らしい姿を見ては、口から口へ囁き合つて、事情も知らず只其の美しくも淋しい姿に涙を誘はれる者もあつた。

けれども、秋夫の心になつて見れば、邸に居て多くの召使ひに傅かれ、表面は榮耀らしく見えても、絶えず邪慳な姉の針のやうな言葉に刺され、現在の生みの母を母と呼ぶことも出來ないやうな心の苦しい日を送るよりも、結局此の方が心安かつた。

執事が送ると云ふのを吾から拒んで只一人、靈岸島から船に乘つて、東京の土を離

れる時には流石に心細かつた。解から親船に着いて初めて其の甲板の上に立つて、模糊たる春の夜の月明りに煙つた中に、チラ〳〵と赤く瞬く深川や京橋の灯を望んだ時、「此の東京を之れ切り離れるのか。」とさう思つて、涙が流れた。夢結ばれぬ一夜を蒼い波の上に搖られて、翌日の朝早く伊東の港に着いて、暖かい國の丸い山と、疎らに建つた低い家を見た時、更に新しい涙は湧いた。髪を降し、衣を纏つて變つた姿を自ら眺めた時、何とも言へぬ果敢なさが油然と胸に湧いて、思はず涙含まれた。之れで一切世の厭はしい煩累を遁れ得て、今から佛弟子になつたのだとは思ひながらも、朝夕の看經、鉦の音も身に泌みて、心は淋しい方へと誘はれて行く。殊に、眠られぬ夜半を枕に通ふ波の音を聞いては、父を想ひ、母を慕うて涙は枕を濡らすのであつたが、それでも思ひ返して口に念佛を唱へて佛の慈悲に縋ると、何時か心も爽かになつて來る。——正しからぬ關係の下に生れた此の少年の心には、生れぬ前からして、既に俗世を厭ふ心が宿つて居たのだ。妾腹の子！　此の人の世に呪はれた苦がい言葉が、どんなにか少年の柔らかな心に取つての痛みであつたらう。或時は吾と吾が運命を悲し

んで自殺まで覺悟したこともある。憂いに生んでくれた父や母に怨みを持つたこともある。只さう云ふ關係の下に生れたと云ふだけで、何も知らぬ子を忌はしい汚れた肉塊のやうに擯斥する世間を呪つたこともある。あゝ、人に羨やまる可き高貴な家柄に生れながら、しかし、それは秋夫自身に取つては實に呪咀しても猶ほ懺らぬ憎む可き運命であつたのだ。そして、それが此の少年の心に深く俗世を離るゝ厭世の念を燒きつけたのであつた。一端蝕食まれた心は、何うしても元に返らない。何時か秋夫は、憂鬱な顏に暗い眼色をした、沈鬱な少年と育つて居た。——自ら進んで佛門に入つたのも其の爲めである。

秋夫は夕のお勤めも濟ましたので、本堂の廻廊の欄干に、其の華奢に生れ付いた纖細い身體を凭れて、直ぐ眼の下に見える蒼い海を眺めて居た。日が沈んだので黃昏の色は沖の方からうつすらと漂つて來た。灣を成した內海の春の夕の波は最と靜かで、海面は全く油でも流したやうに、海水はべつとりとした光りを持つて小皺一つ見えない。それでも砂濱に寄せて來ては碎ける波の穗先が白く渚々を細長い帶のやうに隈取

つて居る。大島は迥かの沖に浮いて、濃い藍色の裾が仄青くぼかされて居る。

秋夫は、偶と遠い波の上に黑い煙を棚引かして、東に走つて居る汽船の影を認めると、わけもなく急に邸のことが思はれて來た。——殊に、何物かを恐れ憚つて居るやうに、絕えずおづ〳〵したやうな久世の姿が、まざ〳〵と眼に浮んで來た。——それが自分の母だ。眼には何時か涙が浮んで、海も、汽船の姿も心に入つて來なかつた。

「正念さん。何イ考へて御座らつしやるだね。」

秋夫は自分の名を呼ばれたので、初めて我に返つて聲のした方に眼を遣つた。——寺男の爺さんが竹箒に腮を支へて、腰を伸して居た。

「何も考へちや居ない。——海を見てゐたの。」

「えらく悲し氣な顏をして……親御樣のことを思はつしやるだんべえ。——無理はねえでがすよ。」と、獨りで呑込んで、朴訥な言葉の中に、心からの同情を籠めて云つた。

「東京の方へ行く船を見たらね、つい……」と云つて白い顏に淋しい笑を見せた。

――爺の眼にはそれが一層可憐しく思はれた。

「いや誰でもでがすよ。私もはア之れ四十年から此の寺に居て、隨分出家に上らつしやつた小僧さんを見たゝが、最初の中一二ヶ月の間は、何うしても泣き暮すだあ。――それが人情だでな……」

「さうだらうね。」と云つたが、それを聞くと胸が悲しくなつて、一層涙を誘はれた。衣の袖をそつと眼に持つて行つた。

「あゝ最う泣かつしやるな。諦めるが肝心でがす。一人出家すれば九族天に浮ぶとか云つて、どんなにか難有いこつたか。貴方の出家は皆さんへの功德ぢや。南無阿彌陀佛、々々々々々。」と長年の間に聞覺えたことを喋つて、口癖になつて居る念佛を唱へたが、「やれやれ、さあ最う些とだに、片付けて了はうか。」

さう云つて腰を最う一度うんと伸して、二つ三つ叩くと、又せつせと箒き初めた。

秋夫は箒を使ふ其の手許を眺めて居たが、

「廣い庭を毎日、中々大變だね。」

「何の。」と頭を振つて、「不斷は何でもねえだが、斯う云ふ日には外の用事が多いで、隨分疲勞れますだよ。」と、手を休めないで云つた。

秋夫はそれを聞いたのか、聞かないのか、眼は何時か又遠い海面を眺めて居た。――先刻まで仄かに見えて居た大島は最う夕闇に包まれた。恰かも一抹の淡い煙に撫でられたやうに仄紫に打ち煙つた沖には、何を漁る人の子の火ぞ！　チラ〳〵、チラ〳〵と赤い小さな酸漿のやうに疎らに瞬いて居る。

其の海に的もなく眼を遣つて、恍つとりと見入つて居た秋夫の美しい瞳からは、又しても次第に涙が滲んで來ると、二重瞼の長い睫毛に一ぱい溜つて、恰度水晶のやうに耀いたが、ホロリと滾れる。――と、氣の付いた秋夫は、我にもなく慌てゝ、そつと兩手に眼を抑へた。白く細い指が夕闇にくつきりと浮いて、若い女のそれのやうに柔かな線を見せた。

と其所へ、

「あの一寸お願ひ申したいんですが……。」と、直ぐ耳の傍で突然聲がしたので、吃

驚して顔を振り上げた。――丈の高い、大きな顔に髯が一ぱい生えて、眼の鋭く光つた、見るから恐ろしげな大男が、ぬつくり立つて居た。

「はい、何御用で御座いますか。」

秋夫は何がなし氣臆れのする心を引つ立てゝ、おづ〳〵と聞いた。

男は、容貌風采の恐ろし氣な見かけに似ず、謙遜らしく幾度も腰を低くして、

「あの、親父が亡くなりましたんで、實は其の……明日でもお葬ひをして頂きたいんですが……」と、存外言葉も優しい。

秋夫は、何者かと思つて、不安に顫へた胸の動悸も漸く靜まつて、

「私は未だ此方へ參つたばかりで、何も樣子が分りませんから、聞いて來て上げましう。」

「へえ、何うぞ一つお願ひ申したう御座います。」と、腰をかゞめる。

で、秋夫が其の儘庫裡の方へ廻らうとすると、

「お前惣太ぢやねえか。」と云ふ聲が後ろに聞えたので、ひたと立止まつて振返つて見

た。――夕方の庭を見廻つて恰度其處へ來た番僧が、先刻の男に聲をかけたのである。寺男の爺さんは、後ろの方にうつかりと立つて居た。

「へえ、惣太でがさア。」

「あ、若し〳〵正念さん、お前さん何も知らつしやらない。こんな惡黨の云ふことなど取次ぐと、飛んでもない目に會ひますぞ。」と、番僧は優しく秋夫を止めて置いて、今度は惣太に向つて云つた。「お前何だつて今時分ウヅ〳〵來たんだ。――今日は參詣者があつたんで、又お賽錢でも盜まうと云ふ意りなんだらう。」

惣太は頭からさう言はれて苦笑ひしたが、

「いや、決してそんな事はありませんや。」と、別に腹を立てたやうな色も見せずに言譯をして、「實は親父が亡くなつたんで、和尚さんに一つお弔ひをして頂きたいんで……」

「何、親父さんが死んだ。」と眉をひそませたが、「ふむ。到頭死つたか、――いや、それで村から一人厄介者が減つたわけだ。」

「何！」と、惣太は見る〳〵顔色を變へて、屹と下唇を噛んだが、又・思ひ返して、調子を柔らげて、「俺の今迄の身持が身持だから、何と言はれても仕方ねえだが、死んで佛になつた者にまでそんなことを云ふなア、餘りぢやありませんか。」と云つて、怨めしさうに番僧の顔を見た。

「何が餘りだ。死んで佛になれるなア眞人間のことだ。お前達のやうな惡黨は、地獄へ遣られて、釜炒りにでもなるんだ。な、考へても見るが好い。お前達親子が此の村へ來てから、どれだけ村の衆が迷惑したことだか。盜人はする、放火はする、田畑のものは荒す、何百年來お上の厄介になるやうな事を仕出來したことのない此の村だ。それをお前達親子の爲に、村の者は夜もおち〳〵眠られない始末だ。親父一人でも死んでくれたなア仕合せと云ふもんだ。」

惣太の胸には、其の一語々々が、胸を刺されるやうに響いて來た。——元よりそれだけの憎みを受けるのは當然であるが、併し今日からの惣太は最う今迄の惣太ではない。正しい道を踏んで眞人間にならうとして居る惣太だ。それだのに世間は未だ自分

等親子を呪つて居る。——此の心持が分らないのか！」

「今迄のことは何う言はれても仕方ありませんが、今日から發心して眞人間になつたのですから、何うぞ水に流してお貰ひ申したいんで……。」

「水に流せつて……？　さうは行かないよ。口先で眞人間になつたと云ふのを一々眞に受けて居た日にや、どんな目に合はされるか知れたもんぢやない。」

「口に出して云ふ以上は、心にもないことは言へませんや。」

「それは普通の人間のことだ。お前達の云ふことが何で的になるもんか。」と頭から受けつけない。

「此の心が本當にされないのかなア。」と、惣太は口惜しさうに溜息を吐いた。——斯うと思つたら斯うと、物事を片一方に決めつけて、其の一本筋より外には歩けない性分だ。——今迄だつて、何も善人面をして蔭の方でコソコソ惡事を働いたのではない。俺は惡黨だと正面から名乘つて惡いことをしたのだ。それが今日から覺るところがあつて、惡事をふつゝり思ひ切つて眞人間になると云ふ。それだのに世間は口だけでは

……と云つて信じてくれない。何處まで執念く、疑ひ深く、面倒臭い世間であらう。自分の心では、斯うだと言へば、それ以外のことは決して腹には思つて居ないのに、世間はそれを取上げない。――惣太は、焦燥しくて胸が煮えるやうな思ひがした。

「心は何うだつて、人間は行ひを見なければ分らないぢやないか。お前は、眞人間になりましたと云つたからつて、はい左樣で御座いますかと返事が出來るかい。馬鹿にするな。」

「今日から眞人間になつたのだから、直ぐ行ひで見せることは出來ねえ。まアどうか長い眼で見て居て下さい。――差當つて親父を葬らにやならねえので、午後から外の寺を三軒ばかり頼んで歩いたが、何處でも受付けてくれねえ。最う此寺より外に頼むところは全くないのだから、何うぞ一つお頼み申します。」

「可けないよ。」

「貴方が可けねえと云つたつて、和尚さんは承知してくれねえもんでもねえ。――何うか一つ貴方から頼んでお貰ひ申してえもんで……。」

「頼んでも無駄なこつた。」と頑固に坊主頭を振つて、「斯う云ふ場合に人間は困るから不斷が大事なんだ。――何處の寺でも受け付けないものを、長安寺が特別に納めることは猶更出來ない。文句を言はずに早く歸つた方が好いだらう。」

惣太は情けないと云ふ眼色をして、「まあ、さう言はないで、何うぞ頼んで見て下さい。」

「諄いな。――可けないと云つたら可けないのだ。」番僧は、惣太の飽くまで言葉を低くした哀求を、にべもなく冷かに退けた。

「何うしても可けないのですか。縱しどんな惡黨にしても、死んだ者に罪はねえ。況して、人間の罪を許して人を救ふのが出家の道ぢやねえか。」惣太の息ざしは荒くなつて、番僧の方に少し詰め寄つて行つた。

「何うしてもだ。――考へても見るが好い。お前達親子の者は村の衆から鬼のやうに憎まれて居る。其の死骸を葬つたとあつちや、檀家の衆が承知しない。一騒動持上る。寺の方ぢや弔つて遣り度くても、世間が許さないのだ。だから、和尚さんに頼んで見

たところで駄目だ。強つてと云ふなら、それは聞いて見て遣らんこともないが……」

力なく首を俛れてて聞いて居た惣太は、番僧の言葉が切れると、何事をか深く心に決したやうにやがて首を擡げたのであつた。

「いや、可うがす。――さう云ふわけなら最うお頼み申しますまい、世間と云ふものがさうまで酷いものなら……。今迄はたとへどんなことをしても、之から眞人間にならうと決心して、死骸を抱へて途方にくれて居る者を、之れまでの罪にこだはつて許さねえとは、餘り邪慳だ。――何のこんな世の中に神も佛もあるもんか！」と、キリ〳〵と齒を嚙んで、熱い息をほつと暗い空に吐いた。父の遺言に胸を刺されて、初めて眞人間の心に覺醒した惣太は、飽くまで罪を責めることの執拗な世間の迫害に、湧き易く、煮え易いその血潮は沸騰せずには居なかつた。一つの網が切れゝば、心は一方に彈き返る。見る〳〵中に感情が昂ぶつて、心は煮えるやうに怒激して來た。復讐！　と叫んで、其の決心が恰かも天の使命の如くに、全身の血を湧き立たせた。そして、思はず固く握りしめた拳は、ブル〳〵と顫えた。

「眞人間になつても世間が許さねえ。何所までも惡人で押し通して、人間の敵になるのだ！　死んでも惣太の魂は惡魔になつて、世の中に祟つて遣る！」

毒火のやうな呪咀の言葉を吐くと、物をも言はず惣太の姿は素早く暗に消えて了つた。番僧は全で狐にでも撮まれたやうに、呆氣に取られて立つて居たが、やがて嘘一つすると、冷たい夜氣に胴振ひして、庫裡の方に行つた。

其三

雨催ひの空は低く曇つて、生温かい風がどうと物凄い音を立てゝ吹くと、古綿にべつとり墨を含ませたやうなドス黑い斷れ〴〵の雲は、矢のやうに南から北の方へ飛んで行く。――そして、時々バラ〳〵と礫のやうな大粒の雨が疎らに降ちるが、直ぐに止んで了ふ。――夜は更けて最う一時に近い。

此の恐ろしい嵐の闇を物ともせずに、伊東から下田へ抜ける間道の、そゝり立つや

うな斷崖の上を縫つた細道を辿つて居る二人の人影があつた。右は高い山で、眞黑に茂つた松や檜の大木に鋭く吹きつける暴風は物凄い叫びをあげて、左側の崖下には沖から押し寄せ〳〵て來る大波が、岩を嚙み、岸に碎けて、凄まじい音と共に恰かも狂ひに狂ふ幾萬の奔馬が銀の鬣を振り亂したやうな白泡を噴いて、荒れ狂つて居る。——二人は足場の惡い石塊道に、稍々もすれば沖から正面に吹き付ける暴風に足を取られさうなのを、踏み緊め〳〵歩いて居る。

「兄や、未だか。」と、後の影が前の影を呼んだ。

「お、、最う直きだから——一息の辛抱だ。」と、前の人影は風に吹き取られる聲を勵まして云つた。——其の脊には何か重さうなものを負つて居る。

やがて二人は、息を切り〳〵漸う〳〵のことで、山の出鼻まで辿り着いた。其所には吹き付けられる潮風に海に向いた枝は切り取られたやうにちぎれて、陸に向いた方だけに枝の伸びた、幹の恐ろしく太い松が一本立つて、恰かも風と戰つてゐも居るやうに、枝と云ふ枝が恐ろしい呻りを上げて居た。

「音次、此處だぞ。」と立止まつてほつと太息を吐いたのは、惣太であつた。

「兄や、來たのけえ。」と、之れも肩息である。

「さア、父さんを下してくれ。」

と、音次に手傳はして、惣太は胸のあたりに結びつけた紐を解いた。——冷たくなつた父の死骸を胸に抱いた音次は、其の重みでよろ〳〵と蹣跚た。

「危ねえ。」

と思はず叫ぶと、惣太は素早く身體をくるりと廻して、しつかり抱き止めた。そして父の死骸を雨に濡れた土の上に横へた。

「音次、父さんを葬むるんだから手傳うんだぞ。」

「葬むるつて、何じよすだよ。」

「海へ入れるんだ。」

「父さんを海さ入れる。——冷たかつべえ。」

「死んだ人間だから冷たくもなければ、痛くもねえ。本當ならお寺の坊さんに來て貰

つて、お經の一つも上げて墓に葬るのだが、それが出來ぬえのだ。かと云つて何處にも埋るとこもねえ。憖じつか後で何とか彼とか厭な文句をつけられて掘り返されるやうな恥をかくより、一そ海へ葬つて了つた方が好い。——一度沈んだ死骸の上つたことのねえ、音に聞えた此の難所だ。此所へさへ葬れば、二度と再び浮き上つて來るやうな心配はねえから。」と、氣負つて云つたが、急に力抜けのしたやうに、がつくりして、「只一人の父だ。——長い間慘めな苦勞して來た父だ。せめて死んだ後だけでも靜かに葬つて遣りてえ。——それが出來ねえのだから情けねえ。——あゝ、それも皆世間の奴等の爲めだ。」

さう云つてホロ〳〵と泣いた。——父を思ふ熱い涙は、冷たい死骸の上にハラ〳〵と落ちた。

やがて又思ひ返して、

「だが生き乍ら人里離れた山へ引つ込んだ父のことだ。憖じい寺などに葬られて死んだ後まで彼是れ憎まれるより、誰も知らない此の荒海の底へ葬られた方が、却つて父の本望だらう。」と、獨言つて溜息を吐いた。

さうは思ふものゝ、お經の一つも上げないで此の儘海底に葬るのは、情に於て忍びなかつた。——闇の中に見飽きぬ父の冷たい顏を見入つて居た。

が、やがて屹と心を取り直した。

「さア、音次、お前も手傳つてくれよ。」と、自分は頭の方を持つて、音次に足の方を持たせた。惣太の指圖に、音次は默つて働いた。——二人の力に死骸は輕々と宙に上つた。少しの張りもなくなつた死人の手や、足や、首がぐつたりと力なく垂れ下つて、何うかした拍子に骨がボキ〳〵と鳴つた。

風は頻りなく吹き付けて、海も山も、見る眼に何の彩もなく只一色の闇の濃漆に塗り潰された。——其の空洞のやうに果てしもなく黑い空間に、風は鳴り、雲は飛び、波は叫んで居る。

二人は死骸を抱いた儘、此の怒り哮つた天地の威壓を頭から押し被されて、恰かも惡魔の呪咀の息吹を浴びたやうに、秒時の間ひたと息も止まつて、立竦んだ。

其の時、又、雨はバラ〳〵と横吹きに、頭から頬を叩きつけた。

「兄や、俺、恐ねえだ。」と、聲が顫へて居る。

惣太は、其の聲に初めて我に返つた。

「おゝ、兄やが居るだから何も恐くはねえよ。」と勵まして、「兄やが聲をかけたら、好いか、手を離すんだぞ。」

二人は崖の突つ鼻まで進んだ。直ぐ足の下は切り取つたやうな絶壁で、幾十丈の底の方には、遠い沖から躍り狂つて押し寄せて來る波が、此の一擧に岸を嚙み潰さうとするものゝ樣に、突破して打つかつて來る。——と波は全身を粉々に打ち碎かれて白い泡を吹き、怨みの悲鳴を物凄く擧げる。——恰かも、岸と海とは幾百千萬年の昔から相許すことの出來ない仇敵でもあるかのやうに、永劫の過去から無限の未來へ亘つて、間斷もなく斯うして相戰かつて居る。

足の下は其の恐ろしい地獄だ。——惣太も、音次も、思はず眩暈いて、總身がわな〳〵と顫へた。

「音次、好えか——しつかりするんだぞ。」と、惣太は我が心を引緊めて聲を强くして勵まして、

「音次先刻云つたことは分つたな。——兄やの掛聲と一緒に手を離すんだぞ。」

惣太は最う一度確めた。

「分つたゝよ。」

二人の顏は見えない。只聲ばかりを賴りにして居るのだが、其の聲が稍々もすると風に吹き取られて、語尾が消える。

「父つさん、濟まねえが、……」と聲を呑んで、「兄弟二人の手に葬られるのをせめて彼の世の土產にして、迷はずに定佛を賴むだ。」

と、口に出して詫びると共に咽喉まで込み上げた合圖の聲も、流石に口へは出せなかつた。——血を分け、肉を分けた現在の父の死骸を、此の闇の、此の海の底へ、此の儘葬むるのかと思へば……。

だが、何時まで斯うして居ても限りはない——何時投げ込む時はない。——惣太は

屹と心を取り直した。そして、口の中に念佛を三遍唱へると共に、

「音次。――そら……。」

「おゝ。」

二人の手を離れた死骸は、眞暗な深い足の下へ音もなく呑まれて行つた。

天地は暝々晦々、風の叫びと、波の哮りが獨り物凄く其の暗黑の寂寞を破つて居る中に、二人は恰かも失神した人やうに衝つ立つて居た。

それから一時間もすると、二人の姿は長安寺の庭にひよつこり現はれた。家根の高い大きな建物は、暗い空に、恰かも生き物のやうに、黑く、がつしりと立つて居た。強い力で投げ付けるやうに吹き來る暴風に、高い家根の棟は物凄い唸り聲を立てゝ居る。

惣太は、甚しく鋭くなつた神經の注意を集注して本堂の階段を上つて行つた。そして

て厚い大戸にひたと耳を寄せて、中の樣子を伺つたが、中は恰かも深い空洞のやうにひつそりとして、何の氣勢も感じられない。暫くは其所に衝つ立つて居たが、やがて、其の蒼くなつた顏に物凄い笑みを浮べると、錠のかゝつた大きな戸を、手早く外した。

――黑白も分らない闇の中の奥深くに、佛像の黃金が仄かに光つて居るのが、遙かに見えた。

「兄や、何するだ。」

後に衝つ立つて居た音次が突然聲を立てた。

「默つてるんだ！」と、手を上げて、底力のある聲で抑へつけるやうに制して、「お前、此處に待つとるんだぞ。」

と、音次の耳に口を持つて行くと、聲を忍ばして呟いた。そして、惣太の身體はすうゝと本堂の中の闇に呑まれた。

惣太は、庫裡の方へは行かずに、本堂の中央の大きな柱に掛けてある、今度新たに鐘を鑄る費用として、多くの信者から募つた喜捨金の入つて居る箱を引きちぎつて下

に置くと、今度は佛壇の前の經机の上に重ねられた八九冊の經本を小腋に抱へて、佛壇の後へ廻つて行つた。そして、それを骨壺などを並べた棚の隅に置いて、其の上に佛像の掛物やら、金襴や、錦の幕や、打敷なぞを取り外して來ては積み重ねて、懷ろを探るとマッチを取り出した。殆んど腹這ふやうに蹋んで一本摺ると、急に四邊がぱつと明るくなつたが、それは直ぐ風に吹き取られて、又元の闇になつた。二番目を摺つたが、それも果敢なく消えて了つた。

「ちえッ。」と、我れにもなく惣太は舌打ちして、今度は五六本一緒に持つて摺りつけた。紙の切れ端から燃え付いて、見る〳〵赤い焰はメラ〳〵と燃え上つて來た。其の光がパッと廣がつて行つたが、火尖は次第に薄く廣い闇の中に消えて行く。

いくつと立つて、鋭い眼をギロ〳〵と配つた惣太の顏は、燃え上る赤い焰を正面に浴びて、恰かも朱でも注いだやうに物凄い。欄間に貼つた喜捨金の額を記した紙などが、火勢の爲めにひら〳〵と搖れる。火は瞬く間に佛壇の後ろから燃え付いて、紅蓮の焰は大蛇の舌のやうに、チラ〳〵、チラ〳〵と高い天井まで這ひ上つて行つた。

燃え上る焰を仰いで、「最う大丈夫！」と、さう思つた時、赤い火を浴びた惣太の顏には物凄い笑みが上つた。そして、敏捷こく身を飜すと、先刻柱から降した箱を小腋に抱へて、入口まで出た。

音次は暗い中に、しよんぼり立つて居た。

「兄や、火い燃やすだか。」

「おゝ。」

「よく燃えるだなア。」

其の時火は最う天井まで燃え上つて、流石に廣い堂内も明るくなつて來た。

「おゝ、能く燃えるわ。——見ろ、二時間經たねえうちに、伊豆一番の此の大きな寺が灰になるだから。ハ、、、、……」と快よげに焰を仰いで、惣太は高く笑つた。

「さア、音次。お前は之れを持つて崖下まで先へ行つて、あのおでこ岩の傍に待つて居ろ。俺も直ぐ後から行くだから……。」

と、喜捨箱を持たして音次を先に遣ると、バラ〳〵と戸を四五枚繰り開けた。高い

岡の上にあるので一層強く當つて來る暴風は、開け放つた戸の隙間から狂ふやうに渦卷いて流れ込んだ。其の勢ひに煽り立てられる焔は、急に猛烈な勢ひを得て、火焔を撚りながら見る〳〵燃え廣がつて行く。ごうゝゝと呻りを立てゝ駈る暴風の音に混つて、乾ききつた板や柱の燃え裂ける物凄い響が、パチ〳〵と鋭い音を立てた。

庫裡は本堂から遠く離れて、廊下傳ひに行くやうになつて居るのと、それに、草木も眠る眞夜中の二時である。寺の人達は深い眠りに陷込んで居ると見えて、眼醒めたやうな氣勢もせぬ。——焔を睨んで魔王のやうにすつくと衝つ立つた惣太のぐつしより濡れた着物からは、白い湯氣が立つて居る。あゝ、死ぬる間際の苦しい息の間から殘した父の一言に長い迷夢を醒まされて、折角眞人間に立返つたものを、人間の罪を許すことの執拗な世間の迫害に、更に深い罪惡の淵に心を突き落された！　此の今日刻まれた新しい而も強い怨恨を何時の世にか忘れられやう！　今日から惣太の心は、最早や人間の形をした惡魔である。神を試み、人の子の平和と幸福とを呪はんとする黑い爪の生えたサタンである。——彼は幾百萬の人間の信仰に組み上げられた此の宏

麗な建築も、幾千年の昔から幾億萬人の魂を救ひ、それを活かす城となつて、そして永劫の未來まで朽ちることのない此の偶像も、吾が摺つた一本のマッチの火に瞬く間にメラ〳〵と燃えて灰になつて行く有樣を目の當りに眺めては——胸は躍り、血が鳴つた。

「神も佛もねえ世の中だ。俺だつて生れ乍らの惡人ぢやねえ。人間並に血もあれば涙もある。可哀相なものを見れば憐れみもするし、泣きもする。其の人間をこんな心にしたのは誰の罪、誰の科だ！　神や佛があつたなら、生き乍ら現世の罪の地獄に此の惣太を落して、何故默つとる！」と、呻くやうに呟いた。

殆んど天井一ぱいに廣がつた炎々たる焔は、風の煽れにくる〳〵と渦卷いて、頭の上を、凄まじい勢ひに走り廣がる紅蓮黑烟！　暴風はさながら惡魔の使徒でゝもあるやうに、更に勢ひを逞しうして火勢を助ける。

滿身火を浴びて、衝つ立つた惣太の顏は、紅のやうに眞赤に染まつた。眼は血走つて、其の脣からはヒステリックな笑ひ聲が叫ばれた。

「眠つた寺の奴等も佛樣と一緒に、此の世からの火の地獄に落ちるが好え。」

と、叩き付けるやうに恐ろしい呪詛の言葉を吐いた。そして、其所にあつた大きな賽錢箱に手をかけて、ウンと力を籠めると、輕々と肩の上に擔ぎ上げて、一散に表に出た。小徑を左に曲ると、やがて崖下へと降りて行く。——其所は廣い濱になつた。正面に吹き付ける南風に、眞暗な沖からは高い波が押し寄せて、物凄く碎けて居る。其の波がだん〳〵迫つて來て、陸も山も一呑みにされるのではないかと怪まれる。

闇の中に惣太は其の邊を透して見た。汐の光りに濱はぼうつと明るんで、黑い岩蔭に人の蹲踞つて居るのが朦朧と見えた。

「音次！」

「兄や。」と、むつくりと起き上つた。「俺、兄やが來ねえで、恐ねえだ。」

「何も恐かないことはねえ。」と、音次の傍へ寄つて行つた。そして賽錢箱をどさりと下して、

「先刻の箱を何うした。」

「此所にあるだ。——又大えの持つて來たゝの。」

「うむ。」

と、簡單に返事をして、手早く箱を力任せに岩に打つけると、一度で脆くも釘が緩んだ。ざくり〳〵と錢の音がする——惣太は二つの箱を捩ぢ開けて、中から金を掴み出した。

「兄や、えらく錢が入つとるだな。」

「うむ。——お前も之れをしつかり懷に入れて持つとるだぞ。之れから先、兄やの身は何うなるか分らねえ。一人になつてから誰が何と云つても、只知らねえと云つて、此の錢は出すでねえぞ。錢さへあれや、何處へ行つても何うでもなるだ。」

「兄や、俺も錢を持つのけえ。——嬉しいなア。」と、音次はわけもなく喜んだ。

「音次、兄やが云つとくことあるだが、どんなことがあつても姉やのとこへ行くでねえぞ。好えか。」

「兄やが行くなと云ふなら、行かねえだ。」

「あゝ、お前が若し行きでもすると、姉やの身が立たなくなるだ。」

「行かねえよ。」

「それで安心したい。」と、惣太は崖の上を仰いで見た。風が烈しいので、火は高く燃え上らないが、紅の焰は濃い闇を染めて地を舐めて走る。——そして、風の力が少しでも衰へた合間を見ては、メラ〳〵と高く上る。が、見る間に次ぎに吹き付けて來る烈しい風に、焰は又火尖を折られて直ぐに横に倒れ、黑烟と共に渦巻き乍ら這つて行く。

「兄や、えらく燃えるだな。」

惣太は火勢を仰いだまゝ、

「見ろ！　父つさんの怨みの一念で今夜の此の暴風だ。どんな立派な家でも、大へ柱でも此の暴風に煽られちや薄い紙のやうに燃えるだ。」

其の時、時ならぬ鐘の音が、闇を破つて、吹き卷くる風に消え勝ちに、ヂャン、ヂャンと響いて來た。

「おう、寺の奴等ア今漸つと眼を覺ましたと見える。」と呟いて、「さア、音次、兄やの後について來るんだぞ。此の村を今夜火の海にしてくれるから！」

さう云ふと二人の姿は濱傳ひに、吹き付ける風を負うて疾風のやうに闇の中に消えた。風の呻り、其の風の氣負ひにごう〳〵と焰の煽れる音、瓦の崩れる叫び、人々の叫喚などに交つて、益々烈しく亂打される鐘の響きが、暴風の闇の夜の重々しい空氣の中に物狂ほしく聞えて居た。しかし、其の効果はなかつた。村から大分離れて居る上に、風や波の凄まじい音に揉み消されて、村の方では知る人もなかつた。

其のうち、村の方にも、メラ〳〵と火の手が上つた。——見る〳〵中に其所へも此所へも眞紅の焰の舌が、ペロ〳〵と上る。此所で燃え上つたかと思へば、直ぐ又二丁ばかり先にも燃える。忽ち四五丁先にも燃え上る。それはとても人間業とは思はれない。神の意を享けた靈ある火が自ら飛ぶやうに思はれた。——眠入ばなを不意に此の異常な出來事に襲はれた村の人々は、只驚き、怖れ、惑つて成すところを知らなかつた。——風に勢ひを得て容赦なく燃え廣がつて行く焰を只眺めて居るより外になかつ

た。其の燃え廣がつた焰は大きく一團となつて天に沖して空を紅に焦し、闇を朱のやうに染めた。

あゝ恐ろしい火の柱！　火の海！　火の地獄！

第三章

花に狂ひ立つた四月も過ぎて、世は五月の爽かな若葉の季節となつた。此の頃では郭公も鳴くと云ふ佐原子爵の廣い庭園には、楓、樅、櫸などの小枝からそれ〴〵の柔らかい若芽を萠えて、日に〳〵濃い緑に色づいて行く。

例の鳥山中將はつい此の間豫備になつて近頃閑散な身を持て餘し、今日も朝から佐原家を訪問して、奥まつた主人子爵の書齋で晝餐の箸をとる間も忙しさうに鳥鷲の戰ひを樂しんだ。書架の上に置かれた時計が二時を打つた時には、立て續けた十幾番かの勝負の片が漸くついたところであつた。

「やあ、最う二時になりをつたか、――。いや、どうも未だ貴方には一歩を讓るところがあるて……。大いに英氣を養つて復讐戰を試みんけりやならんわ。ハ、、…………」と中將は黒石を集め終ると、ぱつたりと石壺の蓋をして、銀の如き長髯を扱いて

大笑した。

「何うして！　貴方も近頃は中々手強いて。何うかすると俺の方の形勢が危いことがあるぢや。」

と、是れも磊落に高く笑ふと、其の便々たる鼓腹は波のやうに搖れた。

「何うぢや、久し振りに庭でも拜見しようか。」

「今、恰度蹴鞠が盛りだから、苦香亭の方へ案内しよう。」

「令嬢や、久世さんも同道しちや何うかな。」

「久世は……」と子爵は苦笑して、少し躊躇したが、「鞆音だけにしよう。」

鳥山中將は其の樣子に子爵の心を讀んで、

「相變らずうまく調和せんかな……。」

「いや、子供も大きうなると中々親の云ふことに服從せんで、大きに困り居る。」と云ひ乍ら手を鳴らして小間遣を呼んだ。

「貴方、そいぢやから可かん。幾ら年を取つても親は親ぢや。——生意氣を云ふたら

親の威嚴でぎゆつとそつ首を抑へつけることぢや。さうでないと若い者ども、生意氣になり居つて可かん。」

「いや、子供の方にも相當の批判が出來居るで、親父の威信を振り廻しても中々抑へ付けられて居ないて。却つて親の方が議論では遣り込められるぐらゐだからな。——何うも子供では全く苦勞する。」

「そいぢや、俺のやうに子供のないのも却つて安氣かな。ハ、、、……。」と、長い髯が搖れる。

「大きにさうぢや。」

其所へ小間使のお澄が闕際に手を仕へて、色の白い顏を覗かせた。

「お召になりまして？」

「おう、澄か。お嬢さんに鳥山さんと御一緒に苦香亭の方へ行くから、お供しろと、さうお言ひ。——そして、庭下駄を廻してくれ。」

お澄が畏まつて出て行くと、二人は緘默して相對した。中將は其の癖の髯を無意味

に扱きつゝ、眼は袖垣の傍の蹲の冷々と水に濕つたのや、じめ〳〵と青苔の生えた土や、古色を帶びた青銅の水瓶の肩などに、楓の若葉を洩れる青い日光がチラ〳〵と動くのを無心に眺めて居た。子爵はシガーの口を切つて、薄い紫の煙を緩やかに吹いて居る。

遠い廊下から絹摺れの音がさや〳〵と聞えると共に、磨き込んだ床に辷る輕い足音がして、それが次第々々に近づくと、やがて、眼醒めるやうな派手づくりの鞆音の妻が、二人の眼の前にぱつと現はれた。それと同時に、高貴な香料の鋭い香りが、咽ぶやうに、二人の鼻を襲つた。髪をローマに結んで、すらりとした身體に、紺地に藍と白との絢り堅縞の養老お召の着物に、白地に片輪車を飛ばし、それに鼓をあしらつた金や、紺や、茶や、緑の配色美しい、曙唐織の丸帶を背高く結んだ。——手を動かす度に左の薬指に嵌めた黄金の指環のダイヤモンドが、チラ〳〵と燦めく。

「やあ、鞆音さん。暫くだつたのう。」と、中將は振り返る。

「おや是れは鳥山さん。能く入らつしやいました。」と、すつと座敷に入つてぴたりと

坐ると、先づ中將に挨拶した。

「今、躑躅を見ようと云ふのだが——。何うぢやな、お前もお相手になつては？」

「あの、今日私お約束のお客樣があるんですけれども……。」と濃く長い眉を心持顰める。

「何誰かな？」

「江守先生なのよ。」

「そんなら一緒にお通しゝても一向差支へない。——折角ぢやから、まアお出で。」

「えゝ。」と、返事はしたけれども、餘り進んだ樣子でもなかつた。

しかし、お澄が三人の庭下駄を踏石の上に揃へた時には、默つて父の後に從つた。

「あの江守入生が入らしたらね。關はないから亭の方へお通し申しておくれ。」と、傍に腰を跼めて居るお澄に命じた。

先に立つて居た中將もお澄を振り返つて、

「後にな、久世さんにも此方へお出でと、鳥山が云ふたとさう傳へてくれ。」

それを聞くと鞆音が急に暗く眉根を寄せた。中將の眼はチラとそれを見たが、素知らぬ風に顔を反けて、

「あゝ中々好い庭だ。こんな廣い庭は東京には一寸珍らしい。――花時分も好いが、若葉の美しいのも味があつて格別ぢや。」と、空嘯いた。が、急に思ひついたやうに、「花とか、若葉とか言へば、佐原さん。令嬢も最う花の盛りを過ぎた若葉の年頃ぢやが、何うですな、何處か好い縁談の口でもありましたか。」

「さア、其のことで……。」と、子爵は一寸娘を振り返つたが、「其の談がないでもありませんが、何分これも未だほんの子供だから、そんなに急くこともあるまいと思ふので……。」

「何う云ふものかな……」と、中將は袂から吸ひ馴れた質素なカメリヤの袋を出すと、一本吸ひ付けた。「兎角、年頃の娘を何時迄も子供と思つとると大變な間違ひが出來ますぞ。――今の者は油斷がならんからな。」

鞆音の眉はピリ、と動いた。

「鳥山さん、ちとお言葉が過ぎはいたしませんか。――殊に私の前で、少し失禮だと思ひます。」

「ハ、、……」と大きく笑つて「之れは大きに御立腹ぢやな。――俺は貴方の前だから云ふのぢや。まア好え、鞆音さん、さう怒らんで、亭へ行つて緩くり話さうぢやないか。――稀には老人の云ふことも若い者にや藥になる。」と、少しも動せぬ。相變らずゆつくりと大股に足を運んで居た。

「えゝ、伺ひませうとも！」

高い樹立の若葉を透す日の光りが縞目のやうにバラ〳〵と地に落ちて、三人の頭から、肩から、脊へも降り注いだ。――中將の鼻から吹き出すカメリヤの淡い煙が、光りに漂ひ、影に消える。

樹立を拔けると、やがて三人は池の畔の亭に着いた。汀を取り卷いた岡に配置好く植ゑられた、白や、赤や、緋や、紫や――色さま〴〵の躑躅は今を盛りと咲き溢れて、靜かな春の午後を小波も立てずに青い空を映して澄み切つた池の水に、其の影を落し

て居る。

「あゝ好い景色ぢや。」

中將は思はず斯う嘆美の聲を洩らして、船板のベンチにどかりと腰を下した。

「二日ばかり見ぬ中に、すつかり咲きをつた。」と、子爵は中將の右斜めに腰を下して、シガアの吸口を切る。——鞆音は父に向ひ合つて腰掛けた。

三人は暫く無言であつた。

一片の雲の影をも止めぬ空は、磨ぎ澄ました一錬の鏡のやうに蒼み渡つて、池の周圍の木立の若芽の蔭では、名も知れぬ小鳥が春の輝かしい日の幸福を喜ぶものゝやうに、朗らかな聲で絶え間もなく囀つて居る。と、池の汀の淺瀨では、蛙がグル〳〵、グル〳〵と表情のある聲で鳴いて居る。萠え初めた木や草の若芽、小鳥の囀り、美しく咲いた花、蛙の聲——そしてひた〳〵と汀に寄せて來ては忍びやかに呟く水の聲まで、皆、温かく大いなる春の惠みに歡喜し、享樂して居るやうに見える。總べてが快く、總べてが樂しげである。

中將も子爵も、此の長閑な光景に心からのんびりして、緩やかに煙を吹かして居た。それだのに、鞆音一人のみは、先刻の鳥山の言葉が癪に障つて堪まらぬので、何か言ひ出せば、此の胸が晴れるまで言ひ卷つて遣らうものをと、心をぢり〳〵さして待つた居たが、中將は最う先刻のことはけろりと忘れたものゝやうに、ポカリ〳〵と煙草を吹かして居る。——其の落着き切つた樣子を目の當り見ると、一層心が焦々として來る。今云ひ出すか、今云ひ出すかと思つて待つたが、中將は幾本かのカメリアを吸ひ捨てゝ、更に又新しく一本に火をつけた。それが鞆音には、中將が自分の心持をすつかり見透かして居て、故と焦らして居るやうに、むら〳〵と癇癪が起つて、最う堪らなくなつた。

それで、少し險を持つた眼を中將の顏の上に眞直ぐに向けると、

「鳥山さん、先刻の話の續きを伺ひたいものですね。」

「先刻の話と云ふと……何か俺が又昔話でも始めたかな？」と、ゆつくり鞆音を眺めた。

鞆音にはそれが又故とらしく見えて、堪らなかつた。

「まア、お忘れつぼく居らつしやいますことね……何うしてもお年を召しますとね……。」と皮肉な笑みを薄く口元に見せて、「ぢや私から申しませう。——そら、先刻特に私を前に置いて、今の者は油斷がならんと仰言いましたでせう。——今私の伺ひたいと申しましたのは、其のことで御座いますのよ。」と、最う半ば喧嘩腰になつて、聲が尖り、息も喘んで居る。

「あゝ、其のこつてしたか。——いや大きに年を取ると物忘れも強くなるて。なア佐原さん。」と、中將は吸ひさしのカメリヤを脣から取つて指に挾んだまゝ、子爵を顧みて笑つた。

子爵も苦笑ひしたが、「鞆音、お前の議論は議論として、何も鳥山さんの一言を楯に取つて、さう執拗く言はんでも好えぢやないか。」と、我が娘を宥めるやうに云ふ。

「執拗ですつて？　お父樣！」と、鞆音の眉は更に險しくなつた。「私は、自分の前で當てつけがましい侮辱を受けては、默つて居られないのが性分ですから……。それ

で、はつきり會得出來るまでお伺ひ申すのに、何もお父樣から執拗など、、お叱りを受ける筈はないと思ひます。」

「いや、叱つたと云ふではないが……。」と、子爵は我が子ながら鞆音の癖性なのには兼ねてから一歩讓つて居るので、敢て其の上爭はうとはしなかつた。——押して言へば何う破裂して來るか分らない。それで、興醒めたやうな色をして口を噤むと、空しく顏を背けて、池の面に眸を遣つた。

中將は、子爵の其の態度が齒痒ゆくもあれば、鞆音の目上を目上ともしない仕打が小癪でもあつた。で、鞆音の冷やかな顏に鋭い一瞥をくれると、子爵の眼を追つて、「佐原さん、何うも近頃の若い者の間には妙な言葉が流行し居つて、野合のことを自由結婚と云ふたり、淫奔のことを戀愛と名付けたり、昔の君子が敎へた男女七歳にして席を同じうせずと云ふやうな嚴重な禮儀を古くさいとけなして、段々人間の道を遠ざかつて、禽獸に近いやうな種々なことが流行居る。——何うも國家前途の爲めに慨嘆すべきことぢやて。——お宅の令嬢なども、其の流行の中に捲き込まれんうちに、

何うか早う始末をつけたら何うだな。之れは、永年の親友としての俺が貴方に對する忠告なのぢや。」

鞆音の顏の筋肉は、先刻から怒りの爲めにびく〳〵と顫へて居たが、中將の言葉の切れるのを待ち兼ねて、

「何で御座いますつて、近頃の若い者が禽獸……」と、氣負ひかゝつて捲し立てやうとするのを、父子爵は、大きな手を擧げて制した。

「だつてお父樣！」と、口惜しがつて眼には涙さへ見せた。

「お前は默つてお出で。」と娘を靜かに宥めて置いて「まあ、さう言へばそんな樣なものだが、私の考へではまア娘の思ひ通りに任せて置く意りですぢや。——此のことだけは親の方から無理强ひも出來ませんからな。」と、自分の心にもない結婚を親に强ひられた爲めに、半生の苦い家庭の經驗を嘗めたばかりか、其の爲めに妾まで置くやうになつて——子爵が往年花柳の巷に出入したのは、子爵自身の心中に立入つて見れば、單に政界に於ける劇務の勞を慰める爲の風流ばかりでなく、夫婦の間がうまく調

和せぬ家庭の餘憤を遣る！　と云ふやうな意味もあつたので——累ひを今日にまで殘して居る。さう云ふ經驗を嘗めた身であつて見れば、自由結婚とか戀愛とか、近頃の青年男女間に流行の風潮には全然贊成出來ないながらも、娘の結婚問題なぞに就ては、さう親の權威を着た一概なことは言へなかつた。

しかし、さう云ふ經驗を嘗めたことがないばかりか、子供の味を知らず、忠君愛國と親に孝と云ふことより外には、徹頭徹尾頭に無い中將には、多少娘の意志を尊重して親の威望を曲げたり、讓つたりするやうな、子供に對する子爵の態度が、何うしても慊りない。

「無理强ひが好い、若い身空でどんな男が好いとか、どんな女が好いとか、選り好みをするな僭越なことぢや。第一人物に對して見込みをつける鑑識があらう筈がない。任して置いたら乞食の子を菓子屋の前に突き出すと同じことで、手當り次第に摘み食ひするだらう。なア鞆音さん。——いや、之れは失禮ぢやつた。何も貴方一人に云ふことぢやなかつた。」

鞆音は最う先刻から口惜しさに胸がわくわく顫へて、言ひ返して遣りたいことが一ぱいありながらそれが却つて咽喉に痞へて、言へなかつた。

「十八世紀の遺物のお爺さんなんかには、何うせ現代の思想が分りやしないのですわ。」と、漸う〳〵それだけ云つて、聲を呑んだ。——眼が潤んで、脣が顫へて居る。

「いや、尤もで……。全くとても分らない。」と中將は素直に頷いたので、鞆音は幾らか胸が凪いだ。

「そいぢや、鞆音さん。貴方は一體どんな人と結婚する意りなんぢやな？」

「私、結婚なんかしませんのよ。——結婚すると家庭に束縛されて、最う社會へ出て働くことが出來ないのですもの。」

「ほう。社會へ出て働く？　之れは面白いことを伺ふものぢや。」と、中將は殊更に感服したやうな、又呆れたやうな表情をして見せたが、「女は内に居て、能く内を治めたら好いのぢや。女子の尊い價値は其所にあるのではないかな。女が社會へなど出てさう働かれちや、男は隙居せにやならんことになるぢや。——鞆音さん、貴方も立派な子爵家の令嬢と生れ乍ら、黒い合羽か何か着た鐵道の事務員にでもならうと云ふ意りかな。」

「それだから鳥山さん、貴方は十八世紀の遺物なんですよ。」と、鞆音は嘲笑つて、「社會に出て働くと云ふのは、何も交換局へ出たり、銀行や會社の事務員になることばかりではありません。それは女の勞働と云ふものです。私の社會へ出て働くと云ふのは、社會的に貢獻する仕事に盡すと云ふ意味なので御座います。たとへば文明國としては未だ幼稚な恥しい狀態にある音樂界の爲めに盡すとか、……。」と、少し薄味の脣に滔々として快辯を振ふのを、眉を顰めて厭はしさうに聞いて居た中將は、其の時手を擧げて押へた。

「いや、よう分つた。何しろ偉い抱負ぢやが、得て婦女子輩のさう云ふ抱負は危險なもので、其の身を誤り易いものぢやて。昔から女賢しうして牛を賣り損ねると云ふが、全くぢや。——今日の女子を誤るものは、女子を開發せんとする教育其の物の弊ぢや。」

「それは大きにさうです。」と、今迄默つて二人の交す話を聞いて居た子爵は、如何に

も我が意を得たと云ふやうに頷いて、「俺も、何うも近頃の教育は、女を除り學者にし過ぎる弊害があると思つとる。」

「しかし、困つたものぢやなア。」と、中將は嘆息して、「俺は、今の女學校を皆燒いて了つて、亭主御機嫌取練習學校と云ふのを建てたら可いと思ふ。——女房に學者になられたり、社會へ出られたりするよりも、内でうまく御機嫌を取つて貰つた方が、どれだけ男の助けになるか知れやせん。」

「之れは名案ぢや。ハ、、……。」と、子爵は手を拍つて同じた。

鞆音は中將が眞面目でそんなことを云ふのに、寧ろ呆れて、

「私は、何うせ貴方方とは思想が違ふのですから、何時まで話しても相容れることはありますまい。ですから最うお話する必要はありません。」と、顔を背けた。

爽かな、若芽を渡つて來る柔らかな風が、はらりと白い頬にこぼれた後れ毛を嬲つて、又、草木の小枝や、若芽にソヨ〳〵と呟きながら、何處ともなく吹いて行く。——と、池には小波が一頻り戯れて、汀の土や、石や、杭などにペチャ〳〵と呟く。

「あの、江守先生がお見えになりまして御座います。」と、勝氣らしい澄んだ瞳を、腰掛けた中將の肩越しにチラ〳〵と覗かして、取次に來たお澄は小腰を跼めて云つた。

「先生が……。」と、鞆音は思はず喘んだ聲で云つて振り返つたが、恰度鳥山中將の視線とぴつたり合つたので、わけもなくぽつと頬を染めると、慌てゝ反らして、極りの悪いのを紛らすやうにお澄の顔を睨んだ。

「先生が入らしたら此方へお通し申すやうに、先刻さう言ひ付けて置いたのを忘れたの？　お前、私の云ふことを上の空で聞いて居るのね。」

「いゝえ。決してそんなわけぢやありませんけれど、一度お取次ぎいたしませんと……。」

「叱られると云ふの。——言ひ付けた時にはそんな必要ありません。お前は召使ひだから、何でも云ひ付けられた通りにすれば宜しいのです。」

「はい。御免遊ばして……」と、お澄は首を俛れて、何うしたら好いか分らなかつた。只、其の儘立つておづ〳〵して居た。

「お前何をぼんやり立つて居るのだね。——早く御案内申しな。」と鞆音はぢれつたさうに屹と下唇を前歯に噛んだが、男のするやうに片足踏んで慳貪につた。

お澄は其の險相な顔をチラと見たが、默つてしほ〳〵と去つた。紫縮子を腹合せした帶の片側の友禪の赤いのが、後ろから照る日の光りに輝いて、木立や、歡木の綠の間からチラ〳〵と見える。其の後姿を哀れむやうに見送つて居た鳥山中將は、

「まア、鞆音さん、目下の者にはさう邪慳に言はんことぢや。」と、見兼ねて口を挾んだが、「あゝ、江守と言へば何時かの園遊會の時に、何か鳴らし居つた、毛唐人のやうに揉上を剃り落したり、赤い襯衣を着たりした彼奴ぢやらう。ありや見たばかりでも反吐が出るやうぢや。——どりや、私は歸るとしよう。佐原さん、左樣なら。」

斯う云つて中將は、遽かに其の大きな體軀をベンチから起した。

「最う歸る？　まア好えぢないかな。」

「いや、隨分遊び居つた。まア歸らう。いづれ復讐戰には近い中に遠征するぢや。」

「さうか——。そいぢや俺も彼方まで歸らうか。」

と、子爵が半ば身を起すと、鞆音は遮つた。

「お父樣は待つて頂戴。」

「待て？」と、眉を顰める。

「えゝ、一寸お話があるのです。」

「話がある。——さうか。」と頷いて、鳥山に向つて、「ぢや、俺は此所で失禮するとしよう。」

「左樣なら。」

鳥山は一揖すると濶歩緩やかに向ふに去つた。

「俺に話があるつて、先生が來たら又音樂の話が始まるだらう。——俺は音樂の話なぞ聞いたつて面白うはないからな。」と、進まぬ顏色を見せながらも、浮かした腰を再び据ゑた。

「いえ、今日は音樂の話ぢやない——眞面目なお話があるのよ。」

「眞面目な話？」と、心持眉を顰めて、シガアの吸口を唇に持つて行つたが、火の消

えて居たのに氣が付いて、袂にマッチを搜つた。そして、それを摺りつけると、正面に鞆音の顏を眺めて、「どんな話かな？」と、濃い煙を吹かす。

「まア、後に先生の前でお話し申します。」

「先生の前で？」と益々訝しさうに眉根に深い皺を刻んだが、又、音樂會の何うとか云ふことだらうと推測をつけて、

「さうか。」と一人大きく頷くと、默つて了つた。

其所へ江守は例の長く延ばして頭の眞中から分けた髮の毛に、櫛の目も正しく、油にテラ〳〵光らして、遣つて來た。綠色の脊廣に、縞綾のヅボンを穿いて、變りチョッキのポケットからは細打ちの金鎖が下つて居た。

「や、何うも遲くなりまして、實は今日音樂會の方の時間が遲れたものですから……

……つい失禮致しました。」と、先づ歐羅巴流に女から挨拶した。

「いゝえ――。先生が入らしたら此方へお通し申すやうに、先刻方小間遣に申し付けて置きましたのに、行屆かないものですから、ほんとに失禮いたしました。――さア、

何うぞお掛けなさいまし。」

と鞆音は自分も立つて新しく練習して居る表情術の和やかな笑顏を顏一ぱいに見せて、圓滑に言葉を運ぶ。

「いや、私こそ……。」と江守は輕く受けて、今度は子爵の方に向つて、「之れは御前樣。――何うも毎々お邪魔いたします。又今日は折角の御淸興を妨げまして……お差支へありませんか。」と、其の癖の右の手を額へ持つて行くと、びたりと生え際を抑へた――と、寶石入の金の指環がキラリと輝いて眼を射る。

「いや、娘が何うも始終御厄介になりまして……さア、お掛けなさい。」と、大樣に腮でベンチを指した。

「いゝえ私こそ……」と恐縮してペコリと一つ頭を下げてから、「ちや、失禮いたします。」と腰を下した。

「何うですな、娘も少しは上達し居りましたか。」

「いや、驚く可き長足の御進歩です。全く天才ですな。」

「さうですかい。何分毎日キイ〳〵遣るには閉口ですて――ハ、、、……。」と子に鈍い親の常に洩れず、それでも喜ばしさうに快く笑ふのであつた。

「先生、厭ですわ。――天才だなんて。」と鞆音は大業な科を見せて、優しく睨む。

江守は存外眞面目で、「何、全くです。」と、又、思はず額へ手を持つて行つたが、慌てゝ止すと、手持無沙汰に卷煙草をヅボンのポケットに搜つた。

鞆音は話頭を變へて、「先生、只今面白い話があつたんですよ。」と、其の時のことを思ひ出すと云ふやうに、皮肉らしい笑ひを見せた。

「何ですか。」と、江守は口に銜へた卷煙草に火をつけて、奇好らしく眼を上げる。

「十八世紀と二十世紀の衝突よ。」

「十八世紀？」と呑み込めぬらしく首を傾げたが、擽つたさうに笑つて居る鞆音の眼色に其の意味を讀んで、「あゝ、あの中將ですか。――私、今お庭で會ひました。」

「えゝ、さうよ。」と鞆音は最う興み切つた聲で、「本當に面白かつたわ、側で聞いて居ると、全で博物館の古物が物を云つてるやうよ。――ねえお父樣。」

「俺も矢つ張り其の古物かも知れん。」

「いや、御前は中々開けてお出でになりますから……」と、媚びるやうな笑顏を見せたが、話を反らして、「何うも全く好いお庭ですな。池があり、山があり、林があり――東京の市中に斯う云ふ大規模な庭園があるとは、全く夢にも思へませんですな。」と、池の面を眺めたり、躑躅を眺めたりして、褒め讃へた。

「いや一向手入も行屆かんぢやが――まあ、廣いだけが取り柄ですて。」

「どう致しまして。」

「それはさうと……。」と鞆音は言葉を挿んで、「お父樣、先刻一寸申しましたことね。先生の前でお話しいたしますよ。」

「うむ、何のことか知らんが、まあ話して見るが好い。――又、音樂の道具でも强請られるのかな。ハ、、、……」

「いゝえお父樣。今日のお話いたしたいことは、そんな性質の話ぢやないのですよ。――耶のことに就てゝすよ。」

「邸のことに就て？」と、子爵は呑め込めぬらしい怪訝な面色を見せて、「邸のことなら何も先生の前で話さんでも好えぢやないか。山崎も居れば、種島る居ることぢやからな。」と、家令や執事の名を擧げた。

「あんな古くさい頭の人間は役に立ちません。矢張り鳥山さんのやうな博物館組みだわ。」と一口に退けて、

「實は先生もね、邸のことを大變に思つて居て下さるのですから、それで先生の前で申し上げたいと思ふのです。」

江守は恐縮して、例の掌で又額を押へて、「いや、私がお邸のことを思ふの何のと言へば非常に僭越の至りですが……」と口籠つて、「只斯うして音樂の教授なぞして色々な人に廣く交際して居ますと、世間の人達が當お邸のお噂などするのが自然耳に入るものですから、それを御令嬢の耳に一寸お入れ申したので御座います、――それは、斯うしてお近しく出入りして居ますれば、其所は人情で御座いまして、充らぬことなど聞くと、全く心外なものですから……」

「いや、御厚意何うも難有う。そいで、充らないことゝ申しますと？」と、子爵の顏色は曇る。

「それは……」と、江守が言ひ難さうにもぢ〳〵口籠つて居るのを、鞆音は引取つて、

「私は本當に外へ出ても肩身が狹いのよ。――お父樣が邸の中に妾を置くなんて、世間の人達から擯斥されて、私、ほんとに恥かしくて、お友達にも顏向けが出來ないわ。」と大業に云つて、泣顏なぞ見せた。

「今更、そんなことを云ふたつて、何うにも仕樣がないぢやないか。」

「今更つてことありやしません。――過を改むるに憚りなしではありませんか。妾腹の子など邸に置いて　家名に障るから、それでお父樣は秋夫の出家をお許しなすつたでせう。秋夫を出家さしても、久世を邸に置いては矢張り同じことですよ。枝を刈つて幹を倒さぬとは、そんなことを云ふのですわ。――ねえ先生。」

「まあ、そんなに仰言る程の問題でもありますまいが、近頃のやうに斯う西洋の文化

がどし〳〵入つて來るやうになつてからは、別して又家庭問題が世間に喧ましくなりましたものですから……お邸の爲めを思ひ、お父樣の爲めをお思ひになる御令嬢の心になつて見ますと、全く御無理はないと存じます。」

「俺もさう思はんぢやないが……」と子爵は江守に頷いて見せたが、鞆音に向つて、

「鞆音、成程それは過を改むるに憚る勿れぢや。俺だつて其のことを考へんぢやない。だが、お前のやうにさう一概に云ふても今急では全く困つたことが出來る。——俺が久世を邸に入れたのは惡かつたかも知れん。いや惡かつたに違ひない。しかし、最う之れ二十年近くも家に置いたものを、罪科が無うて今追ひ出しては、何ぼ憚り無しと云ふても久世親子に對して慘酷な所業ぢや。——改める意りで、却つて過を重ねるやうなものぢやないか。」

「成程、それも御尤もですな。」と、江守は首を傾げた。

けれども、鞆音は頑として、「いゝえ、先祖代々から正しい純潔な家系を持つた佐原家の家名には代へられないと思ひます。」

「家名には代へられぬと云うても、人間を犧牲には出來ん。」

「それぢやお父樣。貴方は家名よりも久世を重いと思つて居らつしやいますか。お父樣の代になつて佐原家の歴史の上に汚點を殘しても、お關ひにならないので御座いますか。」

「いやさう云ふわけではない。」

「お父樣が若し家名を重んじて下さるなら、私、久世の一身に斷然たる處置が取れぬことはないと存じます。」

「成程、それも大きに御尤ですな。」と、江守が口を入れた。

「お父樣は久世のことばかり思つて居らして、亡くなつた私のお母樣のことなどは、最うお忘れになつて居らつしやるんですもの。——お父樣、餘りよ。」と怨ずる眼色に父の顏を睨つと眺めたが、其の眼にそつとハンケチを持つて行つた。

「お前何を云ふのだ。亡くなつたお母樣のことだつて決して忘れはせん。」と沈痛に嘆息をして、「お前はさう僻むから可かん。」

「何うせ私は氣が僻んでよ。――私は何かにつけて馬鹿にされて……。」と、口惜しさうに肩を搖つて嘘吹あげる。

「それが皆僻みぢや。――誰も決してお前を馬鹿にしはせんぢやないか。」

「いゝえ、馬鹿にしてるのよ。」と、鞆音は一概に云つて首を振つたが、重ねて、「お父樣は道德に背いたことを遊ばして、御自分で少しも反省なさらないばかりか、家名を思つて云ふ私の言葉など、些つとも用ひては下さらないのですもの。お父樣は久世をそんなにまで思つて居らつしやるのですから、何うせ私なんか他所へ遣つて、秋夫さんを又長安寺から邸へお呼びになるお意りなのでせう。――私にはちやんと分つてるわ。」

「いや、そんなことがあるものか。決してそんなことはない！」と繰り返して誓ふやうに强く云つたが、やがて嘆息して、「お前のお母樣も其の通り氣が强過ぎて困つたが、何うもお前にも困るなあ。」

鞆音は故と拗れて、

「何も死んだお母樣のことまで今更惡く仰言らなくても好いぢや御座いませんか。――そんなに私にお困りなさいますなら、私、邸を出て行きますわ。」

「何うも、俺の云ふことを、さう一々こだはつて取られては、甚だ困るのう。――お前が邸を出て行くなどゝ、假りにもそんなことを口にしてくれぬが好い。」

「では、お父樣は久世を出してお遣りになるのですか。」

「何うもそれが……」

「では、佐原家の家名を傷付け、世間の道德に背いてまで、何うしても久世を出すことは出來ぬと仰言るので御座いますか。」

「……」

子爵は默然として腕を組んで眼を瞑つた。

久世を今更邸から出す！殆んど二十年近くも何の過ちもなく勤めて來て、縱し寺へ上つて居るとは云ふものゝ、秋夫まであるものを、何うしてそんな不人情なことが出來ようか！だが、自分の娘とは云ひながら、最う相當の批判を持つて、自分の弱點を

掴んで氣負ひかゝつて居るものを、さう頭から抑へつけて了ふことも出來ない。――流石の子爵も磊と當惑して、何う云つたら好いか、分らなかつた。

「お父樣、何うぞキッパリ仰言つて下さいまし。――お父樣の御返事に依りまして、又私一個の處置をつけたいと思ひますから。」

と、鞆音は鋭く詰め寄るやうな氣勢を示して、父の答を促した。

先刻からお澄を尋ねて恰度此處へ來合せた久世は、此の場の樣子にはつと胸を躍らして立竦んだ。出るには出られず、さうかと云つて引つ込むことも出來ない。聞くともなく親子の會話を洩れ聞くと、つい胸が迫つて涙は自然と瞼に溢れて來た。――泣聲だけは立てまいと、屹と齒を噛みしめて忍んだけれども、子爵の心事を察すると、嗚咽は自づと咽喉元までせぐり上げて來る。久世は袖の先を前齒に屹と咬へて、凝つと忍んだ。

「なァ鞆音。」と、子爵は徐ろに鞆音に何をか言はうと顔を上げた。其の拍子に子爵の眼は、思はず久世の涙に濡れた眼とぴつたり合つた。

「おゝ、久世！」と、子爵は驚きの眼を見張つた。

「え、久世ですつて？」と、鞆音も驚いて後ろを振返つたが、久世の立竦んだ姿を認めると、憤りに顫へる聲を尖らした。

「お前誰の許しを受けて此所へ來たのです。屹度又立聞に來たのでせう。――何時でも私とお父樣がお話して居ると、お前は必ず立聞に來るのね。」

久世は、顔を背けてそつと涙を拭いて、泣顔を隠した。

「お話中とも存じませんで、誠に失禮申しました。」

「存じませんで來たのか、存じて來たのか、私ちやんと知つてゝよ。」

「何うも惡う御座いました。――何うぞ御免遊ばして……。」と、恐れるやうにおどおどした眼色をして、しをらしく詫びるのであつた。

「何故此の邊をそんなにウロ〳〵してゐるの。――私がお父樣に何かお前の讒訴でもしやしないかと、それが心配なのでせう。」

「いゝえ、まアそんなことが！」と、久世は呆れたやうに打ち消した。「あの一寸お澄

を探して居りましたので……。」

「お澄……？」と、鞆音の眼元は皮肉な笑みを浮べて、「お澄を探してるのか、お父様を探してゐるのか、誤魔化さうたつて大抵分つてるわ。」

「何うぞ御免遊ばして……。」

と、又しても涙の一ぱい溢れて來る瞼に袖を當てると、そつと拭いて、久世は其の儘二三歩引返した。

「久世、そんなに急に逃げなくても好いわ。一寸お待ち。」と、針のやうに鋭い、氷のやうに冷やかな鞆音の言葉は、久世の後ろから追つかけた。

「何か未だ御用で御座いませうか。」

久世は立止まつて振返つたのである。——其のおづ〳〵とした臆病らしい眼は、恰かも猛獣の爪の下に引き据ゑられた小さな獣の眼のやうに、恐れと、悲しみと、嘆きの複雑した哀れな色に慄へて、願ふやうに、祈るやうに、又、憐れみを求めるやうに、鞆音の顔をチラ〳〵と見るのであつた。

「知れてるぢやないの。——用があるから呼んだんだわ。」

鞆音は其の哀求を些つとも感じないものゝやうに、言葉から、態度から、びし〳〵した調子である。

久世は又おづ〳〵と元の處へ引つ返した。——鞆音の脣から洩れる言葉に依つて、どんな苛酷な運命が我が身の上に降りかゝつて來るか？恰度刑場に引き出された小さな罪人のやうに、久世の總身は、哀れにもわな〳〵と慄へて居る。

しかし、鞆音の眼は情けも、慈悲も、容赦もなかつた。可憐く戦いて居る久世の姿を頭から屹と見下して、

「あのね久世、お父様からは仰言り難いさうだから、私から云ひますがね。——今日限り邸を下つて貰ひたいのよ。」

「え！」半ば驚きと、半ば悲みに顫へた眼に、チラと鞆音の面を仰いだが、鋭い視線に射竦められたやうに、幽かな溜息を吐くと、そつと眼を伏せた。

「何をそんなに驚くのよ。今迄はお金で雇はれて居た身體なんでせう。——それに暇

を出すと云ふのに些つとも不思議はないわ。」と、鞆音の言葉には苦い毒を含んで居る。」

「何を云ふか、鞆音。――俺は久世に暇を出すと云ひはせんぞ。」

「あら、お父様は未だお迷ひ遊ばしてるの？」

「いや、別に迷ふとるの何のと云ふではないが……」

「では、久世に暇を出すことに、無論御異存はありますまい。」

「しかし、さう急には……」

「いゝえ。」と鞆音は鋭く抑へて、「佐原家の家名の爲に其の禍根を絶つのですもの、些つとも躊躇するところはありません。私は此のことを私のお母様の靈の前でお父様に申上げるので御座います。」

子爵はぎくりとしたが、「それにしてもぢや、さう急でなくとも又機會があるものだ。」

「機會は作らねば何時までも來ません。――だから私は只今久世に對して、申し渡しをするので御座います。私のお母様の晩年のあの有様をお考へなすつたら、眞逆にお厭とは仰言られますまい。」と、涙に濡れた眼に父の顔を屹と瞶めた。

死んだ妻のことを言はれては、子爵も返す言葉はなかつた。――あゝ、其の晩年の有様をまざ〳〵と眼に浮べては！

「ちやお前の勝手にするが好い。」と、遂に子爵は嘆息するやうに言つて立上つたが、「俺が居ては好くなからう。――俺は一先づ避けるとする。」と、くるりと足を返して行かうとすると、

「お父様。」

「何ぢやな。」

「貴方が此の場をお去りになるなら、私はお父様の名に依つて久世に暇を出しますよ。――此の場をお去りになるなら、其のことを御承知の上にして下さいまし。」

「私は何うでも好い。――お前の好きにするが好いのぢや。」

さう云つて子爵は振向きもせず、すた〳〵と去るのであつた。

「御前様。」

久世は一聲、帛を裂くやうな鋭い叫びを擧げると、我れにもなくよろ〳〵と其の後を追うた。

「久世、未だ用事が濟まないのに何處へ行かうと云ふの。」

「はい。」

鞆音は勝誇つた眼に、咽び泣く久世を見据ゑて、

「お父様は御自分で仰言り難いものだから、行つておしまひなすつた。私がお父様に代つて云ひますがね。お前には愈々今日から此の邸を出て貰ひますよ。お前のやうな女が居るから、純潔な家庭が汚され、女子の品性は何時まで經つても高められることはないんだよ。」

それを聞く久世の胸は、裂かれるよりも痛かつた。――が、何と言はれても仕方ない。妾と云ふ卑しい身の上に居る自分であれば、犬と言はれ、畜生と侮蔑され――何う云ふ言葉を浴せられやうとも、涙を呑んで、只、忍ぶより外になかつた。皆、我が

身の不運――情けない我が境遇の爲めである。と、思ひ諦めて忍ばうとしたけれども、それでも涙は止め度もなく頰を流れた。

鞆音は更に鋭く言葉を重ねるのであつた。

「お前の爲めに――お前がお父様を籠絡した爲めに、私のお母様は氣狂になつてお死になすつたのだよ。三年と云ふ長い間座敷牢の中に押し込められて、物の見境もなく泣いたり喚いたり、眼も當てられぬやうに狂ひに狂ひ廻つてる間にも、お前や、秋夫のことを、怨んで、怨んで、怨み抜いて、絶えず呪つて〳〵呪ひながらお死になすつたのだよ。私は、お母様の靈に對してもお前達と一緒に暮すことは出來ないのよ。私のお母様の氣まで狂はせて殺したのはお前達親子だからね。あゝ、私、思ひ出してでも口惜しい。」と、キリ〳〵と齒を噛んだが、「秋夫さんは出家したのだから、お前も尼にでもなつてお了ひ。――さうでもするより外には、罪の深いお前達親子の救はれる道はないのだよ。」

「はい、お暇が頂けますれば、尼になり何になりとなりたう御座います。」と、咽び泣

く。

「ですけれど、先生。」と鞆音は、口の入れやうもなく默つて居た江守に向つて、「罪の深い者は尼にだつてなれやしませんわ。」

「何うも……餘り亂暴ですな。まア、最う少し穩かに仰言つた方が宜しう御座いませう。」

「私の言葉は亂暴でせう！亂暴な言葉でなけりや久世には分らないのですもの。普通の穩かな言葉は、矢張り人間同士で云ふことよ。」

「お孃樣、それは餘り……」

「何が餘りなの！畜生同然の者の癖に人間並のことをお言ひでない！。」と、氣負ひ立つた鞆音の言葉は、久世の面上に投げつけるやうに鋭く響いた。

「……」久世は脣のみわなゝ〳〵と慄へて、舌は痺れたやうに口が利けなかつた。あゝ妾！妾のやうな人から蔑視まれ、卑まれる恥しい身の上であればこそ、こんなことまでも面と向つて言はれるのだ。――それを聞く久世の心は、情けを知らぬ鞆

音の苛酷な言葉を怨むと云ふよりも、寧ろ我と我が身に對する恥と、怨みと、悲みが一團の青い焰となつて胸に燃えた。切なさうな息ざしに喘いで身を揉むと、屹と前齒に袖を噛んで、泣く音を洩らさじと忍びに忍んだ脣から、張り絞つた弓絃でも切れたやうな鋭い叫びが洩れて、土の上にばつたり倒れた。そしてキリ〳〵と喰ひ縛つた齒の間から、抑へ付けたやうな忍び泣きの音がヒ、ヒと洩れる度に、脾腹の邊りから波のやうに搖れて、肩に刻まれる。――顏の色も眞蒼に變つて、束髮のほつれ毛がブルブルと戰いて居る。

稍々西に傾いて黃色味を帶びた日射しは、篩の目を通したやうに木の間を洩れて來て、靜かに――極めて靜かに土の上にチラ〳〵と動いて居た。

江守は只狼狽へて爲すところも知らずウロ〳〵して居る。鞆音は、土の上に崩折れた哀れな久世の姿を、冷やかな眼に快よさゝうな色を見せて、凝と眺めて居た。

時は靜かに經つて行く――音もなく、氣勢もなく、最と忍びやかに……。

「あゝ、お部屋樣。」

と、久世が尋ねて居たと聞いて、其の久世を尋ねて其處へ來た久世最負のお澄は、此の有樣に驚きの餘り思はず聲を擧げて、死骸のやうに地上に横はつた久世の身體に取縋つた。

「お、お澄！」と、久世の手は、お澄の手を犇と握つた。

「お部屋樣、何う遊ばしたんで御座いますよう！　又、お嬢樣が……。」

「いゝえ、私が惡いの……何も彼も私が惡いのだから、何も聞かないでおくれ。」と又してもよゝと咽び入るのであつた。

「でも、何とか譯を仰言つて下さいまし……」と、涙聲である。

「動物は矢張り鼻が好いと見えて、息を嗅いで集つて來るわね。」と嘲笑つて、「お澄、お前の最負の久世には、今日から暇を出したんだよ。」

「え！　お部屋樣にお暇を！」と、殆んど叫ぶやうに云つたが、忽ち其の眼からは、熱い涙がはら〳〵と滾れた。

「さうなのよ。——　お父樣に代つて私が暇を出したのだわ。」

「お嬢樣！　お部屋樣に例へどんなことが御座いませうとも、それは屹度貴方樣のお含み違ひで御座いますから、何うぞお考へ直しを願ひます。」

お澄は最う涙を收めて、其の賢し氣な眼に鞆音の顏を正面に振り仰いだのである。

「考へ直す必要はないよ。」

「ですけれども……」と、何か言はうとするのを鞆音は抑へた。

「お澄、お前は何故そんなに久世の肩を持つのだい？」

「いゝえ、私、別にお部屋樣の肩を持つと云ふ譯では御座いません。——　お嬢樣がお部屋樣のことに就て何かお思ひ違ひを遊ばしてお出での御樣子で御座いますから……。」

「お前などに干渉されることぢやないわ。——　一體、お前はこんなことに餘り差出がましいよ。」

其の時、久世は涙をおさめて起ち上つた。固く決心をしたので、顏の色こそ未だ蒼醒めて居たけれども、泣いた後の涙に濕つた瞳は冴え〳〵と輝いた。——　お澄が何か

言はうとするのを靜かに止めた。

「お澄、最う何も言はないでおくれ。皆、私が惡いのだから……。私は……私はね、お暇を頂きますから。」

と健氣に云つたが、流石に聲は慄へた。

勝氣なお澄には、久世の其の柔順なのが嫌りない。それだから輌音などに勝手な眞似をされるのだ。と、腹が立つ。

「それでも、貴方樣……」

「いゝえ、私が居るばかりにいろ〳〵のことになるのだから……私が居さへしなければ……」と、そつと顏を背ける。

「矢張り惡者が一人あるとね、何うしても邸がごた〳〵するのだわ。」

お澄は最うぢり〳〵して堪らなかつた。で、一歩進んで屹と輌音の方に詰め寄る

と、

「お嬢樣、惡者だなんて、それは誰のことを仰言るので御座います。――餘りです

わ。」

「何が餘りなの！」と輌音も聲にかさを持たせて、お澄を睨んだ。

「お部屋樣に何う云ふ粗忽がお有りになりましたか存じませんけれども、今更お暇を出すなぞと、それは餘りで御座います。」

「お前は何ぞと云ふと私を輕蔑して、久世ばかしを主人のやうに云ふのだね。」

「それはお嬢樣、私に取つては皆御主人では御座いませんか。」

「それでは、畜生と同じ妾風情と、正しい子爵の血統を享け繼いだ私とを同一に見るのだね。――まあ、何うでも好い。お前には用はないのだから、彼方へ行つておくれ。」

「では御座いませうけれども、お部屋樣には……」

「隨分諄いのねえ。主人のすることにお前なぞ口を出す資格はないのよ。」

「それでは、之れ程申し上げますのに、何うあつてもお部屋樣をにお暇をお出しなさいますのですか。」と、お澄は絶望的に云ふ。

「當り前だよ、召使のお前などの云ふことを一々聞いて居られるものかね。身の程を知るが好いよ。――私はお前などの相手になつて居られる身分ではないのよ。」

「それでは宜しう御座います。私もお暇を頂きませう。」と、鞆音の面を睨んで、キッパリ云つた。

鞆音は嘲笑つて、「おゝ、上げませうとも！今日の今から邸には置かないから出ておゝ了ひ。」

「えゝ出ますとも！誰が最うこんな邸になぞ居るものですか！出るに就ては、私も……。」と、口惜しさに氣負ひ立つて何か言はうとするのを、久世は靜かに宥めた。

「お澄、お前の心は私に能く分つて居るのだから、後生、最う何も言はないでおくれ。お暇を取るなんて、私の爲めにそんなことがあつては、私、濟まない！勤めを大事にしてお邸に居ておくれ――そんなことを云つてお前之れから先何うする意りなの？」

「はい、私だつて片輪では御座いませんし、何もこんなお邸に居ませんでも、私の身

は何うにでもなります。お部屋樣、私は最う默つては居られません。私も長く御奉公して、少しはお部屋樣のお力にもなるやうにと思へばこそ、斯うやつて張り裂けるやうな胸を擦つて辛抱して居たのですが、お暇を頂いた以上は、最う主人でもなければ、召使でもない赤の他人なのですから、云ひたいだけのことは申します。貴方樣も遠慮なぞして居ないで、云つてお遣り遊ばせよ。」

と、氣の弱い久世がはら〳〵して止めるのを、勵まして、苦い顏をして睨んで居る鞆音の傍へ、恐るゝところもなく寄つて行つた。

「そんな硝子の破片で出來たやうな眼で睨んだつて、私、些つとも恐ろしくはありませんよ……」

「何だお澄！主人に對して失禮ぢやないか！」と鞆音は眉を上げて齒噛みをした。

「御主人ですと！大きな口を利いて。――只今から私に對して御主人とは最う言へないのですよ。」とお澄は皮肉に笑つた。

「お澄、口が過ぎますぞ！」

鞆音は行詰まつてどぎまぎして、つと固く咽喉に唾を鳴らしたが、それを紛らすやうに慌てゝ強く云ふのを、お澄は鼻で笑つて、

「過ぎもしませうよ。何ぞと云ふと二言目にはお部屋様のことを妾々と仰言いますが、妾が人間でなければ、お嬢様、貴方は何で御座います。世間には見かけは綺麗な飾りをして居ても、眼に見えない心の汚ない者は澤山あるやうですが、そんな人間に限つて思ひ遣りと云ふものは少しもなく、兎角自分のことは棚へ上げたがるものですからねえ。いゝえ、お嬢様にはそんなことはないでせうが、世間にはねえ、よくありますよ。――貴方は立派な華族のお嬢様で、私は賤しい田舎の女です。どうせお相手にはなりますまいが、私は御奉公申してから、未だ塵毛程も人様に後指を指されるやうなことをした覺えはありませんから、こんな立派な口も利けるので御座いますよ。お嬢様、御自分の鏡で御自分のお顔を御覽遊ばしたら、お部屋様に何の彼のと言へた義理では御座いますまい。――疵持つ脛には兎角向ひ風がしみ込みますからねえ。」

「お澄、能くべラ〳〵と喋べれることね、其の……其の……唇が……」と、キリ、と眥を釣上げて、痙攣やうに左の唇を歪めたが、怒りに胸が迫つて容易には言葉が出ないのに、一層ヂリ〳〵と焦れ込んだ。「目の前で引裂けて了ふと可い。」と、漸う漸う投げつけるやうに云つた。

「ホ、、……。お生憎様、此の唇は貴方の睨みに引裂けるやうな、そんな安つぽく出來ては居ないのですよ。私も、お暇さへ頂けば赤の他人ですもの、手前の口で、手前の云ひたいことだけは遠慮なく云ひますよ。」

鞆音は、煮へるやうな胸を、ヂリ〳〵と掻き毟つたが、心が激し切つて居るので、口が吃つて容易には言葉にならぬ。

「何だ！　失敬なッ！　摘み出すぞ！」と、江守は此所が忠義の見せどころと言はんばかりに、立上るとお澄の方へ詰め寄つた。

「おや、私を摘み出すのですつて？　眞逆蚤や虱ぢやあるまいし、貴方には摘み出せますまいよ。ねえ江守さん、大きなことを仰言つても貴方はお邸の何でせう？　何でもないぢやありませんか。歌を唱つたり、ヴァイオリンを鳴らしたり、矢張りお給金

を貰つて入らつしやる奉公人ですわね。何もそんなに威張れた顔ぢやないんでせう。——貴方のやうな薄つぺらな男は、海老茶袴のお尻を追つかけ廻すのが本當によく似合ひますことね。」

「何だと、無禮な！」と叫ぶと、江守は手に持つたステッキで、ピシリとお澄の腰を打つた。

「おらとこの姉やを、何するだ！」と、思ひがけぬところから飛鳥のやうに躍り出して、江守の横面を大きな固い掌にピシャリと打つた者があつた。

「キャッ」と異樣な叫びを擧げて衝動的に頬を押へると、江守の痩せてひよろ長い身體はくる〳〵と廻つた。

人々は、此の不意の出來事に、只々驚きの眼を見張つて、暫くは口を利く者もなかつた。お澄はステッキに打たれた腰を擦りつゝ、蓬頭垢面、大きな身體は垢にまみれてぼろ〴〵の着物を纏つた、殆んど山男のやうな人間の顔をしげ〴〵と見詰めて居たが、はつきりと見覺えのある目元の黒子を認めて、

「おや、音さん！」と思はず叫んだのである。が、未だ自分の眼を半ば疑ふやうに、最う一度しみ〴〵と眺めた。眺めれば眺める程紛ふ方なき弟の音次である。

「あゝ姉や！」音次も懐しさうに呼んだが、痺れるやうな痛みに涙含んで、手の痕だけ赤くなつた頬を抑へて居る江守を睨みつけて、

「姉やを酷い目に逢はしたら、兄やを連れて來て、目挿しにして遣るだぞ！」

「貴樣は、何だ？」

江守は殆んど怪物のやうな音次の風采容貌に、内心竊かに恐れ慄へたが、それでも細い身體に力んで見せた。

「俺ア、姉の弟だ！」

「あゝ、弟か！」と江守は呆れたやうに、お澄と音次の顔を見比べた。

「これがお澄の弟？」と、鞆音も啞然とした。

「音さん、お前何うしてこんなとこへ一人で來たの。」と、お澄は不思議がると云ふよりも、寧ろ呆れたのである。

お澄が呆れたのも無理はない。お澄に取つては全く之れ程意外のことはなかつた。今頃馬鹿の弟が只一人、自分のところを訪ねて來るやうなことがあらうとは、何うして思ひ得やう。身元が分つては！　と父の細心な注意から、奉公に上る時にも邸の名を明さず、其の後幾年の長い月日を音信を絶つて來た。あゝそれだのに、今日の今、斯うして弟がひよつくり此の場に現はれて來やうとは！　全で奇蹟のやうである。

しかし、それは奇蹟でも何でもなかつた。父の遺言を肝に銘じて、一度眞人間に立返つた惣太は、依然たる迫害の執拗なのに、父の死骸を人並に葬むる事も出來ず、恐ろしい暴風の夜、荒れ狂ふ海底深く葬つて、怨みに煮えた一念に、寺を燒き、村を燒いて火の海とした。しかし、それでも世を呪ふ其の怨みは晴れなかつた。うか〳〵して居れば法網に罹らねばならぬ。何うせ捕はれるとしても、一寸も長く此の世に止まつて慘酷な世間の奴等に祟つた上でなくては、吾が怨み、吾が憤りは晴れぬ！　と、餘燼を醒ます爲めに一時姿を忍ばした。それには音次のやうな者を連れては、却つて足手まとひだ。人並でない白痴のことであれば、捕はれたところが罪科はない。世間

の憎しみも自分にこそかゝれ、眞逆に此の弟の上には及ぶまいと、吾が身一人だけ姿を隱したのである。後に殘つた音次は、又元の山小屋に歸つて二三日は送つたけれども、父は死ぬ、兄の惣太は歸つて來ぬ。七日までは辛抱したが、其の七日目の朝、到頭辛抱が出來なくて、小屋を捨てゝ飄然として去つた。目指すところは外にない。兼ねて父が夢寐にも口癖にした姉のお澄が奉公した東京のお邸であつた。幾夜の夢を重ね重ねて遙々東京へ辿り着くは着いたけれども、さて、西も東も分らなかつた。聞き覺えた町名番地を便りに漸う其のお邸を尋ね當てたが、固より案内を乞うて尋ねる術も知らぬ。垣根を越えて姉の姿を求めつゝ廣い庭を其方此方彷徨つて居る中に、運好く久世に認められて、聞かれるまゝに姉のお澄の弟だと云ふことや、惣太のことなど、愚かな心に分別もなく洗ひざらひに打ち明けたのであつた。それを聞いて一度は驚いた久世は、情け深くも人に知れては惡いから、折を見て合はして遣ると、下男に云ひ含めて物置に匿つて置いたのであつた。久世のさうした心遣ひの察しられやう筈はなく、ホカ〳〵した春の日の快さに浮かれて、ついうか〳〵と庭をまごついて居ると、

計らずも姉のお澄が江守の爲めに打擲されて居るところを見付けて、躍り出たのであつた。

お澄に聞かれても、元より音次には秩序を立てゝ話されよう筈はなく、口を慄はして幾度びか吃つて居たが、突然調子外れの大聲を擧げて、

「姉や、父がおつ死んだゃ。」と叫んだ。

「え？　あのお父さんが！」と、お澄の聲は反響するやうに響いた。息ざしは急はしくなつて、胸がドキ〳〵鳴つて、脈搏が高くなる。

「あゝ。葬式を出すべえ云つて、兄やが方々のお寺ア賴んで廻つたゃが、何處の寺でも惡黨は葬らねえつて、承知しねえので、夜中に兄やと二人で父を海さ擔いで行つておつ放り込んだゃ。——兄やはな、それでお寺をえらく怨んで、長安寺へ火イつけて、佛さんでも何でも燒いて了つたゃ。そしてな、こんな大けえ賽錢箱盜んで叩き割つたゃが、えらアはあ錢が入つとつたゃ。」

「これ、音さん、お前何をお言ひだ……」と、お澄は顏から火が出るやうな思ひが

して、昏倒するやうにかつと上氣せた。脊や腋の下からは冷たい汗が流れた。しかし、音次は、何の察しもなかつた。

「其の晩にな、兄やと二人で村をはア火の海にしたゃ。えらい暴風で、よく燃えたゃによ。——そして兄やが俺にもな、之れさへありや何處へ行つても好いだからつて錢をくれたゃ。金持になつたで喜んで居たら、兄やは居なくなつて了つたゃ。父は死だだし、兄やは五日も十日も歸らねえ。俺は淋しくつて〳〵なんねえから、姉やを尋ねて來たゃによ。お邸の庭へ入つて居ると、此の小母さんが……」と、久世を指で指して何か言はうとするのを、お澄は堪らなくなつて、

「音さん！」と叫んで、其の口に掌を當てゝ止めた。——あゝ、悲しい父の死も、恐ろしい兄の惡事も、今の今迄夢にも知らなかつた。突然尋ねて來た愚かな弟の口から初めて聞いて、お澄は氣も轉倒せんばかりに驚き呆れた。——餘りのことに涙さへ出ない。

江守は氣味惡さうに、音次の頭から足の爪尖までヂロ〳〵眺めて、

「何だ、此奴は？　氣狂ぢやないか！」と、吐き出すやうに云つた。

「俺あ、音次だ。」

「お前は本當にお澄の弟か。——お前の兄は賊を働いたんだね。」

「こりや俺が姉やだ。俺とこの兄やは偉え人だぜ。角力とつたらお前なんぞ、投げ殺されて了ふだ。」と、姉の心も知らずに、自慢さうに說き誇るのであつた。——お澄は穴があれば此の身、此の姿を暫しなりとも隱したかつた。

鞆音の眼は、急に甦つたやうな色を見せて、久世、お澄、音次と、三人の顏を順々に眺めたが、勝誇つたやうな冷めたい笑みを片頰に見せて、

「立派なものだねえ、お澄。人に後指を指されたことのないお前の兄は恐ろしい盜賊なのだとさ。——矢張りお前の兄だけのことはあるわねえ。」と、憎々しく云つて、嘲笑つた。

けれども、お澄は最う何う言はれても返す言葉はなかつた。——あゝ、此の胸が張り裂けるまでも、小さな胸に鬱した幾年間の長い恨みと憤りを、漸う〳〵今日の今洗

ひざらひに吐き盡して、僅かに氣も心も晴々して居たものを！　兄の爲め、愚かな弟の爲めに、ギリ〳〵と咽喉に刄を當てゝ嬲り殺しにされるよりも切なく愁い鞆音の言葉を、只默つて聞いて——其の面前に跪づいて忍ふより外にはない身の上になつたのだ！　胸は口惜しさ、切なさに炒られるやうにヂリ〳〵しながらも、鞆音の一語々々に、首は生氣地なく次第に俛れて行く。

「お澄、今迄大層立派なことを云つたやうだが、急に靜かになつたのね。何うしたの？　えゝ、何うしたのさ？　お澄、あんな大きな口を利いたお前の兄さんのことだから、眞逆放火や、泥棒などするやうな、そんなことはあるまいねえ。」と、アイロニカルに云つて江守を顧みて、氣味好げに笑つた。

「はい、私の兄は泥棒をいたしました。——私は泥棒の妹で御座います。」

お澄は屹と面を上げると、鞆音の顏を正面に見て、キッパリ云つた。——と、其の眼からは、初めて熱い涙がホロ〳〵と滾れた。

「お澄、そんなことをお言ひでないよ。——屹度何かの間違ひだらうからね。」と久世

が宥めると、鞆音は憎みを持つた毒々しい眼に、ぢろりと眺めて、

「同類は矢つ張り憐れみ合ふわねえ。」

音次はづか〳〵と鞆音の傍に進んで行つた。

「お前、此の小母さんと姉やを苛めるだと、俺が酷い目に逢はせるだぞ！」と、拳を握つて鞆音の鼻先に突つけるのであつた。

「ホ、、……まア山猿のやうな馬鹿が！　哀れなものだわねえ。」鞆音は氣味惡さうに、だち〳〵と後に退つたが、それでも弱身を見せまいと、吐き出すやうに云つて、

「盜人の兄や、こんな弟を持つて居れば、さぞ自慢でせうよ。――あゝ何だか氣味が惡くなつて來たわ。先生彼方へ行きませうよ。」

江守を促すと、二人は肩を並べて家敷の方へ歸つて行くのであつた。――鞆音のけばけばしい派手な服裝と、江守の洋服姿とが、縺れ乍ら睦じく行く。

お澄の燒けるやうに燃えた眼は、凝と二人の後姿を追つて居たが、やがて、

「お部屋樣！」と叫んで、久世の身體に犇と縋り付いた。

「あゝ、お澄。」と、久世もお澄の身體を抱き緊めた。

「お澄。世の中のことは果敢ないものだわねえ。」

「本當に、お部屋樣！」

抱き合つた二人の四の眼からは、熱い涙が止め度もなく流れ落ちた。

「あゝ、二人が泣いてるだあ。」と、音次はけろりと衝つ立つて、口をあんぐりと開いて眺めて居た。

第四章

久世も、お澄も同じ日、同じ時刻に暇を取つて、佐原子爵の邸を出た。長年の間吾が家も同じやうに棲み馴れた家を、今日を限りに永へに去つて了ふのかと思へば、二人の眼には流石に熱い涙が湧いたのである。しかし、邸は出ても久世には歸るべき我が家がれつきとある。親もあれば、兄弟も待つて居る。が、お澄には歸る可き家もなく、待つて居る親もない。何の相談相手にもならない音次を連れて、何う身の振り方をつけたら好いか、全く途方に暮れた。——暫く自分の家に居て、何處か東京に奉公口を見付けては？　と、心根の優しい久世はお澄の境遇を哀れんで強つて勧めたけれども、人並でない音次のやうな足手まとひの出來た上は、肩身をすぼめて再び人の家に奉公する愁さを思うて、お澄は久世の其の深切な同情をもむげに斷つた。そして、五六日は東京の市中にうろ〳〵して居たが、分別もなく、行處もなく迷つて居たお澄

の心も足もつい知らず〳〵の間に伊豆の國に向つて居たのである。——親の死んだところ故戀しいのでもない、兄の行方の分らなくなつた處だから懐しいのでもない。寧ろ、死んで何の罪もない親の死骸を葬らせなかつた處である。兄が憎んで火を放つたところである。此方に取つても怨みの深い處なれば、向ふから云つても此方に對して、憎い怨みの重なつて居る處だ。暴風の夜の夢を破られて、遠い先祖からの汗と膏に蓄積し、築き上げて來た家を燒かれ、財産を燒かれた幾百の村の人々の怨みの一念は、石山惣太の一族と聞けば、人の魂を責め苛む地獄の火よりも呪はしう二人の身の上に浴せかけられるに相違ない。それが分らぬことはない。能く分つて居る。分つて居ながらお澄の足も心も引き寄せる不思議の力は！　あゝ、船には弱い女の身を、波に搖られて苦しい時を刻み〳〵に忍ぶ其の間にも、お澄の眼に朦朧として浮ぶのは、今行かうとする伊豆の國長安寺に、頭を蒼く丸めた變つた姿でしよんぼりとした秋夫の身である！　色の白い顔に眉が濃く、鼻がすつきりと高くて、屹と結んだ脣の赤い、美しくも優しい其の顔である。殊にまざ〳〵と、お澄の瞳の底に生きて消えぬのは、其

の濃い眉の下の長い睫毛の奥にある、絶えず柔らかな潤みを持つて、深い蒼味を帶びて夢みるやうに恍とりとした其の眼光である。——あゝお澄は、心に燒きついて夢寐にも忘られぬ其の眼に惹き寄せられて、波を分け、苦しい船に搖られて遙々と、我が身の憎み呪はれて居る遠い伊豆の國へと來たのであつた。

「若樣！」

涙に潤んだ眼に、若い處女の心に燃える、口には言へない千萬無量の深に思ひを籠めて云つた。愁い別れを忍んでから四十餘日、其の四十餘日の間に、幾度び、伊豆の空を望んで泣いたことであらう。淋しい春の夕暮れを、悠々と南に飛ぶ白い雲を果てしもなく追うて眺めては、緣の柱にうつとりと凭れて袂を濡らし、眠られぬ夜半の仄暗い有明の光りの下に、遙かに伊豆の岸を打つ波の音を幻に聽いては寢衣の袖を絞り、切つない夢に魘されて偶と眼を醒ました眞夜中に、夢に泣いて枕紙がびつしよりと濡れたのに驚いたこともある。——其の戀しい、愁い、切ない四十幾日目に、始めて長安寺の崖下の濱で秋夫と會つた時、お澄は最う前後の分別もなく、「おゝ若樣！」と叫

んで、犇と秋夫の身體にしがみついたのであつた。——熱い涙は止め度もなく頰に流れた。

「おゝ、お澄！　僕は淋しかつた！」

秋夫も只一聲叫んで、之れも後は涙に咽んだ。伊豆の海は蒼く、靜かな波は夢のやうに鳴つて——あゝ初めて相抱いた其の時から、お澄は最う如何なることがあらうとも、再び秋夫の傍を離れることの出來ない身となつた。

「僕は淋しかつた！」

犇と身體を抱きしめられて、戀しく〳〵想ひ詰めた優しい男の口から、しほらしい其の言葉を聞いた時、忘られぬ其の深い眼からは熱い涙が流れて、凝つと我が顏を見詰めて居た！　あゝ、何うして再び別れることが出來ようぞ！　我が身に取つて伊豆の國は、縱しや火の海、血の池であらうとも、村の人は如何に愁く苛なまうとも、たとへ食ふ物も食はず土に嚙り付いて居やうとも、秋夫が此處に居る間は、再び伊豆の國は去るまいと、健氣にも決心したのであつた。そして、奉公の間に貯蓄した僅かの

金と、暇になつて邸を出る時、子爵と久世の情けに惠まれた金とを以て、長安寺の岡の坂下に茶店を出した。

惣太の呪ひの火に餘燼もなく焼き盡された長安寺は、信徒の喜捨によつて再建に着手することゝはなつたが、建立までの間は、秋夫も比較的自由な身で、日に二度も三度も、暇を偸んでは些い〳〵と遣つて來る。それをお澄はせめても儚ない間の慰めとして、苦しい村人の迫害の間に、ちつと忍んで辛抱した。今日も午前から假堂での説教に參詣の者が間斷なく茶店の前を往來して、中には、立寄つて、澁茶を啜つて僅かばかりの茶代を置いて行く者も少くはなかつた。さうして夕方にもなつたのに、秋夫は今朝から未だ一度も顔を見せぬので、お澄は氣も心も落着かず、ソハ〳〵として幾度となく表に出ては伸び上るやうにして寺の阪上を見上げるのであつた。しかし懷しい秋夫の姿は見えなかつた。

お澄は客の去つた後を片付ける元氣もなく、又しても表に出て我が求むる戀しい人の影を探した。仄かに暮れて行く靜かな夕を、暫くはぼんやりと立つて眺めて居たが、

しほ〳〵と家に入つてほつと幽かな溜息を吐くと、赤毛布を着せた緣臺の上に崩折れるやうに力なく腰を降した。——右の手を懷ろに入れてそつと左の乳を押へて、俛れた白い美しい襟脚に、黒々とかき上げた銀杏返しの鬢の毛が二筋三筋ほつれて、睫毛の長い二重瞼の影から、少し憂ひを帶びたやうな涼し氣な瞳が瞬きもせず覗いて、素足の爪尖を眤つと見詰めて居る。——何時までも〳〵見詰めて居る。

朝から濱の方へ遊びに出かけて居た音次は、波に打上げられて潮に濡れた昆布の切れを下げて、のつそりと歸つて來た。そしてお澄の傍にぼかんと口を開けて衝立つた——けれども、氣が付かなかつた。

「姉や。」

「……」

「姉や。」

「……」

音次はくす〳〵と忍び笑ひをして後ろに廻ると、お澄の耳にそつと口を寄せて、大

きな聲で、
「姉や！」
「え！」
お澄が吃驚して顔を振上げると、音次は締りもない口元に、面白さうに他愛もなく、
「アハ、……アハ……」と笑ひ轉げた。
お澄は、ドキ〳〵と動悸の高まつた胸を兩手に屹と抑へた。心持眉を顰めると、嗜めた。
「音さん、何ですよ。——耳元でそんな大きな聲を出して、吃驚したぢないかね。」
「姉や、何を考へてるだァよ。——ははあ、俺ァ分つたゝ。あれに違ひねえ〳〵。」
「お前何を云つてるの？」
「今も村の者が濱でさう云つたゝ。——姉やさうだらう？」
「さうだらうつて、分らないぢやないかね。」
「云ふべえか。——いんにや、言はれねえだ。好いことだによ。」とニヤ〳〵笑つて居る。

お澄もつい釣り込まれて、
「どんなこと？」と、首を傾げて、斜めに音次の顔を眺めた。
「若樣のことだァに。——饅頭買つてくれたら云ふべえ。」
「え？　若樣のこと？」と、お澄は思はず顔色を變へた。
「ほうら吃驚するだあ。——饅頭買つてくんねえ。」
「若樣が何うしたの？　村の人が何と云つてるの？　音さん、饅頭でも何でも買つて上げるから、話して頂戴なね。」と、お澄は急き込んで聞くのであつた。
「そんぢや云ふべえか。——姉や、病ひつて何でえ？」
「病ひ？　病ひつてのは病氣のことよ。——ぢや若樣がどつか病つて居らつしやるのか知ら？」と終ひは獨言のやうに云つて、不安さうな眼元に音次の顔を眺めた。
「さうぢやねえ。——若樣ぢやねえだ。姉やが病つてるつて、村の者がさう云つとるだ。」
「ホ、、……姉さんは此の通り病つても、寢ても居やしないぢやないの。——丈夫

だわ。」

「そりやさうだな。――それぢや違つたのかも知れねえ。」と、何か遠い昔のことでも思ひ出すと云ふやうな眼色をしたが、やがて思ひ出して、「さうだ〳〵。只の病ひぢやねえつて、何だつけ？　何だつけな。さうだ、若様に、……若様に……戀の……戀の病ひだつてよ。」

「あら、何を云ふのだよ――音さん。」と、お澄は耳の根元まで櫻實のやうに眞赤にして俛向いた。

「ハ、、、……。さうだ。姉や、さうだんべえ。えらはァ顔赤くなつたいね。――姉や、戀の病てえのは、顔が赤くなる病氣だんべか。」

「知らないよ。――音さん、馬鹿なことをお言ひでないよ。」

「姉や、云つたゝから饅頭くんろよ。」

「知らないわ。」

「饅頭くんねえだかよ。――俺云つて損したゝな。」と少し悄氣たが、下げて來た昆布

を入口の處に乾しに行つた。

眼を上げて偶と何物かを認めると、ニヤ〳〵笑ひながらお澄の顔を見て、

「あゝ、來たい、來たい。――病ひが來たゝによ。」と、指した。

「え。」とお澄も思はず、走つて入口から覗いて、秋夫の姿を認めると、音次に向つて急しさうに口早に云つた。

「お前彼方へ行つてお出で。――あのね、お父さんは日蔭の中に亡くなつたのだし。兄さんは世の中に拗ねて彼の通りの惡人で、お前も私も弱い身の上なのだから、此の上にも人樣に彼是れ言はれないやうに氣を付けておくれ。――若樣の前などでは、行儀よくしておくれでないと、姉さんが困るのだからね。」と、しみ〴〵と云つて聞かせた。

「うむ。行儀をよくするだ。」

「ぢやね、後に饅頭を買つて上げるからね。後生、彼方へ行つて居ておくれ。」

「あゝ。」と、音次はのそ〳〵と裏の方へ行つた。

お澄は急にイソ〳〵として、取散かつた縁臺の上のものなど頻りに取片付けたりなどして、立働いて居た。

「お澄、忙しいか。」と、秋夫は、表からそつと覗くやうに、その上半身を見せて云つた。

「お丶若樣。」と、お澄は馳け寄るやうに近づいて、「さア何うぞお入り遊ばせ。——今日は一度もお見えになりませんので、澄はどんなにか御心配いたして居りました。」

と、手を取らんばかりにして、內へ入れた。

「あゝ、今日はお說敎で忙しかつたものだからねえ。」

「さうとは存じましたけれども。——ほんとに御心配申しましたよ。此方の方はお邸と違つて、嘸ぞ御不自由でせうとお察し申しますとね……せめて此處へでも入らして氣を紛らして下さいませんと、澄はほんとに氣が氣ぢや御座いません。——おや、私、何うしたのでせう。そんなとこにお立遊ばして居らつしやるのにお喋べりばかり申しまして……さア何うぞお掛け遊ばせ。」

「難有う。——僕はね、邸に居るよりも、此の寺の方が好いよ。」

「まあ、勿體ないことを仰言いますわねえ。——しかし、何も時節で御座いますから、何うぞ御辛抱遊ばしませ。」と、秋夫の心中を思ひ遣るやうな眼色をして、涙含む。

「澄、僕はね、一人ぼつちで此處へ來た時は淋しかつたけれども、其の中にお前が來てくれたので、斯うして毎日來れるのだから、些つとも淋しいことはなくなつたよ。」

「い丶え、私など、心ではほんとに若樣のことを想つて居るので御座いますけれども、何のお役にも立ちません。——身分の賤しい私に……私にそんなことを仰言られては恐れ入ります。」

「僕はねえ、お前が若しも僕の姉であつてくれゝば好いと思ふ時があるよ。——輒音さんとお前と代つたら、僕は實際嬉しいのだけれど……。」と、其の蒼味を深く帶びた眼に、眤とお澄の顏を眺めた。

「若樣！　まア勿體ないことを、若樣！」と、お澄は思はず感激の聲を喘ませて、「でも若樣は、少しは澄のことを思つて下さいますの？」

「あゝ。――僕は久世とお前とが一番好きだよ。」

「それでは若様はあの……」と、ぽつと赤味の射した眼元から頬にかけて、歡びの色を輝かせたが、急にがつくりと萎れて、「あゝ、しかし、何うせ賤しい私ですから、若様とは……いゝえ、最う何も申し上げますまい。」と、再袖でひたと顔を掩つた。

「お澄、何うしたの？」

秋夫は顔を曇らせて立上ると、お澄の肩の上に優しく手を置いた。

「まあ若様、難有う存じます。――何うもいたしませんのですから、何うぞお關ひ遊ばさないで……。」

「だつて、お前が泣いたりなどすると、僕、淋しいのだもの。」

「若様、勿體なう御座います。――最う泣きませんから、氣にかけないで下さいまし。」と、顔を擡げると、涙に濡れた顔に和こりと笑つて見せる。

「僕はね、こんなに毎日幾度も澄のとこへ遊びに來ても好いの？」

「えゝ、それは若様さへお構ひなくば、何時入らして下すつても澄は嬉しう存じます。」

「さう？　それぢや今日は歸つて、僕、又明日來るよ。」

「最うお歸り遊ばしますの。」

「あゝ、餘り長く遊んでると、又和尚さんに叱られるから……僕歸るよ。」と、出て行かうとする。世が世なら絹や羽二重に包まれる筈の優しい身體に、固い木綿の粗末な衣を纏うた痛ましい姿を、思はず涙含んで見送つたが、偶と、後ろの襟の折れて居るのにお澄は氣が付いて、

「若様、恐れ入りましたがお襟のところが……」と呼び止めると、ひたと寄添つて直したが、「あゝ、お頭をこんなにお剃り遊ばして……」

と、蒼々と丸い頭から、白く柔らかな襟際を、暫くはしみ〴〵と見惚れて居た。

「澄、未だかい？」

「はい、最うお宜しう御座います。」と云つたけれども、此の儘歸して遣るのが何となく物足らなく、悲しかつた。しかし、何と云つて引止めたら好いか分らない。

「ねえ若様。――若様が此のお寺へお上り遊ばす、間もなく私も此方へ參つて斯うし

て暮すやうになりますなんて、本當に不思議な御縁で御座いますねえ。」と、言葉以外の意味を籠めて、しみ〴〵と云つた。

「あゝ、本當に不思議だねえ。」

「若樣、若樣もあんな意地の惡いお姉樣さへなければ、こんな田舍へなぞ入らつしやるのでは御座いませんのにねえ。――行く〳〵は立派な奥樣をお迎へ遊ばすお意りだつたので御座いませう。ねえ若樣、若樣はそんな奥樣をお持ち遊ばす思召は御座いませんの？」

秋夫は、女のやうにぽつと顏を染めて、

「そんなこと僕は……そんなこと知らないよ。――僕は出家ぢやないか。」と、口籠り勝に、極り惡さうに云ふ。

「ホ、、……。さうで御座いましたねえ。何故まあ御出家遊ばしたのでせう。――こんなに御容貌がよくお生れ遊ばしたのに……」

「僕は出家が好きだ。」と、屢瞬く瞳は淋しい。

「それでは、どんなことがお有り遊ばしても、最う還俗は遊ばさないので御座いますか。」

「僕は還俗はせんよ。」

「還俗遊ばしたところで、奥樣をお迎へ遊ばしたところで、こんな卑しい身分の私ですから、とても若樣には……」と、獨言のやうに云つて、頰を染めると眩しさうな眼色をして頂垂れた。――襟脚のすつきりと白いのが、仄かな夕闇の中に水際立つて美しく匂はしい。

「お澄、僕は斯うして居て、お前と遊んで居るのが何より嬉しいのだよ。」

「はい、……私、何うしてこんな氣になつたので御座いませう。」と、ぽつと夢見るやうな眼色を上げて、秋夫の顏を眺めるのであつた。

秋夫も、暫くは恍とりと、お澄の顏を眺めて居た。――濱を打つ波の遠音が夢のやうに聞えて、日は靜かに暮れて行く。

「又來るよ。」

やがて秋夫はさう云ふと、すた〳〵と歸つて行つた。お澄が初めて夢から醒めたやうな顔を上げた時には、秋夫の姿は五六間先を行つて居る。お澄は戸口に立つて、其の儚なげな優しい秋夫の後姿を、見えなくなつてからも何時までも見送つて居た。——日はもう先刻方落ちて、薄黄色い黄昏の色が漂つた内に、沈んだ中にも光りを帶びたやうなお澄の白い顔が、仄のりと浮んで見えて居る。

其二

日が暮れると共に風が出た。濱に碎ける波が唸くやうに物凄く鳴つて、さつと風が吹いて來る度に木の葉の搖れる音がざわ〳〵と聞えて、建付の惡い板戸がゴト〳〵と淋しく鳴る。お澄は夕飯の後を片付けると、縫物の道具など持出して、音次と向ひ合つて坐つた。——何一つとして道具らしいものもない空家のやうにガランとした家の内を、陰氣なランプの光りが薄く照らして、二人の姿をしよんぼりと浮き出した。お

澄の眼は針を運ぶ手元を凝つと見詰めて居るけれども、心の中は秋夫のことで一ぱいである。——其の姿が見えて來る、其の顔が見えて來る……其の眼が浮いて來る……終ひにはぼうつと霞んで、何も彼も見えなくなつて、手も一ところに止まつて動かなくなる。と、我にもなく慌てゝ氣を取り直すと、又、せつせと針を運ぶが、又しても想ひは秋夫の上に走つて、氣が遠くなる。

「姉や。」

「……」

「姉や！」

「え？」と、初めて氣が付いて顔を上げた。「何なの？　音さん。」

「姉やが默つとると淋しいでねえか。——俺、淋しいだよ。」

「さう、それぢや何か、お話して上げようかね。」と、俛向いたまゝで、上目使ひにチラと音次の顔を眺めた。

「あゝ、昔話が好えだ。」と、怠るさうに欠伸をして、厚ぼつたい汚れた瞼に一ぱい

涙を溜めると、もち〳〵と舌を舐める。

「昔話つて……昔話も最うないわねえ。——皆音さんに話して上げたのだもの。最う種切れだわ。」

「桃太郎でも、カチ〳〵山でも何でも好えだ。なア姉や、面白えだによ。」と、鈍い眼を、好奇らしく輝かすのであつた。

「だつて……」とお澄は笑つて、「それは今迄幾度も話したぢやないの……」

「何遍でも俺ア面白えだもん。」

「さう——。ぢや何を話して上げやうね。」と獨言つて、暫く考へて居たが、「それぢや、猿蟹でも話して上げようかね。」

「あゝ。」

「昔々ね。」と、お澄が話し出すと、音次は次第に膝を詰め寄つて、話が進むに連れて湧き上る單純な興味の緊張を、其の顏色に見せて、鈍い眼を輝かせるのであつた。

と、其の話半ばに、表の戸を忍びやかに人の叩くらしい音がホト〳〵と聞えた。

お澄は言葉を途切らすと、凝と表の方を見詰めて聞耳を立てた。しかし、最う物音はしなかつた。

「風の音か知ら？」と、獨言つて、又手元を見詰めて針を運ぶと、話の續きを始めた。

と、又、ホト〳〵と聞える。先刻よりは大分強く、風の音ではない。——確かに人の手が叩く音である。

お澄はぴたりと話を止めて、ぎよつと不安さうな眼を輝かせると、再び耳を澄した。

——風の音、波の音に混つて、ゴト〳〵と聞えて來る。

「音さん、誰か來たやうよ。」と、最う胸がドキ〳〵して、乳の下に打つ鼓動は高く鳴つた。

「姉や、行つて見て來べえか。」

「能く確めてからでないと、滅多に戸を開けちや可けないよ。——村の人がどんな惡戯をするか分らないから。」

音次が腰を浮かすのを制して、お澄は自分で立つて戸口まで行つた。

「誰何？」

「お丶、お澄か、兄だよ。——惣太だよ。早く開けてくれ。」と、外の聲は忍びやかに云ふ。

「え、兄さん！」と、お澄は叫ぶやうに云つて、今頃何うして兄の惣太が此處へ歸つて來たのか、又、自分等の此處に居ることが何うして分つたのか、それを訝りながらも氣急しく戸を開けた。

「お丶、お澄！」と、底力の籠つた聲で云つて、眞暗な外の闇から、惣太の大きな身體が、のつそりと入つて來た。——ぱつと吹き込んで來る風に、座敷のランプの焰は、ゆら〳〵と搖れた。

「兄さん！」

お澄は、幾年目かに初めて見る何所かに見覺えの殘つた兄の惣太の變つた姿を仰ぐと、嬉しいと、悲しいとに胸が一ぱいになつて、思はず涙聲に叫んだ。惣太はそれを大きな手を上げて制した。

「早く其所を閉めろ。」

お澄は胸を轟ろかしながら、しつかり後の戸締りをすると、甲斐々々しく洗足湯など取つて遣つた。

「まあ、兄さん、私達が此處に暮してることが、何うして分つたの？——それにしても能く歸つて來てくれたのねえ。」と、お澄は蒼く沈んだ惣太の顏を打眺めて、嬉しいやら、意外なやら、何や彼が胸一ぱいに込み上げて來て、云ふことも後や先——先立つものは只涙であつた。

惣太は、妹と弟とを前に置いて、仄暗い明りの下に初めて二人の顏をつく〴〵と眺め交した。

弟は兎も角、あゝ思へばお澄と別れたのは今から十四年前、自分が十二、お澄が九つ、音次が七つの春であつた。無情な世間の血も涙もない迫害に、親子四人が饑ゑに泣いて東京を落ちようとする時、父一人の手に三人の足手まとひは到底過ごして行かれぬので、五本の指のどれを手離して好いと云ふのはないけれども、偶とした緣から

お澄は久世に拾ひ出されて、幾等と年期も定めず佐原家へ小間遣ひに上ることになつた。骨肉の別離忍び難きものがあつたけれども、人からも世からも憎み呪はれたこんな日蔭の身の父の手許に置いて生涯を悲しい若勞の中に過ごさせるよりも、斷ち難い恩愛別離の涙を一時呑んで、長い將來の爲めにと云ふ父の決心であつた。幼い乍らも苦勞の中に育つて人並ませて分別のついたお澄は、父の心を能く聞き分けて、小さい罌粟坊生の可愛い頭を縱に振つて頷いて、父に別れ、兄弟に離れて、只一人邸へ奉公に上ると云ふ。さう決心はしたものゝ、いざとなれば幼い子と老いた父親とは、遣りともない、行きともない——流石に哀別離苦の悲しい涙に咽んだのであつた。未だ十二のいたいけ盛りの少年であつたけれども、腦に煮えついた其の時の悲しい光景を何時の日か忘れる時があらうぞ。それから幾度びの秋を送り、春を迎へ、斯うして兄弟三人が一つ處に集つて親しく口を利くのも、思へば幾年振りのことである。親はなくとも子は育つ、あゝ、育つて斯うして集つたけれども、一人は西東も分らち白痴、一人は明日の日にも御用！　と一聲お上の聲がかゝれば、最早や此の明るい娑婆の風に

は當ることの出來ない暗い日蔭の身の上である。——惣太は慘として暫くは口も利けなかつた。

音次は、暫く見なかつた兄の顏を、先刻からまち〴〵と見詰めて居たが、

「あゝ、兄やが戻つて來たゞ、嬉しいなア。」と、飛びつくやうに犇と抱き付いた。——眼には涙が一ぱい溜つて居る。

惣太も涙含んで屹と弟の身體を抱き緊めた。

「あゝ音次。——お前も達者で居てくれたか。兄さんがお前を捨てゝ行つたので、嘸困つたらう。兄さんを怨んだらうなア。兄さんもお前のことばかりが氣になつて居た。」

流石に深い執着を持つた骨肉の情である。——三人は相擁して只泣いた。

「兄や、最う居なくなつちや厭だぜ。村の者等がな、村に火を放けたり、お寺の錢を盜んだ怨太の兄弟だからつて、姉やや俺を苛めるだアから……。なアに、兄やが戻つて來れば最う恐かねえ者はねえだ。俺ア村の者に威張つて遣るだ！　威張つて！」

「あゝ、お前には兄やがどんな身の上だか分らねえのだな。」と嘆息して、「今日歸つて

來るのだつて、火の中を潜るやうな、危ねえ藝當なんだ。一端靜岡まで逃げるは逃げたけれども、殘して置いたお前のことが何うしても氣になるので、後髮を引かれるやうに、ぢり〳〵と又舞ひ戻つてそつと樣子を探つて見ると、お澄が東京の邸を下つて、茶店を出して居ることが分つたので、先づ安心して其の儘遠くへ逃げやうと思つたが、逃げて了へば又何時會へるか――生涯會ねえか分らねえ。一目會つて顏も見たり、話をしたいばつかりに、斯うして劍の刄を渡るやうな危い思ひをして、夜に紛れて歸つて來たやうなものゝ、人に覺られねえ中に、今にも行かなければならねえ兄やが身の上なのだ。」

「兄さん、まあ、恐ろしいことをしておくれだつたのねえ。同じやうに人間に生れ乍ら、廣い道を狹く歩き、自分の家に歸つて來るのにまで、人眼を忍ばなければならないとは、何と云ふ情けない身の上なんでせう。――それも之れも兄さんの心柄からだわねえ。」と、お澄は只悲しさに、兄の膝元に崩折れて泣き入つた。

「心柄！」と、惣太はピクリと其の太い眉を動かしたが、泣き入つたお澄の姿を哀れ

氣に眺めた眼を屢瞬いて、「違ひねえ、全く心柄だ。――それはさうと、お澄、お前は何うしてお邸を出たのだ。」

「はい。つい一月ばかり前に此方へ參りました。――兄さん！　私は追ひ出されたのです。」

「何？　追ひ出された！」

「え、私はね……私はね、兄さんの妹だからつて……」

「俺の妹だからお前を追ひ出す！　それは一體何う云ふわけだ？」

「いゝえ、最うそんなわけは聞かなくたつて好いのよ。」

「いや、好くはねえ。」

「兄や、お邸から姉やを連れて來たなア、俺だによ。」

「何？　お前だ……？」

「あゝ。父は死んで了つたゞし、兄やは何處かへ行つて居なくなるし、俺ア一人で御飯食べられねえだで、姉やのお邸を尋ねて行つて見たゝ。するとな兄や、姉やが立派

な人の居る處で苛められて居たあで、俺ア口惜しくつて怒鳴つて遣つたゞ、惣太の弟だつて。俺が兄やはお寺や村を火の海にして、賽錢箱叩き割つて錢を盗つた傑え人だから、兄やを呼んで來るつて奴張つて遣つたゞ。そしたらな、俺がの勢ひに恐れて、姉やを歸して寄來しだゞによ。」と、愚鈍な眼に得意の輝きを見せて云つた。

「音次、それではお前お邸へ行つたゞな！」

「あゝ行つたゞ。えらあ大え家敷だによ。——俺がの家より素張らしい家だ。」

「俺が固く云ひ付けて、どんなことがあつてもお邸へ行つちやならねえと云つて置いたのに、幾ら馬鹿でも何故行つたのだ？」

「だつて、兄やは飯食つても、俺ア一人で食へねえだもの。——食へねえと俺がも死ぬだによ。」

「それもさうだなア。——お前には罪がないのだ。」と惣太は嘆息して、「だがお澄！音次が行つて俺の妹と云ふことが分つたからつて、お邸で暇を出すと云ふなア、一體何う云ふ理由だ。」

「今更そんなことを聞かないだつて……」

「いゝや、聞かなくちやならねえ。」

「聞いて何うするの？」

「何うもしやしねえ。只聞くのだ。」

「又、敵打ちをするなんて、お邸へ仇をするやうなことがあつては、長年御恩になつた御前樣に濟まないのですから……。」

「そんなことはしねえから、話してくれ。」

「話をすれば長くなるのですけれども……」と、さう云つてお澄は、久世のこと、鞆音のこと、江守のこと、久世の爲めに兼ねて自分が力を盡して居たこと、そして、池の傍の亭で鞆音が久世に暇を出して居る其の暴慢な態度に奮激して、自分も暇を取ることを宣告して、久世の爲めに辯じたこと、其所へ音次が突然現はれて、愚かな心の何も彼も喋つたことなど、其の時の有樣を悉しく話した。

「しかしね、御前樣は何うしても私を出さないと仰言つたのですけれど、お嬢さんが、

そんな兄の妹をお邸に置いては、お邸の名譽に拘るから一寸も置かれないつて、それを楯に取つて强情を張るものですから、到頭邸を出されたのです。」

「それでは、私が惡人だから、其の惡人の妹のお前を邸に置いては、邸の名譽に拘ると云ふのだな。——いや、俺に罪があるからつて、罪もないお前を追ひ出したのだな。」

「まあさうです。」

「あゝ、世の中と云ふものは、何うして斯う弱い者に愁いのだらう！」と惣太はほつと熱い息を吹いて太息したが、「お澄、今迄俺のして來たことは成程世間の奴等から見れば惡いことだ。世間の眼には俺は惡人だ。しかし、お前に何の罪がある。兄が惡いからつて妹が苛められ、親に罪があるからつて子供が憎まれるのは、不法ぢやねえか。之れだから俺は癪に解る。お澄、俺だつて根からの惡人ぢやねえ、惡人でねえ者を惡人にしたのは誰の罪だ。皆世間ぢやねえか。父さんが僅か牛乳一合盗んだ爲めに、懲役にまで行つて歸つて來て居るのに、世間ぢや盗人々々と云つて相手にしねえ。父さんは怒つて到頭此の伊豆の山奥まで引込んだが、世間の奴等は他人の惡いことを決して怨しては置かねえ。何時の間にか此の村でも盗人呼はり。一合の牛乳の爲めに一生涯盗人々々と言はれて慘めな中に死んで了つた。私も父さんのしたことを善いたあ言はねえ。しかしお澄、一合の牛乳で親子四人を一生涯苛める世間は餘り慘酷でねえか！　俺ア物心がついてから、父さんの涙を呑んだ胸の中を思ひ遣つて、世間の奴等を相手に惡いことをして來たが、さうまで世間から憎まれて來た父さんの遺言に、初めて眼が醒めて、一度善人にならうとした。だが、世間は矢つ張り俺を眞人間にさせなかつた。なアお澄、誰が好き好んで人に憎まれたい者があらう。賞められたい、好い顏もして貰ひたい。だが、貧故に親が僅かの間違ひをした爲めに、其の子迄が心にもない惡黨にならなくちやならねえ。之れも矢張り人間の罪を責めることを知つて、許すことを知らねえ世間の罪だ。俺を此の惡黨にした上に、お前にまでも難儀をさせると云ふなら、よし！　俺に考へがあるだ！　世間の奴が兄弟三人をそれ程迄に苛めるなら、此の惣太の息と腕の續く限りは！」

と、立上つた。キリ〳〵と眥を引裂ける程釣り上げて、齒を喰ひ縛つて憤つた。

「兄さん、さう短氣を起さないで下さい。今更どんなに怒つて見ても仕樣ないぢやありませんか！　たとへ私に罪はなくとも、兄弟であつて見れば兄さんのすることは皆私にかゝつて來るのは當前ですもの。――兄さん、そんなことを思ふより、何うせ世間から捨てられた惡人の子ですから、世間で何と言はうとも、そんなことには關はないで、水入らずの兄弟三人で仲好く暮して行つて下さいな！」と、健氣にも兄の短慮を諫めるお澄の眼には、兄を想ふ誠心の熱い涙さへ浮んで居た。

惣太は、妹の其の可憐な心根を哀れむやうに、眤と眺めて、

「あゝ、お前はしほらしいことを云つてくれるなあ。俺は……俺は……世間の奴等が何萬疋集つて來ようともびくともしねえが、お前のさういふ優しい言葉を聞いたり、音次の此の哀れな姿を見たりするとな、此の胸が……胸が炒られるよりも切ねえわ。」

「兄さん、だから何うぞ眞人間になつて下さい！」

「眞人間になれ！」と惣太は、びつしより涙に濡れた髯面を上げて、「生れ變つて來なくちや、此の惣太を世間は眞人間にしてくれねえ。――澄！　女にや男の心は分らねえだ！」

「ぢや、兄さんは何うしても……」

「おゝ、骨を削られても善人にはなれねえ。――七生までも世の中ア呪つて遣るだ！」と、眼は燃えるやうに輝いた。

「兄さん！」

「おゝ、お澄！　お前や音次には濟まねえが、勘辨してくれ。――男の意地だ！」

「兄や！」

「音次！」

三人は犇と抱き付いた。――血を分け、骨を刻んだ骨肉の兄弟三人の三つの身體は、壁の隙間をひそやかに忍び込む風に暗いランプの焰がはためく仄明るい光りの下に一塊に結ばつて、何時まで經つても離れようとはしなかつた。

やがて惣太は衝と離れて、帶を緊め直した、

「お澄、俺は之れで最う行くだぞ。」

「まあ、今からですか！」お澄は呆れて、涙に濡れた眼を、圓らに見張つた。

「あゝ、御用の一聲で何時何うなるか分らない俺の身體だ。何時までも愚圖々々して居られねえ。殊に俺が今夜此處を訪ねたことが分ると、お前等に又どんな災難が羅るか知れたものでねえ。——之れで出て行くだ。」

「出て行くつて、何處へ行くの？」とお澄は不安さうに聞くのであつた。

「ハ、、、……。盜人の行先は言はれねえだ。最う之れで一生會へるか會へねえかも分らねえ。ぢや、お前も音次も身體を大事にしろよ。」と、出て行かうとしたが、流石に後髪を引かれるやうな思ひで、ぢり〳〵と後に返る。

「兄さん！」

お澄は再び兄の廣い胸にしつかと抱きついて顏を埋めた。あゝ、碌々顏も見覺えられないやうな幼い時に別れてから、漸う〳〵十幾年振りに初めて會つて嬉しいと思つたのも束の間、一夜を兄弟一緒の家根の下に明すことも出來ないで、別れねばならぬ

とは！

「あゝ、果敢ない兄弟の緣だわねえ。」と、身を悶へて咽び入る。

「おゝ、之れも皆運だ。お澄、音次。次ぎの世には少しは樂な身に生れ變らうせ。」と片手にお澄の脊を撫でゝ、片手は音次の肩に置いた。

「兄さん、本當にねえ。」と、お澄もしみ〴〵と云つた。

「音次は男でも此の通りの人間で、力にも役にも立たねえ。お前も便りなからうが、何うぞ辛抱して此の人並でねえ弟に不愍をかけて遣つてくれ。」

「それは最う兄さん……」

「あゝ、それで俺も安心だ。」

「兄や、歸るのけえ。」

「うむ、歸るだ。——お前は人並でない人間の上に、こんな兄さんを持つて、定めて人から苛められて口惜しいこともあるだらうが、辛抱してくれよ。」

「兄やが行つて了ふだと困るなア。——兄や、姉やを嫁にして遣るだから、行かねえ

でくれよ。」

「可哀想な奴だなア。」と、惣太は音次の顏をつく〴〵と眺めたが、「ぢやお澄、身體を大事にして、音次のことを賴むだぞ。」

と、云ふかと思ふと、其の大きな身體は素早く外の闇の中に消えて了つた。

「兄さん！」

「兄や！」

二人は闇に向つて狂氣のやうに叫んだけれども、聞えるものは只風の音！　波の音！

「あゝ、兄やは行つて了つたゝ！」

其三

其の翌日は、昨夜の暴風はけろりと忘れたやうな快晴であつた。一天拭つたやうに塵程の雲も止めず澄み渡つて、未明から裏の竹籔で朗らかな朝日の光りを喜び迎へる

やうに、雀の囀りが喧しく聞えて居た。お澄は兄の行方を案じ、我が身の儚ない運命を悲み、戀しい秋夫の身を想うて、夜一夜を物悽い風の音、波の音を耳にしてまんぢりともせずに明した。——朝方になつてから漸くうとうとと眠氣ざしたけれども、眠る暇もなく直ぐに苦しい夢に醒まされた。目醒めた時には、脊から腋の下はびつしよりと冷たい汗に濡れて居た。

「おゝ、氣味が惡かつた。」と、お澄は獨言つと、寢衣の儘で床の上に坐つた。そして、未だ眼の中にまざ〳〵と殘つて居る夢の中の氣味惡い光景が、薄暗い室の中の隅々に潜んで居るやうな氣がして、心が慄へた。で、白い美しい指に横鬢を撫で上げながら起き上ると、高窓の雨戸を細目に開けた。東向きになつて居るので、爽かな外氣と共に輝やかし朝の日の光りがさつと流れ込んで、むさくるしい室の中を晴々した明るさに見せた。——お澄の眼り不足に蒼い頰も、少し腫れぼつたい重さうな瞼も、快い朝の新らしい空氣に觸れて、生々とした血が次第に廻つて來ると、仄のりと赤味を潮して來る。お澄は昨夜の壓付けられるやうな重苦しい氣分は何時の間にかけろりと拂ひ

落されて、頭も心もすが〳〵しくなつた。で、手早く寢衣を着換へると表の戸を開けたり、雨戸を繰つて置いて裏口から井戸端に出た。撥釣瓶で美しい水を汲み上げると雙の肌を脱いで、その白く柔らかな胸から乳から二の腕を冷たい水に浸して、身體や顔を洗つた。そして、乾いた手拭で後を擦つて居ると、その美しい皮膚は、見る〳〵鮮かな血の氣を潮して、全身若やかな淡紅色を帶びて來る。お澄は水鏡に我と我が顔を映して暫くは恍とりと眺め入つたが、やがて、櫛を一寸水に濡らすと、寢亂られた髪の崩れを梳きつけた。そして、ふくやかな肉の高く盛れた其の健康さうな胸を突き出すと、思ふさま肩を張つて幾度びか深呼吸をした。爽やかな朝の空氣を強か肺臓に吸ひ込むと、全で身體の氣持が一掃されたやうにすが〳〵しくなつて來た。

お澄は、身體も心も生々とした氣分になつて、家の中に入ると、音次は未だぐつすりと眠入つて居た。枕を外して、上半身を夜具の外に露出して、左の腕を疊の上にどたりと投げ、厚い脣を緘りもなくわんぐりと開いて、すや〳〵と眠入つて居る。

「よく寢てるわね。」

お澄はさう云つて、其の儘寢かして置くと、自分の夜のものを片付けて、勝手にかかつた。甲斐々々しく赤い襷を掛けて水を汲んだり、火を焚きつけたり……其の間も絶えず秋夫の姿が心から離れなかつた。秋夫のことを想ふ間々に、昨夜電のやうに其の姿を一寸見せて、瞬時に去つて行つた兄の惣太のことを、夢のやうに思ひ出すのであつた。

やがて、朝の仕度の出來る時分には、音次も其の深い眠りから漸う〳〵目醒めた。

――そして、二人は樂しい朝餉を終つた。

昨日に似ず今日は表もひつそりとして、客もない。で、お澄は朝の後片付けを終ると、又、昨夜の針仕事を取出して、一心に針を運んだ。――音次は何處かへ行つて、ガランとした家の中にはお澄が只一人であつた。

お澄は、こんな時に秋夫が來てくれゝば好いと、心でそんなことを思ひつゝ、時々眼を上げてはチラと表を眺めるのであつた。――人通りも稀れな白く乾いた道には、輝かしい初夏の明るい日が落ちて、白い陽炎はチラ〳〵と眩しく燃えて居る。

「あの、一寸物をお尋ねいたしたいのですが……」

此の邊では聞馴れぬ優しい都言葉が、せつせと針を運んで居る耳に偶と入つたので、お澄は懐しく顔を上げて、表を見た。――傾げた鼠色のパラソルに眩しい光りを避けて、鐵色お召の半コートの下から、柔らかなセルの單衣の裾を見せて、空氣草履に眞白な足袋も美しく、すつきりと上品な姿を其所に立つて居るのは、あゝ、思ひも掛けぬ久世であつた。

「まあ、お部屋樣！」

お澄は、さう云つて轉ぶやうに駈け寄つた。――久世も實に思ひ設けぬと云ふやうな、意外な表情をして、

「まあ、お澄なの……」と、呆れて居た。

「本當に能くまア……。」と、お澄は、餘りの意外に氣も轉倒したやうに、意味もないことを云つて、只、うろ〳〵したが、やがて久世が外に立つて居るのに氣がついて、

「さア何うぞお入り遊ばせ。」と、慌てゝ云つた。

それよりも久世の驚きは以上であつた。何うしてお澄がこんな處で、こんなことをして居るのか！　秋夫に一目逢ひたいばつかりに、遙々東京から訪ねて來た今日の今、此所でお澄に會はうとは、今の今迄で久世は夢にも思ひ得なかつた。

「本當に不思議だことねえ。」

パラソルの金具をパッチリ締めると、久世は内へ入つて、お澄の薦める座布團の上に腰を下した。

「私、今日お部屋樣にこんな處でお目にかゝらうとは……何だか、夢のやうな氣がいたします。」と、懐かしさうな眼に恍とりと久世の顔を眺めた。

「全くねえ。」

二人の眼はぴたりと合つて、暫くは無言であつた。

「まあ能くお出掛け遊ばしましたのね。」と、お澄は口を切つた。

「えゝ、若樣のことが忘れられないものだから。」と、眼を潤まして、「それに聞いたこともあるしね、一目お會ひ申したいと思つて、昨夜東京を立つて、今朝小田原から船

で着いたのですよ。」

「まあ、左樣で御座いますか。」と、親身の親の情けなればこそ！　と、遙々訪ねて來た久世の心を思ひ遣つて、お澄はしみ〴〵とした氣持がした。

「長安寺へ行く道を尋ねようと思つて、聲を掛けるとお前であつたでせう――。お前がこんな處で暮して居やうとは、夢にも思つて居ないものだから、私吃驚しましたよ。」

「私も、此の邊では聞き慣れないお上品なお聲だと思ひまして偶と見ると、お部屋樣が立つて居らつしやるので御座いませう。何ですか夢のやうな氣がいたしましたの。」

「本當にね。――之れも神樣のお引合せだわ。」

「左樣で御座いますね。」と、二人は顏を眺め合つて、恍とりとした。

「それはさうと……」と、久世は思ひ出したやうに、「お前は又、何うしてこんな處で暮してるの？」

「此の土地が私の故郷で御座いますから……」と、お澄は何を思つたのかほんのり顏を染めて俯向いたが、言葉を反らして、「長安寺は直ぐ此の阪上で御座いますから、

若樣は大抵毎日お見えで御座います。今日もやがてお見えになりませうから、何うぞ緩くり遊ばして下さいませ。」

「難有う。――お邸の方とあゝ云ふ工合になつたので、實は內證で來たのですから、そつとお會ひ申したいのだよ。――若樣が此處へ入らして下さると、本當に都合が好いのだけれど……」

「屹度お見えになりますから、暫くお休み遊ばしませ　……若しお見えになりません時には、私、一寸行つてお迎へいたして參りますで御座いませう。」

「さうね。――ぢやさうして貰ひませう。」

お澄は甲斐々々しく顏を洗ふ冷たい水を取つたり、お茶をすゝめたりなどするのであつた。

二人は、外の眩しい日を時々仰ぎながら、さま〴〵なことを靜かに語つた。佐原家の其の後のこと、久世の近頃の日常。お澄が東京を去つて此處へ來て茶店を出すまでのこと、秋夫の樣子など、話はなか〳〵に絕える時がなかつた。

やがて晝になつた。

「お澄、お澄。又來たよ。」と、秋夫は戸口に立つて頭から額に浮いた汗を拭いた。

「おや、若樣、入らつしやいまし。」と、お澄はいそ〳〵と出迎へたが、「今日はほんとに珍らしいお方が東京からお見えになつて居らつしやいますよ。」

「え！　珍らしい方つて誰？」

「ホ……當てゝ御覽遊ばしませ。」

「誰か知ら？　姉さんが入らつしやる筈はないし……」と小首を傾げて獨言つたが、「お父樣？」

「いゝえ。」

「種島？」

「いゝえ。」

「山崎？」

「いゝえ。」と、首を振る。

「ぢや、誰なの。——焦らさないで、お澄、早く知らしておくれよ。」と、秋夫は急き込んだ。

お澄は、秋夫の美しい額から、すつきりと高い鼻の上にポチ〳〵と浮いた汗を見て、

「まあ、大變なお汗。——澄は只今お手拭を冷して參りますから、お拭き遊ばしませ。」

「今日は全く暑いね。」と眩しい外の光りを一寸眺めたが、「それよりか、東京から來たのは誰だか、早く知らしとくれよ。」

「お部屋樣が入らしたのですよ。」

「え！　久世が來た！」と、半ば驚き、半ば疑ふやうな顏色をして居る。

「えゝ。」

「そして、何處に居るの？」

「先刻方、一寸お眠り遊ばしましたの。只今直ぐお起し申しますから、まあ、汗で

もお拭き遊ばせ。」と、お澄は秋夫の爲めに、冷たい井戸水に手拭を冷しに裏へと出て行つた。

乘りつけぬ船に搖れたのと、馴れぬ旅路の宿屋の二階の淋しい一間に明した一夜を、物悽い風の音と波の音とが耳について遂に夢の結ばれなかつた疲れとに、秋夫の來るのを待つ間を暫く横になつて、うと〳〵して居ると、秋夫の來たらしい氣勢に久世は起て出て來た。

「おゝ、若樣！」と、懷しかつた——變つた秋夫の姿を見ると、胸が迫つて、涙が湧いた。

「あゝ、久世か！」と、秋夫も駈け寄つた。——蒼味を持つた其の眼は、涙に美しく光つて居る。

「若樣、御機嫌宜しう。御變りもありませんで……。」

「何うして來たの？　僕は會ひたかつた。邸ではお父樣も變りはないか。」

「はい。——私は最うお邸には居りませんの。」

「何？　邸に居ない。——それぢや何處に居るの？」

「若樣、私はお邸を出されましたので御座います。」と、咽び入る。

「あゝ、又お姉樣に苛められたの、仕方がないなア。——お澄はそんなこと聞かせてくれないものだから、今迄些とも知らなかつた。——しかし邸を出たらお前困るだらうねえ。」

「いゝえ、何も困ることありはいたしません。」

其の時、お澄は手拭を濡らして戻つて來たが、二人の話の邪魔をしてはと、小蔭に立つて、そつと耳を傾けた。

「何うして此處へ來たの？」

「はい。たつた一目若樣にお目にかゝりたいと思ひまして……。」

秋夫は喜ばしさうに、顏色をはづませて、「好ゝよ、〳〵。お姉樣が苛めたつて好いよ。僕のとこに居てくれ。——ねえ、僕と只二人で面白く暮さうねえ。」

「はい、難有う御座いますが、若樣は最う直に御還俗遊ばして、お邸にお歸り遊ばさ

ねばならぬ御身で御座います。」其の言葉を聞くと蔭に立聞くお澄の顔色は、はつと變つた。

「僕が還俗する？　そんなことがあるものか！」

「いゝえ、正當な血を享けた若樣がお有り遊ばすのに、それを出家さして女を子爵家の世繼にすることはならぬ。と、御親戚からの大反對で、いよ〳〵若樣が御相續遊ばすことに決りましたと承りました。いづれ近々お迎へが參るで御座いませう。――お邸からは何のお便りも未だ參りませんので御座いますか。」

「僕は何も知らないよ。――幾ら迎へに來ても、僕は決して歸りはしないから。」と、固い決心の色を濃い眉と眉の間に見せて、斷乎として云つた。――お澄は泣いて居る。

「若樣。さう仰言らずに、何うぞお歸り遊ばしませ。若樣が佐原家のお世繼にお成り遊ばせば、之れより嬉しいことは御座いませんのですから……。」

「僕は何うしても歸ることが厭だ。――歸つたつて又お姉樣に苛められるからねえ。」と、果敢なげに云ふ。其の眉の邊りが淋しい、

「御尤で御座います。」

「血が汚れてるの、佐原家の邪魔者のと、人間でないやうなことを言はれるからねえ。」

「御尤で御座います。」と、久世は只繰り返すより外になかつた。――自分も共に靭音の苛辣な毒舌に苛め拔かれて來た身である。秋夫の心事を想へば、再び邸へ歸らぬと云ふのも無理はない。

秋夫は、姉の憎い言葉が今の今生きて動いて居るやうに、憤激の色を眉宇に見せて、

「僕はそんな……そんな侮辱を受けて、同じ久間に生れ乍ら畜生扱ひをされるよりゝ、矢つ張り此の山寺で一生暮した方が好い！」と、昂然として云つたが、顏を蔽ふて涙に咽んで居る久世の姿を痛ましく眺めると、又萎れて、

「ねえお母さん。――お母さんと僕とは、何故こんなに卑しまれねばならぬのでせう。」

久世は、驚きと、喜びとを搗き交ぜたやうな、一種名狀し難い複雜な表情を其の顏に見せて、

「何と仰言います！　お母さんなどゝは？」と、殆んど叫ぶやうに云つて、涙に濡れ

た眼を見張ると、秋夫の顔を睨と見入つた。

「言はして下さい！　お母さん！　僕に、お母さんと言はして下さい！」と、秋夫はつと進み寄ると顫へる久世の手を犇と握つた。「僕はねえお母さん。お母さんがあつても十七年の今日まで、只の一遍もお母さんと呼んだことがないのですもの。――他所の家ではどんな貧しく暮して居る家でも、生みの母はお母さんと云つて居ります。僕はそれを見るにつけても、何うかして只の一度でも好いから、貴方をお母さんと呼びたいと、其のことが僕の一生の願ひであつたのです。自分の母を母と云ふことが出來ないで、久世々々と召使ひのやうに呼び捨てにしなければならぬ今迄の僕は、どんなに愁らく情けなかつたでせう。華族と云ふものが、身分とか家名とかの爲めに、現在の生みの母を母と呼ぶことも出來ず、親子らしい思ひを一日だつてすることも出來ないものなら、僕は今の今華族など捨てゝ了つて乞食となつても厭ひません。人の軒端に立つて五厘一錢の物乞ひに命を繋ぐ卑しい乞食となつても、親子らしく暮して行ける方が、僕にはどんなにか嬉しいのです。――ねえ、お母さん。何うぞ秋夫と一遍呼

んで下さい。僕にお母様と言はして下さい。」

あゝ、永年胸に祕めた其の誠心を吐露した秋夫の顔は紅を潮して、我と我が言葉に激して昂ぶる感情に、凉しい瞳は力强く輝いて、聲も自づと喘んだ。――凛として云ひ終ると、其の赤い脣を蕾のやうに屹と結んだ。

生みの親子なればこそ、子爵の正しい血統を受け繼いだ身が、卑しい妾風情の我身を斯程迄に思つてくれる！　久世は犇と抱き付きたい程高潮して來る感情の激動を凝と抑へて――只泣くより外はなかつた。身體は大波のやうに搖れる。

「御尤で御座います。――しかし若樣は佐原家の御世繼ぢやありませんか。私風情の卑しい者に、何うしてそんなことが申されませう。お腹は借物です。貴方と私とは身分が違ひます。」

涙に慓へる聲を嚙み緊めるやうにして、漸う〳〵云つた。

「身分が何です！　家名が何です！　僕を生んだ貴方は僕のお母さんぢやありませんか！」

「若様、最う何も仰言つて下さいますな。」

「あゝ、之れ程云つてもお母さんと呼ばして貰ふことが出來ないのですかなア。」と、秋夫は絶望的に叫んだ。

「いゝえ、若様！　私だつても……私だつても……それは……」と烈しく咽び入る。

「え！　それでは、お母さんと呼ばして下さいますか！」と、思はず眼は輝き、聲は喘んで、氣の弱い母を勵ますやうに、「華族とか、若様とか、そんな隔てがあればこそ、親と子が斯うして顔を合しても名乘り兼ねるのでせう。——お母さん、僕は今佐原家の者でも何でもない、出家の身の上です。此の長安寺の小僧です。お母さんも最う佐原家の人ではないでせう。二人とも世に捨てられた可哀相な者ぢやありませんか！　親子が名乘り合ふのに、何の遠慮がありませう！」

「あゝ、何と云ふお優しいことを仰言います。現在親であり、子でありながら、世間の義理に其の親子の情を殺さなければならぬ、私の身にもなつて見て下さいませ。」

「未だそんなことを仰言つてるのですか！　ねえお母さん！　若し、僕が還俗して何うしても邸へ歸らねばならぬやうなことがあれば、再びお母さんと呼ぶことが出來なくなります。何うか一遍秋夫と呼んで下さい！　お願ひです。」

「はい。」

「お母さん！　貴方と私とは親身の親子なんですねえ。」

久世は最う堪らなくなつて、狂氣のやうに飛び付くと、秋夫の身體を屹と抱いて、

「おゝ、秋夫や。」

「お母さん！」

二人の身體は、犇と一つに結ばれた。あゝ、此の時、十幾年の其の間、親子を隔てた身分の高下も、現世の義理も何もなかつた。骨肉の深い情愛の熱火は總ゆるものを燒き盡して、赤裸々の親子を其所に結び付けたのであつた。眞實の母と、眞實の子とは、何時までも離れまいとするものゝやうに、犇と相抱いたまゝ、動かなかつた。

蔭に一切を聞いて居たお澄は、堪らなくなつて轉ぶやうに走り出た。

「お部屋様！」と、顔を蔽ふてべつたりと其所に泣き崩折れた。

「おゝ、お澄！」

「お母さん！　僕は邸に歸るのが嫌になつた。ねえ、お母さん。お澄と三人で此の山の中に何時までも暮して居たう御座います。」

「いゝえ、それではお父様に御不孝に當ります。たとへ私が居りませんでも、何うぞお愁いところを御辛抱遊ばして、佐原家を御相續遊ばしませ。さうでないと、久世が殿様に濟まないことになります。――ねえお澄。」

秋夫が邸へ歸る――あゝ、それはお澄に取つて我が身體から我が魂を拔き去られるよりも愁い、切ないことである。秋夫が邸に歸つて立派な華族の世繼となつた曉は、自分は何を樂みに此の世に生き長らへて行くことが出來やう。しかし、それは、我が命よりも愛する人の出世なのである。縱し秋夫と會はれなくなつた其の後は、たとへ焦れ死に死なうとも、それが若樣の御出世になるならば……と、健氣にも決心した。

――熱い涙にべつとり濡れた顔を振り上げて、

「はい、若樣がお世繼におなり遊ばせば之れ程結構なことは御座いません。――澄のやうな者でも、若樣の御出世を蔭ながらお喜び申します。」と血を吐く思ひで聲を勵まして云つたが、がつくりと力なく、「しかし、さうなりますと私は……私は二度と再びお目にはかゝれませんのですねえ。」

誠にお澄の胸は熱鐵を呑むよりも愁かつた。――あゝ、身分の差ひ、人間の義理がないものならば……？

「僕は華族などになり度くはない。矢張りお母樣とお澄との傍に居たいなあ。」

「そんなことを仰言るものではありません。――今にもお邸から迎へが見えましたら、何うぞお歸り遊ばしませ。ねえお澄、お前も能くお勸め申しておくれ。」

「はい。何うか若樣、お歸り遊ばしませ。」と、顔を上げぬ。

秋夫は打ち萎れて、

「あゝ、仕方がないなア。二人がそんなに云ふなら、僕、邸に歸るから、二人も歸つて來れると好いな。」

久世とお澄とは涙に輝いた、熱い眼と眼を見合はした。

「それが歸れますことなら……ねえ、お澄。」

「はい……。」

二人の眼からは更に新しく涙が湧いた。――露の玉でも散るやうに、止め度もなくハラ〳〵と……。

其四

お澄は、秋夫が何うしても邸に歸らねばならぬと云ふことを聞いて、只さへ浮かぬ心は一層沈んで來た。夕方五時の汽船で久世は立つて了つた。懷しい秋夫も寺へ歸つた。只一人後に殘つたお澄は氣拔けがして、心は全で空虛にでもなつたやうに、うつとりとして何をする氣力もなかつた。それに、一時に感情が興奮した後の疲れもあつて、氣は一層滅入込んだ。

崩折れるやうに緣臺の上にべつたり腰掛けると、我が儚ない運命の過ぎ越し方や行末などが、思ふまいとしても自然と胸に込み上げて來るのであつた。それに連れて胸は裂かれるやうに痛くなつて來た。

「情けないわねえ。」

思はずほつと吐く熱い溜息と共に獨言つと、言葉に連れて涙は自づと瞼に溢れて來た。――俯向いた襟脚の白いのがすつきりと水際立つて、はらりと滾れた鬢のほつれが、そよ〳〵と吹いて來る微かな風にほろ〳〵と嬲られる。此の時、稍々西に傾いた日射は、日除の大きな藤棚の青葉を洩れて、透けるやうに美しい綠の光は、白いお澄の横顏にばら〳〵と降り注いだ。先刻方歸つて來た音次は、カツと日の射し付ける緣臺の上に長く寢そべつた儘、何時か高い鼾を刻んで、ぐつすりと眠り込んで居た。

其所へ、思ひ懸けなくも長安寺の番僧德念を先に立てゝ、村の人々が二三人、何かがや〳〵と土聲に罵りながら入つて來た。それを見るとお澄はハツと悸へて、急に胸は息苦しいまでドキ〳〵高く鳴つて來た。慌てゝ立上つて小腰を蹋めると、

「何うぞお掛けなさいまし。」と、どぎまぎと挨拶をした。

「大きにお世話だ。」と、先に立つた德念はにべもなく云つて、「時に、お前とこの惣太が昨夜歸つて來たさうだね。」と、奥の方など透すやうにして物色した。

お澄はギクリと胸を突かれて、顏色はさつと變つたが、直ぐに取直して、

「いゝえ、歸りはいたしません。」

「何、歸らない。嘘を吐くと承知しないよ。——本當に歸らないのかな。」

「えゝ。全く歸りません。」と、お澄は躊躇なくキッパリ答へた。

と、一緒に來て居た太作と云ふ前齒の拔けた五十爺がづか〳〵と前に進んで、

「何、歸らねえと云ふことあるもんか。——こんなはア美しい女つ子の癖に、矢つ張り惣太の妹だけあつて白つぱくれた嘘吐くだ。惣太の姿を俺ア昨夜此の眼で確り見たゝもの。」

「さうだ、太十どんが見たと云ふので村の大騒ぎになつて、今朝から村中寄集つてはア今迄で評議打つたゝ。あんな奴に歸られちや村の者は一晩だつておち〳〵眠られね

え。それで長安寺樣を賴んで斯うして來たゝ。今の中に皆追ん出して了はねえと、全く村中不用心でならねえだ。」

「なあお澄、斯うして歸つたのを確かに見たと云ふ證人があるのだ。——嘘を吐くとお前も許さんぞ。」と、德念はおどすやうに云つた。

「いゝえ、あのそれは……」と、何か言ひわけしようとしたが、急に口を噤んで差俯向いた。

「歸つたと云ふのだらう。お澄、お前は知るまいが惣太の爲めに此の村の人が之れ迄どれだけ迷惑したか知れやしない。畑の物は荒される、盜みはされる。其の上に先祖代々から傳つた家は燒かれる。此の村の衆の怨みは皆お前達一家の上に集つて居るのだ。お前達が此の村へ歸つて來たつて置いとかれる身の上ぢやないのだ。それを斯うして置いて遣るのは、皆村の衆の慈悲だ。それも辨へないであんな惡黨の兄を慾じいに庇ひ立てをすると、全くお前達の爲めにならんのだぞ。」

「はい。」

「歸つて來たものなら、素直に出すが好い。――直ぐ警察に引渡すのだから。」

「はい。」

「はい〳〵云ふだけでは分らん。――惣太を何處に隠しとるのだ、それを白狀するが好い。」

「いゝえ、決して隠し立てなぞいたしません。」

「之程云つても未だ白狀せんのかな。」と、先刻から喋りつゞけた德念は、最う勘弊がならぬと云ふやうに、濃い眉をぴく〳〵刻んで、忌々しさうに舌打ちをした。

其の時太十は寢そべつて居る音次の姿を偶と見付けて、

「四つ足見たやうに日向で晝寢してけつかる。盗人の晝寢つて云ふから全く油斷がならねえ。――やい、四つ足、寢るなら腹んばいになつて寢るだ！」と、嘲笑ひながら音次の横腹を足を上げて突つ付いた。

音次は漸う〳〵鈍さうな濁つた眼をぽかりと開くと、「あゝあ。」と一つ大きな欠伸を怠るさうにして、

「何するだアよ。」と、睨み付ける。

「何も彼もねえだ。お前に晝寢されちや夜が物騒だから、起ろと云ふことよ。」

「何云ふだ。そんなことを云ふと兄やに云ひつけて遣るだぞ。」

「何？　兄やに言ひ付ける？」と、三人は相互に眼を見交して、「ぢや兄やが歸つたのだな。」

お澄は眼色でそれと知らせたけれども、馬鹿の音次に通じよう筈がない。

「あゝ、昨夜歸つたゞが、直ぐ又、出て行つたゞ。」

「直ぐ出て行つた。」と、德念は確めて、「それでは本當に歸つたのだな。――おい、お澄、お前も盗人の親父や兄を持つてるだけあつて、中々嘘が上手だな。お前達姉弟を置いとく爲めに、惣太のやうな惡黨が何時までも此の村をうろ〳〵しては物騒で仕樣がない。今日から此處へ置くことはならないから、出て行つて貰はねばならん。」といきまいた。

太十も德念の言葉につゞいて、

「なア、先刻も長安寺さんが言はつしやつたやうに、お前達の親父も兄もどれだけ村中に迷惑をかけたか知れねえ。それを斯うして置いて遣るのは村の者のお情と云ふものだ。それも考へねえであんな惡黨の兄を庇ひ立するたア、矢つ張り爭はれねえ惡黨の妹だ。そんな奴は危くて一刻も此の村に置かれねえだから、今直ぐと出て行つてくれ。」

「何うぞ御免下さいまし。私が惡う御座いました。」

「誰が惡うても勘辨ならねえ。村中を燒くばかりか、長安寺樣にまで火を放けて、其の上鐘を鑄る錢まですつかり盜んだ惣太の姉弟だ。最う一刻も此の村に置くことはならねえ。さつさと出て行け。」

「さう仰言りませんで、何うぞ置いて下さいまし。——此處を追ひ出されましては、全く行き處のない可哀さうな二人の身の上なので御座います。」と、お澄はしやくりあげ乍ら詫び入るのであつた。

「行くところがあらうが、なからうが、そんなことは此方の知つたことでねえ。今日

の寄合ひでお前達を此の村に置かねえこと、今度出來る長安寺の鐘の臍には、村を燒き、寺を燒き、鐘を鑄る錢を盜んだ惡黨惣太の顏を鑄込んで、百年でも千年でも、其の鐘が腐るまで憎い惣太の顏を撞木で撞くことに決つたんだ。——どんなことがあつても最う此處にはお前達を置いとかれねえ。」

「え！　鐘の臍に兄の顏を！」と、お澄は顏色を變へて叫んだ。

「おゝ。惡黨の好い見せしめだ。之れからは鐘に鑄込んだ惣太の顏が朝夕撞木に撞かれて、其の鐘の鳴る音が村々に響き渡るのを聞く度々に、村の者は子の代までも孫の代までも、其の又孫の代までも此の村に祟つた惣太を呪ひ拔いて遣るのだ。」

「あゝ、兄さんはそんなにまで憎まれて居るのですか……。」

火のやうな熱い溜息と共に斯う云つたが、身體は冷水を浴びたやうにわな〳〵と顫へて其の後の言葉は出なかつた。——死人のやうに冷たく蒼醒めた顏の筋肉は烈しく痙攣やうにぴり〳〵と顫へて、涙は止め度もなく頰を傳ふ。

「さあ、たつた今さつさと出て行け。——出て行かねえと、此の家の物を片つ端から

叩き壞して了ふだぞ。」と、太十と最う一人の百姓は押問答にまごつかしくなつて、氣短かにも其の邊の床几など手當り次第にがた〳〵と引つくり返すのであつた。お澄は大きな獸の鋭い爪に抑へられた小羊のやうに、只頭へ戰いて居た。

と、思ひ返した德念は二人を靜かに制した。

「村の衆、今日の今から出て行けと云つても出るにしても少しは支度もあらうと云ふものだ。此所は出家の役柄に私から皆樣にお願ひするのだが、何うぞ私の顏に免じて、此所五日間だけ待つて遣ることにして下さい。此の鹽梅では惣太も昨夜歸つて來たものゝ、恐がつて直ぐに又何處かへ姿を晦ましたものと見えるから、仔細もあるまいと思ふ。五日だけ猶豫して遣つて、若し其の中に立退かねば止むを得ん。家でも道具でも壞して了ふことにしても遲くはないと思ふが、何うだな？　此所は一つ私の顏を立て貰ひたいものだが……」と、宥めるのであつた。

「それもさうですが……何うすべえ、太十どん。」と、一人は息をせい〳〵喘ませ乍ら、そつと太十を顧みた。

「さうだな……惣太が居ないとすりや、五日ぐらゐ待つて遣つても好いだらう。」

—長安寺樣もあゝ仰言ることだから……。」

「それぢや、五日だけ待つて遣ることにしますべえ。」

「いや、それで私の口を利いた甲斐もあると云ふものだ。」と、二人が口を揃へて答へるのを德念は滿足さうに頷いて見せて、今度はお澄に向つて、「な、今聞いて居る通りだ。今直ぐに出て行けと云はれては、當惑するだらうから、五日間の猶豫を賴んで遣つた。若し其の間に立退かないと、村の衆が寄つて集つて家も何も叩き壞して了ふだよ。好いか。」

「はい……」と、微かに頷く。

「それでは確かに其の間に始末しないと、口を利いて遣つた私の顏が村の衆に對して立たぬことになるのだよ。」と、念を押して、「まあ、漸う〳〵納得したやうだ。さあ皆さん斯う片がついた上は、どれ歸るとしませう。」

云ひ捨てゝ三人は出て行つた。お澄は最う堪らなくなつて、崩折れるやうに其處の

地上にばつたりと倒れた。そしてヒ、ヒと押へ付けるやうに洩れる忍び泣きの音に連れて、脾腹の邊りが波打つやうにひくひくと搖れて居る。

何時か日の落ちた四邊は次第に仄暗さを增して來て、濱には波の音がざはめいて居た。

第五章

「お前、俺が之れ程云ふのに、何うしても邸へ歸り度くないと云ふのか。」

「はい、お父樣。僕は我儘のやうですけれども、全く邸へは歸り度くないのです。邸へ歸つて子爵家の世繼となつて愁ひ思ひをするよりも、斯うして此の寺の小僧で一生暮す方が私に取つては寧ろ幸福なのです。——私は、世の中がつくづく厭なんですから……。」と、秋夫は力なくほつと溜息を吐いた。

子爵は幾度か瞼を屢瞬いて、「お前にさう言はれると、父ながら全く面目ないのだが、たとへ妾腹の子とは言へ、縱し先祖からの家法があるとは言へ、正しい俺の血統を受け繼いだ唯一人の男の子を出家さして、鞆音を家へ置くとあつてはと、お前が此方へ來てから親戚間で喧ましい問題になつとるのだ。それで、お前が今邸に何しても歸つてくれぬとなれば、遂には同族間の問題ともなつて、俺は家事取締の不行屆から面目

を失するやうなことになるかも知れない。俺一個の面目は兎に角、若しも佐原家の家名を汚すやうなことがあると、全く先祖に對して申譯のないことになる。――な、其所のところを一つ能う考へて、思ひ直して歸つてくれんかな。頼みぢや。」と、手を突いて懇願せんばかりである。

「お父樣にさう仰言れますと、僕は……僕は……。」と、後は口籠つて、差し俯向いた。頂の白く纖細いのが、何とも言へず可憐しい。

「歸つてくれると云ふのか。」

「全く濟まないのですけれど……。」

「あゝ。」と嘆息して、「矢張り歸つてくれんのかなあ。」

「濟みません。」かう云つて秋夫は俛首てしまつた。

海を渡つて來る潮氣を持つた涼しい風が、惣太の呪ひの火に燒けて、半分ばかり白茶けた色をした芭蕉の廣い葉や、之れも半分は燒け枯れた兎の瞳のやうな百日紅の若葉や、山茶花の柔らかい葉などにさや〳〵と鳴つて、生木の香ひのするやうな戸締りも出來ない假造りのがたびしした座敷にそよ〳〵と吹き込んで、爽かな涼味は少し汗ばんだやうな二人の肌に快く觸つて行つた。

子爵は、秋夫を寺に上げた後、思ひ掛けぬ親類の大反對と、――一つには久世と秋夫が一時に邸から居なくなつて、老いの身に一層淋しい心細さが感ぜられる其の上に、老先のことなどつく〳〵と考へては其の爲に眠られぬ夜半も多く重なるところから、二日ばかり前執事の種島を迎ひに寄來したのであつた。しかし、久世とお澄の涙を流しての至情に動かされて、若し邸から迎へが來たら歸らぬこともないと、一度は心の動いた秋夫は、其の後冷靜な我になつて考へると、何うしても邸へは歸り度くはなかつた。姉の鞆音が居る同じ邸へ再び歸る氣にはなれなかつた。で、種島が其口を酸くしての懇請も遂に容れられなかつたのだ。それで子爵は、病後の健康の未だ全く復さない身を顧みる餘裕もなく、種島一人を連れて伊豆の國へ乘込んで來たのである。そして、種島は宿に待たして置いて、自分一人で此の長安寺を訪ね、先づ住職にも面會して、其の上秋夫に自身でさま〳〵に歸邸を說いたのである。眞逆に父が斯うして遙

逸出向いて來て說いたなら厭とは云ひ得まいと思つたのに、秋夫の決心は何所まで固いのか、父の誠心籠めた言葉も遂に動かすことは出來なかつた。

――とは言へ、と、子爵は心を靜めて、邸へ歸らぬと强情に云ひ張る秋夫の心事に立入つて考へて見た。自分を離れて秋夫自身になつて、思ひ遣れば遣る程、父の身としては胸を刺されるより更に切なく思ひ遣らずには居られない不愍なところがある。不正の關係の女の腹に宿つた不正の子！　それがこんなにまで强く執念く此の小さな少年の魂を支配して居るのか！　さう思ひ及んだ其の時、子爵の心には今迄少しも感じることの出來なかつた或る黑い影が閃いた。――今迄で見なかつた、いや、見えなかつた恐ろしい或る力を偶と見たのである。そして、身體も心も烈しい力にわな〳〵と顫へて來た。あゝ、此の時子爵は初めて我身の恐ろしい深い罪を覺つて正しく心から其の正體に面接したのである。縱し其の元の原因は我が意に滿たぬ女を妻とせねばならなかつた爲めにもあるとは言へ、其の女の魂を狂はせて生き乍らの地獄に落したばかりか、久世の一生を哀れな日蔭に埋れさして了つたのも、秋夫をして斯う云ふ

心持を抱かせるやうになつたのも、今にして思へば皆自分の罪であつたのだ。あゝ、自分は何と云ふ恐ろしい罪を犯して居たのであらう。今迄それに氣が付かずに、能くも斯うして今日まで暮して來られたものだ。子爵は其所に考へ及んで恰も今迄で盲てゐた者の眼が急に開いて、ぱつと輝かしい太陽の光りを見たやうに、我が罪の實體を正しく見て、飜然として悔悟した。――自らの恐ろしい罪を悔悟した。

あゝ、眞實秋夫の身になれば、世を厭ふのも無理ではない。何しても邸へ歸らぬと云ふのも無理ではない。さうした心持になつて居る我が子を憐れむよりも、さうした心持にならずには居られないやうな運命に生み付けた自分の恐ろしい罪の許を、先づ我が子の前に蹲づいて乞はねばならぬ。

「秋夫、俺が惡かつた。――此の通りだ。許してくれ。」と、我が子の前にぴたりと兩手を突いた。雙の眼からは、大きな涙が滂沱として落ちるのであつた。

「お父樣、何を仰言るのです。許すの許さんのつて、私は何もお父樣から謝罪られるやうなことはありません。」と、秋夫は元より父の心が分らねば、驚くと云ふよりも寧

ろ呆れたやうな眼を見張つた。

「いや、俺は今迄氣が付かんで居た。年端も行かないお前に斯う云ふ不愍な考へを起させたのも、久世をあゝ云ふ埋れた生涯に送らせたのも、皆俺の罪ぢや。——俺が惡かつたのぢや。」

「まあお父樣。——今更誰が惡いも、彼が惡いも無いぢやありませんか。皆、斯うなる運命なのですから……。」

「いや、さうでない。俺に言はしてくれ。——俺を謝罪して、何うぞ俺の罪を許してくれ。あゝ今迄俺は何と云ふ恐ろしい罪惡を犯して居て氣が付かんで居たのだらう。眼が醒めた今となつては、何とお前達に申譯して好いか、其の言葉がないのぢや。——お前、斯う云ふ運命に生みつけて遣つた俺を嘸怨んだらうなあ。無理はない。若し、怨んで怨の晴れるものなら何うぞ怨んでくれ。あゝ、今になつて初めて久世の心持にもなつて見ることが出來た。又お前の心持も本當に分つた。お前も可哀相だが、久世も不愍な者だ。俺が惡い。何うぞ此の父の罪を許してくれ。」と、子爵の言葉は一語

一語より熱して來た。血を分けた父の口から洩れる其の肺腑を絞つた眞情の聲に、秋夫の感情は次第に昂奮して、皮膚の薄い白い顏には血の氣が潮してぽつと赤らんで、感激に輝いた眼には自づと涙が浮んで來た。

「お父樣、貴方は矢つ張り、お母樣のことを思つて居て下さいますか。」

「お母樣？」と、子爵は驚いたやうに、其の言葉を繰返して叫んで、秋夫の顏を眺めたのである。

「えゝ、お母樣です。——私を生んで戴いたお母樣です。」

「おゝ、秋夫！」と聲が顫へて、「俺は思つとるぞ。——お母樣のことを思つとるぞ！」

「憐れなお母樣です。何うぞお願ひですから忘れないで思つて上げて下さい。」

「あゝ、忘れるものか！」

「本當ですか。」

「本當だとも！　俺はな、此の世の中でお前のことゝ、お前のお母樣のことゝを一番思つとるのぢや。」

「お父様！」

「秋夫！」

二人は犇と相抱いた。——あゝ、十何年來未だ曾て覺えぬ温かな親子の切なる愛情が、此の時初めて本當に二人の胸に流れ合つた。

「お父様。」と、やがて恍とり顏を上げると、秋夫は云つた。

「何ぢや。」

「僕は嬉しいんです。何だか胸の底にあつた塊が消えたやうな、すつきりした氣持になりました。僕は……僕は……屋敷に居ても、自分を生んで戴いた母を、人並にお母様と呼ぶことが出來ないで、召使かなぞのやうに久世々々と呼捨にしなければならなかつたのが、どんなに情けなかつたでせう。——今、お父様の前でさう呼ぶことが出來るやうになつたので、こんな嬉しいことはありません。」

「皆俺の誤りであつた。——今にして其の二十年の誤つた生涯の夢が醒めたのぢや。」と、子爵は感慨深く云つたが、自ら嘲けるやうに苦笑ひして、「しかし遲かつた。お前は此の儘何うしても邸へは歸つてくれぬと云ふ。久世は何處へ行つたか行方不明。俺は一體何うしたら好いのぢや……」と、狂ほしく云ふ。

「え！　お母様が行方不明ですつて？」と、秋夫は撥かれたやうな喘んだ聲を立てゝ、顏の色は見る〳〵さつと變つた。

「うむ。」と呻くやうに云つて、「此のことはお前に知らすまいと思つとつたのぢやが、今となつては隱す必要もあるまい。お前、お母様は五日前から行方が分らなくなつたのぢや。——尤も、それ迄に暇を取つて邸は下つとつたのぢやが、其の日急に姿が見えなくなつたと云うて、深川の實家から邸へ尋ねて來た。俺も心配して心當りは手廻をしとるが、未だ何の手懸りもないのぢや。」と、嘆息した。

「で、行先は未だ分りませんのですね。」と氣遣はしさうに云つてがつくりとしたが、急に何かを思ひ當つたやうに指を繰つて見た。「五日前と云ふと恰度此處へ入らした日だ。——ぢやあれがお別れであつたのだ。」と獨言のやうに云つて考へ込んだ。

「何、久世が此處へ來た？」

「えゝ。」

「些とも知らんかつた。——そいで、何か云ふとつたか——？」

「えゝ、東京から迎へが來たら邸へ歸れつて、くれ〳〵も仰言いました。」

「ふむ。——お母樣は矢つ張りお前の身を案じとつたのぢや。」と、呟くやうに云つて、溜息と共に腕を組んだ。

二人は其の儘默つて相對した。能く晴れた青い空に、建立を急ぐ手斧の音や鉋の音や、材木の響などが高く響き渡るのが朗らかに聞えた。

「お父樣。」やがて秋夫は、何事をか深く決心したものゝやうに斯う呼んで、父の顏を眤と眺めた。

「何ぢやな。」

「僕、邸へ歸ります。」と、秋夫は躊躇もせずにキッパリ云つた。

「何、邸へ歸つてくれる！」さう云つた子爵の顏には、見る〳〵歡喜の色が一ぱいに溢れて來た。

秋夫は冷靜に、

「ですが、僕お願ひがあります。」

「どんな願ひぢや。何でも云うて見るが好い。——お前が歸つてくれるなら、俺はどんなことでも聞くぢや。」

「外ぢやないのですが、僕にお母樣の行方を搜さして貰ひたいのです。行方が分つたら何うぞ邸へ呼んで僕と一緒に暮さして下さい。——そして、僕にお母樣と呼ばして下さい。さうすれば、僕、外に何の望みもありません。」

子爵はそれを聞いて暫く考へたが、やがてキッパリと、「誓つて、さうさせよう。」

「あの、許して下さいますか。」

「あゝ、お前の希望通りに任せよう。」

「さうなれば、僕も漸く人間らしい日が送れるのです。——お父樣、僕は邸へ歸ります。」

「それで、俺も何より安心したぢや。——なあ秋夫！　之からは決して華族とか、家

名とか、そんな下らん空名の爲めに、生きたお前に愁い思ひをさせるやうなことはせんぞ。な、安心するが好い。」

「お父様！」

子爵は秋夫の手を屹と握つて、「秋夫、之れでお母様の行方さへ分つてくれゝば、俺は最う死んでも好いやうな氣がするぢや。ハ、、、、、。」

其二

「姉や、若様は東京さ歸らつしやるだとよ。」

裏口からのつそり入つて來た音次は、斯うお澄に向つて云つた。

「え、若様がいよ〳〵お歸りになるのだつた？」

お澄は、明日は自分等も此處を立退かねばならぬ身の、手薄な道具などすつかり始末して、久世と一緒に會つたあの日から未だ一度も顏を見せぬ秋夫に、此處を去るまでにはせめて一目なりとも會ひたいものと、心ではそれのみを只一つ繰り返して念じつゝ表の外口にぼんやり立つて、眼は的もなく西日に光る海を放然として眺めて居たが、音次の言葉にはつとして振り返つた。只さへ白い顏の色が、絶えぬ苦勞と憂き戀の惱みとに少し蒼味を帶びて、長い睫毛を稍々伏し目に、打沈んだ面ざしの匂はしさ！　ほんにそれは、青柳に霞罩めたる風情にもたとへやうか。

「俺ァ今、船着場で會つたゝによ。」

「え、船着場で？　ぢや――今日お歸りなさるの？」と、さつと顏色が變つて、息が喘んで來た。

「何だか知らねえだが、髭の生えたえらく立派な旦那とな、一緒に船着場で話しいして御座らつしやつたゝ。好い着物を着てよ、俺アはあ若様でねえ外の立派な人だと思つて見とつたゝが、其の人が俺の傍へ來てな、音次と小せえ聲で呼ばれたで、俺ア打つ魂消て能く見たら若様であつたゝによ。」

「あの、若様がお前の名をお呼びなすつて……そして何とか仰言つたの？」

「あゝ、云つたゝ。」

「音さん！　聞かしておくれ、何と仰言つたのよ。」と、お澄は思はず一足進むと、急き込んで聞くのであつた。

「何でもいろんなことを云つたゝ。姉やのことばかり云つたゝが……俺や、兄やのことは些つとも言はなかつたゝ。」

「私のことばかり……。何と仰言つたの？」と、急に眼が輝く。

「あの……あの……身體を大事にしろつて……」と、何か遠い昔に忘れ去つたことでも思ひ出すやうな眼付をして吃つたが、後は言へない。

「まあ、焦れつたいのねえ。」と呟いて眉を寄せた。しかし、又思ひ返して、「それから何と仰言つたの、思ひ出して御覽。」

「未だ云つたゝ。父が……いや父でねえ、何とか云つたな……さうそ、お父様が迎へに來たので一緒に邸へ歸るから、姉やに遊びにお出でつて。」

「あゝ、若様はいよ〳〵お邸へお歸りになるのかねえ。」と、溜息と共につく〴〵と云つた。——今、別れて了へば最早や生きた中には會はれるか、會はれないか——會はれる望みは恐らくあるまいと思はれる永久の別れである。せめて一目なりとも會ひたいと之れ程迄に思ひ詰めて居たものを！　あゝ、其の人は遠い都の空へ歸つて行くと云ふ。お澄の胸は息苦しいまで迫つて、泣かうにも涙は出なかつた。

「そしてな、姉やにも會つて歸りてえのだが、會つて居られねえからつて……。」

「え、私に會ひたいつて？」と撥かれるやうに立つて、「姉さんは一寸船着場まで行つて來るからね、お前は留守をしとつて頂戴。直ぐ歸つて來るからね。」

お澄は咄嗟の間に心を決めて、氣急しく斯う云ふと、うか〳〵して居ては出帆の時間に間に合ひさうもないので、姿を整へる間もなく急いで出て行つた。

「ハハ、、、……姉やは矢つ張り若様におつ惚れてるだあ。——ほんに戀の病ひだによ。」と、うつかりと棒のやうに突つ立つて、ニヤ〳〵笑ひながら後姿を見送つて居た。

お澄は我家を出ると、一散に汽船の發着所へと急いだ。七八丁隔つて居るので、歩

いて居る間にも若しや船が出て了ひはすまいかと、そればかりが氣になつた。生憎港へは見透しが利かぬので、發着所の前にひら〳〵飜へる少し煤けた旗を目的てに急ぎ切つて歩く中にも、道々汽笛の音にのみ耳を傾けた。そして、荒物や煙草を小商ひして居る店の角を曲つて、漸う〳〵其所へ着いた時には、額から、脊から、びつしよりと汗に濡れて居た。

しかし、其の時は最う遲かつた。人の去つた後の發着所の待合室はがらんとして、徒らに寂しい。海に眼を放つと艀は最う二三段も沖に漕ぎ出して、遙か先に淀泊した本船に向つて勢ひ好く二挺の櫓は押されて居るのであつた。——元より東京通ひの船が郵便物と僅かばかりの荷物とを積込む爲めに、一日に一回づゝ一寸寄港するだけの小さな港なので、客は一人二人乘る時もあれば、又、乘らない時もあつた。それで、それとはつきり人の顏形の見分はつかないけれども、確かにそれらしい姿をお澄は見遁さなかつた。此の間會つた時までの何となく淋しい中にも心惹かれるやうな腰衣の貧しい姿と變つて、物は分らないけれども浴衣に袴を穿いて、鍔の廣い麥藁帽子を頂

いて、艙の方に後ろ向きに立つて居る。其の浴衣と麥藁帽子の白いのが、何等蔽ふものもなくかつと照りつけて油のやうな波の上に反射する夏の光線に輝いて、眼に痛みを感ずる程眩しく見える。それと向ひ合つて立つて羽織を着たのは子爵で、最う一人種島の姿も見えた。

「あゝ、一寸の違ひで少し遲かつたわね。」と、深い失望の溜息は自然に洩れた。——我が此の眼には若樣のお姿がはつきりと分つて居る。けれども、あゝ、斯うして一目會ひたいと若樣のお後を慕つて、此所まで駈着けた自分の此の哀れな姿は、恐らく若樣のあの眼には映るまい。況して此の心、此の想ひが、あゝして歸つて行く若樣の心へ何うして傳へることが出來よう。若樣は……若樣は……私のことは何にも知らず何にも思はずに、此の伊豆の國には何の思ひ殘すところもなしに子爵の世繼として華やかな花の都へ歸つて行くのである。さう思ふと秋夫と自分との間は、最う近寄ることも出來ない千里も萬里も遠い隔りが出來て了つたやうに思へて、我が身の運命が消えも行きたいやうに心細く儚なかつた。艀は見る〳〵中に次第に離れて行く。斯う

して一秒ごとに自分と若様との身は次第に遠く隔つて行くのだ。衷心から湧き上つて來る悲哀と嘆とは、大きな波のやうな力で胸を壓して來た。若し人目がないものならば、此の儘此の砂の上に倒れて思ふさま泣かずには居られないやうな心持である。お澄は切ない胸を屹と兩手に抱くやうにして、凝と忍んだ。

舟が親船の腹に横着けになると、眞先に子爵の姿は艙窓に隱れて、秋夫の姿も其の後に續いた。そして、僅かしかない荷物は瞬く間に積み込まれて了ふと、凄まじい汽笛の音は狹い港内の靜かな夕暮の空氣を搖つて長く響いた。其の響が陸に連つた山や、遠い沖の方に殘つて未だ消えない中に、黑い大きな船體はくるりと廻つて進路を定めると、ゆる〳〵と進んで行つた。見る〳〵速力の早まつて行く汽船の烟筒から吐き出す黑い煙は、一錬の鋺のやうに風ぎ切つた青い海面に細長く棚引いて、船の姿は遙かの沖に次第に遠く小さくなつて行く、目の當りそれを見て居るお澄の心は、切ないと云ふよりも寧ろ痛かつた。悲しんでも、怨んでも、泣いても、盡きることのない其の悲みと、怨みと、嘆きとは、大きな渦卷のやうな力で烈しく胸の中に狂ひ立つた。細い肩を刻んで見送つて居たお澄の眼には、抑へても〳〵せぐり上げて來る涙が何時かの間に一ぱい溜つて、汽船も、海も、陸も、只一色の彩もない灰色にぼうつと霞んで、何の見分もつかなくなつて居た。そして、其の細そりとした優しい姿を、後ろから浴びせて來る赤い夕日の光りは濃い陰影にして、白い砂濱の上になよ〳〵と長く落した。遠淺になつた砂濱にひた〳〵と押し寄せて來ては靜かに碎ける男波女波は叮くやうな音を立て、遠くまで續いた渚々を白い帶のやうに隈取つた。そして、嚇と正面に低く射し付ける夕日の赤い光りは海一面をキラ〳〵、キラ〳〵と燃えるやうな黃金色に眩しく輝かして、其の果ての遠い沖には一抹の群青を一刷毛刷いたやうに、大島の姿が微茫として望まれるのであつた、しかし、お澄の眼にも心にも、其の美しい景色は映らなかつた。

やがて涙に濡れた眼を振り上げて、汽船の行方を追つた時には、あゝ、戀しい人を乘せた其の船は、遠い〳〵沖に、只黑い點のやうにポツチリと見えるだけであつた。深い絶望はお澄の心を襲つた。何うしたら好いのか——何をすることも分らない。

一層、眼の前にある此の大きな海に身を投げて……とも思つた。あゝ、しかし、それも出來ない身なのである。お澄は遣瀬なさにほゝと火のやうな太息を吐くと、前後の分別もなく砂の上に崩折れた。

「おゝ、惣太とこのお澄でねえか。」

「やあ、お澄が泣いてるだあ。」

「若樣が歸らつしやつたで焦れてるだわ。」

「へッ、及ばぬ戀だによ。」

「惡黨の妹でも人間樣に惚れるだかね。」

「身の程も知らねえ。」

何時の間にか其の邊から集つて來た三四人の若い衆が、こんなことを口々に云つては、どつと囃し立てゝ嘲笑つた。しかし、それが耳には入らないのか、お澄は身動きもしなかつた。日は何時か落ちて了つて、冷たい夕風は鬢のほつれをそよ〳〵と淋しく嬲つて行く。——お澄は、何時までも〳〵起きようとはしなかつた。

第六章

「姉や、腹が減つたなあ。」

「今、最う少し行けば町があるからね、そしたら何うかして上げるから辛抱してお出で。」

「俺ア最う動けねえだ。——昨日から御飯一粒も食はねだもん。」

「それはね音さん、お前も嘸お腹が空いたらうけど、姉さんだつて矢つ張同じなんだから、最う少し忍耐しておくれ。——お前さん男ぢやないか。」

「うむ。男だつて矢つ張腹が減らあな。——あゝ、御飯が食へねえなら、水でも飲みてえなあ。」

「何も食べないで、そんなに水ばつかし飲んでは、猶苦しくなるからお止しなさいね。——今に何うかするから……。」

「姉やは今に〳〵つて云ふばかりで、昨日から……。」

「あゝ、姉さんが意氣地がないばかりに、お前までこんな目に會はせるのだわねえ。——茶店を追ひ出されてから行く處もなく、こんな乞食になつたのも、皆、姉さんに甲斐性がないからだ。何うぞ勘忍しておくれね。」と、そつと涙を拭ふ。

「姉や、何うして皆の人が姉やと俺には、御飯も何もくれねえのだかな。」

「そんなことをお言ひぢやありません。お父さんや、兄さんがあんなになつたのも、皆、私やお前が可愛い餘りになつたことだからね。音さん、お前と姉さんが斯うして苦しい思ひをするのは、之れで少しづゝでもお父さんと兄さんの罪を輕くする、罪滅しだとさう思つて辛抱しておくれ。」

「辛抱はするだ。するけれども腹が減つちや辛抱が出來ねえだもの。」

「あゝ、聞分がない、男のやうでもないのね。」と、ほつと太息をして、「そんなに聞分がないことを云つて、姉さんを困らせると、今度兄さんに逢つたらさう云つて叱つて貰ひますよ。」

「兄やに叱られたら俺ア困るだ。——俺ア兄やが一番恐ねえだ。……だけどな、叱られても矢つ張兄やに逢ひてえなア。」

「世間からは、鬼の、惡黨のと云つて憎まれる兄さんでも、お前はそんなに戀しいかねえ。——矢つ張兄弟だわねえ。」

「だが姉や、姉やは何うして華族樣のお嫁にならないのだへ？」と、姉の顏を覗き込む。

お澄はそれを聞くと、ぽつと兩の瞼の邊りを赤く染めて、長い睫毛を面恥さうに屢瞬いたが、「そんな……そんなことを云つて……人に聞かれたら何うするの。馬鹿なことを云ふものぢやありません。」

「だつて姉や……」と、愚鈍な顏にニヤ〳〵と笑つて、「俺ア聞いてるだ。——そら、病ひで姉やは若樣のお嫁さんになるだつて聞いたゝ。姉や、若樣におつ惚れてるなら、俺ア お邸へ行つてさう云つて來べえか。」

「まあ、何を云ふのよ。」と赤くなつて嗜めたが、ほつと幽かな溜息を洩らして、「あゝ

そんなこと誰に聞いたのか知らないけれども、若様には私の心がお分りになる筈はなし、縱しお分りになつても、卑しい身分の上にあゝ云ふ兄の妹であつて見れば、何うなると云ふ望みもないのだわねえ。――一層、私は死んで了ひたい。」と、投げるやうに云つた。

「姉や、おつ死んだら生命がなくなるだによ。」

「私も、お前のやうな暢氣な者に生れて來ると好かつたわねえ。」と儚なげに云つて疲れた眼を上げると、恍とりと遠い行く手を眺めるのであつた。

三島から沼津に續く街道は、恰度酒布でも延べたやうに細長く續いて、青い空から落して來る眞夏の鋭い光りは、其の道の上にも、畑の上にも、遠くに見える山の上にも、キラ〳〵、キラ〳〵と恰かも白い焔の燃え立つやうに輝いた。――お澄は弟の元氣を勵ます爲めに、口では強いことを云ふやうなものゝ、しかし、昨日の晝から一粒の飯も口にせぬ上に、烈しい日光が頭の頂から眞つ直ぐに降り注いで來る、道を朝早くから歩いて來た――饑ゑと、暑さに身體は全で綿のやうにへと〳〵に疲れ切つ

て、遠くまで續いた道の上に白く光つた日光の燃えて居るのを見たゞけで、最う眼が眩んで、危くクラ〳〵と倒れさうになつたのを、漸う〳〵踏み止まつた。――最う一足も踏み出す元氣がない。

「音さん。」と、行手の松並木を指して、「彼處まで行つたら休みませうね。――最う一息だから元氣をお出し。」と、弟を元氣づけると共に自ら我が心を勵まして歩き出した。頭には菅笠を頂いて、白い手甲に白の脚半、足を寄せた靈所々々の印を捺した、白い酒布の經帷子も少し汚れて、負笈を斜に脊負つた二人が白日の中をトボ〳〵と行く、其の巡禮姿が、哀れにも物淋しい。

あゝ、それはお澄と音次の變つた姿であつた。父と兄との報いに村を追はれ、愚かな弟を抱へて身を置くに處のないお澄は、人の世の情けの酷さ、冷たさを嘆き、秋夫が邸に歸つた其の絶望を慰める由もなく、我が運命の儚なさ、頼りなさを沁々と感じて、一には父母の後生を弔ふ爲め、二には兄の罪滅ぼしに斯うして諸國の靈場をたづね巡らんと決心したのだ。食ふに食物がなくて一日も二日も食はずに居たこともある。

眠るに所がなくて、野に寢たり、山に寢たり、又或る時は人の軒端に寢たり、愚かな弟を庇ひつゝ漸う〳〵此所まで辿つて來たのであつた。

やがて二人は、松並木まで辿り着いた。太い松の黑い幹は道の兩側にすく〳〵と立つて、見上げる頭の頂には細かい枝や葉が茂り交したので、日の光りも通さぬ。樹下の砂土は松の落す露に冷々と濕つて、僅かに梢を洩れる光線は其所此所に細い縞目を引いて落ちて居る。——涼しい風はそよ〳〵と通つて來て、頰を嬲り汗に濡れた肌に快く觸つて行く。

「さア、音さん、此所で暫く休んで行かうねえ。」

さう云つてお澄は、殆んど倒れるやうに大きな松の根方に腰を降すと、切ない溜息をほつと吐いた。

「姉や、ほんとに涼しいだな。」と、音次も其の傍に腰を下した。

道傍から傾斜になつた濱まですつと小松の並木が密に繁つたので遠く見通しは利かないが、それでも樹の間越しに淺葱色の海の面がチラ〳〵と見えて、潮の音が夢のやうに聞えて來た。それを聞いて居る中に、二人とも苦しい旅の疲れに、何時ともなしについうと〳〵と眠り入つて了つた。

「秋夫、お前疲れはせんかな。——別莊を出てから最う三里餘りは歩いたらう。」と、先に立つた六十年配の立派な老紳士は、後に從つた色の白い上品な十六七の青年を振り返つた。

「いゝえお父樣、些とも疲れはいたしません。ほんとに今日はあんな好い景色を見せて頂いて、大變愉快でした。」

「さうか、それは好かつたな。——此方の別莊にはお前餘り來なかつたが、それでも幾度來たことがある？」

「三度ばかりしか來たことありません。」

「それで、五の谷は今迄見たことはなかつたのぢやな。」

「はい。絶景だと云ふ噂は聞きましたけれども、遂ひ遠いものですから、行つて見ませんでした。――今日初めてです。」

「さうか。――しかし、お前と一緒に斯うして散歩するのも久振だで、私も何だか氣がのんびりして來た。今ではお前も表向き立派な相續人なんぢやから、姉様が何と云つても腹を立てないやうにしてくれ。」

「なアに、お姉様の仰言ることなど、僕は何とも思つて居やしません。けれどねお父様、何うぞお母様を早く尋ね出して邸へ呼んで下さい。」と青年の眼は潤む。

紳士も暗い顔をして、「うむ。俺もいろ〳〵手を盡して居るのだが、何分手懸りがないので當惑しとるぢや。――しかし、其の中には屹度分るだらう。」

「ですが、お母様は何故家出などなすつたのでせう。」

「さう聞かれると、俺も面目ないのぢや。――能く分らんが、邸を下つて家に歸つて見ても、世間の手前、又家族の手前、云ふに言はれぬ切ないところがあつたのだらう。何分あゝした内氣な思ひ遣りの深い性分だから……。」

「しかし、生命に別條があるやうなことはないでせうねえ。僕……僕はそればかりが氣になりまして……」と、憂はしさうに眉を伏せる。

「大丈夫、そんなことがあるものか！」と強く打ち消したが、「おゝ、此の松並木まで來れば最う直きだ。そんなことは思はないで、さあ、早く別莊へ歸つて緩くり休むとしよう。」

「きよや、ゆきや、荒川など、あんなに遲れて了つて……」と、二三十歩遲れて、何か笑ひさゞめきながらぶ〳〵來る女中や、書生の群を見返つたが、突然、「鳥山さんは大丈夫でせうな。」と、不安さうに聞く。

「大丈夫だとも、あの男は昔からあゝ云ふ物好きな男だから、いづれ直ぐ後から來るだらう。」

「さうでせうね。――あゝ、最うこんなに日が傾きました。」と、樹の間越しに洩れて來る眞赤な日射しを眺めた。

「おゝ、最う夕方になつたぢや。」

長い間眠り込んで居た音次は、其の聲に偶と眼を醒して、青年の姿を見ると、思はず跳ね起きて走り寄つた。

「やあ、若樣だ。お寺の若樣だ。——若樣、一寸待つて下せえ、姉やが用があるだ。」

「おゝ、音次か。」

「若樣、俺アとこの姉やがおつ惚れてるだつて……。」と、音次は遠慮もなく傍に寄らうとするのである。恰度其所へ追ひ付いて來た書生の荒川は其の有樣に驚いて、

「何だ、乞食の癖に失禮な。其處退け。」と音次を突き退けた。

それ迄すや〳〵と眠つて居たお澄も、其の騷ぎに、漸う〳〵眼を醒した。と、夢の間も忘れることなく其の美しい姿の幻に戀ひ焦れた戀しい秋夫が、我が眼の直ぐ前に立つて居るではないか。偶と眠つた晝寢の夢ではないか——あゝ、夢にしてもこんな嬉しいことはない。

「おゝ、若樣！」と、嬉しさの餘り思はず叫んで、駈け寄つた。

「お澄か。」

「若樣！」

「何だ女乞食か、近寄つちや可けねえ。——捻り潰して了ふぞ。」と、事情を知らない荒川は、荒々しく突きのけた。纖弱いお澄の身體はよろ〳〵とよろけて、危く轉ばうとしたのを漸く踏み止まつたのである。

「何だ。姉やをひどい目に逢はせるだと、兄やを呼んで來るぞ。」と、音次は眼を剝いて、拳を握り固めた。

「さア、若樣。汚なう御座いますから彼方へ參りませう。」と、女中どもは進まぬ秋夫の手を取らんばかりに引つ立てゝ向ふへ連れ去つた。——秋夫は、何事をか云ひたさうに幾度か振り返り勝に、心弱くも女中達に引つ張られてしほ〳〵と行くのであつた。

一人後に殘つた荒川は、白地紹の袖を卷つて、

「お前達、乞食の分際で、若樣の傍へなぞ寄つて見ろ、此の荒川が柔道三段の腕で投げ飛ばして了ふぞ。」と嚇し付けて置いて、先に行く人々の後を急いで追つた。

「おゝ、若樣……。」

凝と其の後を見送つて居たお澄の口から、絹を裂くやうな悲しい叫び聲が擧げられると、胸を押へて其所にばつたりと倒れた。顏の色が眞蒼になつて、血の氣が褪せて紫色に變つた脣を、白い美しい前齒に屹と噛んだ。

「姉や、死んぢや厭だ。俺が若樣を呼んで來るだで、生きとつてくれよ――。」と、音次は、お澄の周圍をくる〳〵と廻つて居た。

其二

日が暮れると、水のやうな月が凉しく中空にあつた。紺青色に澄み渡つた空には白銀色の星がチラ〳〵瞬いて、薄白い乳色の光りは空にも地にも一ぱいにぼうつと流れた。冷々とした夜氣が冷たく漂つて繁く露を置いた四邊の草叢には、さま〴〵な蟲の歌が絶え間なく聞える。晝でさへ人通りの乏しい街道筋は、さながら無人の境のやうにひつそりとした。濱に鳴る波の音が緩かに即えて來る。

やがて、遙か向ふから一人の巨漢が月の光りを滿身に浴びて松原に差しかゝつて來た。帽子も被らない髯面から足の先にまで青い月光が水のやうに流れて、粗末な着物は水分を多量に含んだ海邊の夜氣にしつとりと潤つて居た。何氣ない樣子をしては居るものゝ何物かを憚るやうに鋭くなつた神經を絶えず前後に配つて居た。そして、松並木に入ると立止まつてほつと太息を吐き、行手を透して眤と眺めた。淡い月の光りでは樹下は暗くて見通しは利かないが、人の氣勢もなくひつそりして居るので漸く安心したらしく足を早めた。

と、未だものゝ二十歩とも歩かない中に、突然兩側の樹の間から二人の男がバラバラと飛び出して來た。

「少々ものを伺ひたいですが。」

「……。」

呼止められた先刻の巨漢はぎよつとして振返つたが、直ぐに何氣ない風を裝つて、其の儘默つてすた〳〵と歩き出した。――闇から出た二人の人影は小急ぎに其の後を

追つた。

「一寸お待ちを願ひます。」と、再び聲をかけた。

「……。」默つて立止まつた。——其の鋭い眼は油斷なく相手の擧動を睨むやうに伺つた。

「暫く何うか……。」さう云ひながら後の二人も油斷なくぢり〳〵と詰め寄つた。

「私ですか……？」と初めて口を利いた。

「お前でなくて誰に用がある。」

「石山惣太、御用だ。」

二人はさう聲を掛けると、巨漢を眼がけて飛鳥の如く飛びかゝつた。

「何をするか！」と、巨漢はぱつと體を開いて屹と身構へた。

「御用だ、神妙にしろ！」と、再び飛び付いて來た小男の身體は、忽ち投げ飛ばされたのである。

「御用だぞ、神妙にせい。」

「氣の毒だが、私は未だお前達の手に捕まるわけに行かん。」

「何、最う遁れる道はないぞ。神妙にせい。」

「ハ、、、、。」と物悽い聲に高く笑つて、「此の惣太に指一本でも觸つて見ろ、手前達の身體は宙にぶつ飛ぶだぞ！」

「何つ！」

人氣もない夜の林の中に、油斷を見透して逃げようとして居る者と、それを捕まへようとして居る者と、睨み合つた三人の迫つた息ざしは凄まじく氣勢ひ立つた。

と、遙か向ふから謠曲を謠ふ聲がひつそりとした夜氣を震はして朗々と聞えて來た。

幾夜とも、限はいざや白雲の、八色たつなる國なれや、月も出雲の神集め、猶數添ひて八重垣の、隔はあらじ神人の、賴む惠のいく時雨、色も榮ゆくもみち葉の誓ひや心淸むらむ……。

それは正しく神在月の一節であつた。其の一節に興を催ほしたやうに、繰り返して謠ひつゝ次第に近づいて來たが、並木の中に入ると共に其の聲はぴたりと止まつた。

――只ならぬ氣勢に耳を傾けて向ふを屹と透して見たのである。そして、少し離れた先に三四人の人影が入り亂れて立廻つて居る有樣を認めると、すか〳〵と近づいて行つたが、

「暫くお待ち下さい。」と、大きな手を上げて躊躇もなく制した。

「貴方は何ですか。」と、一人は詰問するやうに云つた。

「俺か、俺は佐原子爵の別莊に滯在して居る鳥山則人と云ふ者ぢや。」

「それではあの鳥山中將閣下で……？」と、半ば疑ふやうに、其の粗末な浴衣がけの姿を眺めるのであつた。

「あゝ、鳥山ぢや。――しかし、貴方々は？」

「私どもは沼津署の刑事ですが、今、此の罪人を捕縛するところです。」

「はあ。――此の者は罪人ですか。」と、夜目にも分る惣太の非凡らしい面魂をつくづく眺めて、「さう云ふことなら俺も加勢ぐらゐしませうが……一體、何う云ふ犯罪かの？」

「いや、お話にならん惡漢です。强盜、殺人、放火など伊豆から靜岡地方にかけて荒し廻つて居る石山惣太と云ふ奴です。」

「ふむ、石山惣太と言へば新聞でも見たことがある。立派な惡徒ぢや。――しかし、一寸お待ち下さい。出來得べくば怪我などのない方が好いぢやで、俺から說諭して縛に就かせよう。それで聞かなければ、是非に及ばんから、腕力でも何でも用ひねばならんが……。」

「いや、折角の御厚意ですが、何うか、お控へ置きを願ひます。」

「しかし、穩便に若くはなしぢや。――お待ちなさい。」と二人を宥めて置いて、一歩惣太に近寄ると、「こら、貴樣は餘程の惡徒のやうだが、何うだ、俺の云ふことを聞いてくれんか。」

「……。」

默つて、ギロリと光つた眼に鳥山の姿を見詰めて居た。

「默つて居つては困る。何うだ、俺は海軍中將鳥山則人と云ふ者ぢや。貴樣も隨分人

を殺したと云ふ話ぢやが、未だ〳〵私には及ばん。俺は軍艦の上で何千人の人間を殺したか數へ切れん。何ぼ貴樣が惡徒でも、俺には叶ふまい。まあ、貴樣も俺も同じ人殺し仲間ぢや。仲間同志だから仲好くしようぢやないかのう。」

「煩さいなア。――さあ二人の奴等、此の惣太が捕まへられるものなら捕めえて見ろ、……手が出せまい。――手が出せなければ引つ込んで見て居ろ。」と、二人を屹と睨んで、今にも飛びかゝつて打倒さんづ勢を示した。

「こら、待て。」と大きな手を擧げて制して、「貴樣も惡人の癖に存外度胸のない奴ぢや。話に聞けば貴樣も是迄惡事の有丈を仕盡して來たやうだが、何うだ、可い加減で最う惡人商賣も飽きが來やせんかのう？」

「飽きが來やしないか？　ハ、、、。」と嘲笑つて、「生命のある間は惡事の限りを仕盡して世の中の奴等ア困らして遣るのだ。俺は決して飽きはしねえだ。」

「飽かない？　面白い。其の覺悟があるなら遣れ〳〵。飽くまで遣るが好い。」と、つく〴〵惣太の面付を眺めて、「だが、貴樣も生れながらの惡人ぢやあるまい？」

「俺の親父は泥棒だ。貧に迫つて一合の牛乳を盜んで懲役に行つて、其の上一生泥棒の名に終つたのだ。世間の奴等の憎みはそれでも未だ癒えねえ。殘る三人の子迄が、其の爲めに身の置處がないのだ。――あゝ、其の後は云ふ必要がない。ハ、、、、矢つ張り腹からの盜賊だらう。」と其の悲壯な笑ひ聲は高く響いた。

「ふむ。それでは貴樣の父が一合の牛乳を盜んだ泥棒で、其の僅かな父の罪惡の爲めに、貴樣等兄弟が迫害を受けたのだな。」

「俺も盜賊だ、放火犯人だ、殺人罪人だ。」

「あゝ、氣の毒ぢやのう、父の罪の爲めに其の子までが社會から擯斥される。全く世の罪ぢや。其の爲めに貴樣は心が捩けて反抗心を起し、次第々々に取返しのつかん惡人になり終つたのぢや。」と、嘆息して、「だが、幾ら惡人になつたと云つても、人間には良心と云ふものがある。稀には善人になりたいと思ひ返したこともあるぢやらう。」

「善人にならうたつて、一度惡事を働いた者を世間は決して善人にしてくれねえだ。僅かな罪も一生涯憎んで許さぬえのが世間だ。」

「あゝ、善人にならうとしても世間は矢つ張り罪人扱ひをする。憎み、厭つて相手にしない、其所で益々自暴自棄になつて、遂には改心の機會を失つて次第に深味へはまり、人を呪ひ世を呪つて一生を心にもない苦しい惡人となつて送るやうになる。――今迄のことは貴樣の罪ぢやなかつた、他人の罪惡を責めて許すことを知らない社會の罪ぢや。宜しい許す、逃げて行け。私が逃がして遣る。」

「……。」中將の言葉を聞いて居る中に、惣太の眼からは、熱い大きな涙がホロホロと滾れて來た。あゝ、之た程わけの分つた、温かい眞の人の言葉を世の中の人間から聞いたことは、二十幾年の今日まで決してなかつた。其の一語々々は鋭く惣太の肺腑を突いて、身體はがた〳〵顫へた。――今迄の無明の闇から醒めて、初めて人の世の光りを見た惣太は、遂に聲まで立てゝ泣いた。

「あゝ、貴樣泣き居るか。貴樣は決して惡人ぢやない。――逃げ、逃げて了へ。社會の罪ぢや。」

「いや、逃げません。――何うか捕縛を願ひます。」と、ホロ〳〵滾れる大きな涙を拳

に拂つて、決して動かうとしなかつた。

「逃げろと云ふに――聞分がないな。俺は貴樣に同情するぢや。」

「閣下？」と、感激に喘んだ聲で叫ぶと、最う堪らなくなつて中將の前にひたと手を突いた。「閣下、何うぞ貴方のお手から繩を頂戴いたしたいです。俺は之れ迄天地の間に恐ろしい物は何一つもありませんでした。只、閣下の今の一言が實に恐ろしい。俺は、今迄鬼のやうな世間の奴等に一滴だつて温かい涙があらうとは思ひませんでした。閣下の情けある今のお言葉を聞いて、俺は初めて本當の人間の聲を聞いたやうな思ひがいたします。俺の親父は罪人です。しかし、世間は親父が犯した罪の百倍も重い侮辱を俺等親子四人に加へたのです。一合の牛乳の罪は四人の人間の長い生涯を誤らしたのです。……其の一合の牛乳の爲めに四人の親子は世間を捨てたのです。……」と男泣きに咽び泣いて、暫くは言葉も出なかつたが、「あゝ、最う何も云ひません、閣下、何うか此の罪人をお縛りを願ひます。」と、眼を瞑ると、手を後ろに廻した。

「豪い。見上げたものぢや。今少し早く其の氣になれたら、廼れ國家の役に立つべき

男ぢやつたに……惜しいことをした……。」と、中將も暗然として涙を呑んだ。

惣太が手を後ろに廻して、殊勝に控へたのを見ると、一人の刑事はつか〳〵と進んで、

「さあ、静かにしろ。」と、手早く縛めた。

「あゝ、止むを得ん。——國法ぢや。」と顔を背けて、瞼に溢れて來る涙を手の甲でそつと拭ふと、「では、貴樣も心を入れ替へて神妙にせい。俺は之れで別れよう。」

さう云つて一揖すると、濶歩緩やかに去つた。そして暫くすると、遙かに向ふから、

「幾夜とも限はいさや白雲の……」と、再び先刻の謠ひの一節を繰り返して謠ふ聲が、樹の間を潜つて朗々と聞えて來た。惣太は土の上に蹲つたまゝ、並木の中に相木精する其の聲に、我を忘れてしみ〴〵と聞き入つて居た。

「何時までもぐづ〳〵して居ないで、さあ、歩くんだぞ。」

「はい。」と、後手に縛されたまゝ、よろ〳〵と立上つて、しほ〳〵と引つ立てられて行く。

やがて松林を出外れると、明るい月の光りに、遠くの山や、岡や、林などが仄白く煙つて見えて、可也遠方まで見通しの利く遙か向ふに月の光りを白々と浴びた二人の人影が、縺れるやうに朦朧として見えた。

「姉や、最う一寸も歩けねえだ。——腹が減つて〳〵眼がくる〳〵廻るやうだ。」

「あゝ、頼むからね、最う少し辛抱して……」と、言ひさして眼を抑へると、其の儘其處に蹲まつて了つた。

「姉や、何したゝあ。姉や。」

「音さん、姉さんはな——姉さんは眼が眩んで最う歩けないのよ。」

惣太を引つ立てゝ來た刑事の一人は、その有樣を見て二人の傍へ近寄つた。

「こら、お前達は何をしとるのだ。」と云つたが、顔を眺めると、「あゝ、先刻の乞食だな。何故未だこんな處にまご〳〵して居たのか。」

「はい。」

「何所か惡いのか。」

「はい。」

擦れ違ひざまに惣太は二人の姿を偶と月明りに透して見たが、

「おゝ、お前は……。」と叫んで、其處にぴたりと止まつて了つた。

「おゝ兄やか。——姉や、兄やが……。」

「おゝ、兄さん。」

二人はよろ〳〵と走り寄つて、惣太の身體に縋り付かうとした。しかし、惣太はつゝと身體を除けると、月の光りに顏を背けた。

「いや、俺は知らん。——知らん人だ。お前達が人違ひをしてるのぢやないか。俺は此の通り縛られた重罪人だ。お前さん達が此の俺を兄だなどゝ云つたら、飛んでもない連累を食ひますぞ。滅多なことを云ふものぢやない。」

「それは餘まり……餘りです。私どもは何うなつても構ひません。——兄さん、貴方は未だ改心なさらないのですねえ。あゝ、こんな恐ろしい縄目の恥を受けて……」と、怨ずるやうに云つて、お澄は咽び入つた。

「未だ兄だと云ふのですか。俺を兄だと云つたらお前さんは勿論のこと、其の弟さんまで飛んだことになりますぞ。」と、澄れ出る熱い涙を、あはれ兩手を縛された惣太は拭ふことも出來なかつたのである。お澄は其の一語々々を身にしめてしみ〳〵と聞いて居たが、堪らなくなつて兩手に屹と胸を抑えた。

「しかし……。」と惣太は語りつゞけた。「樣子を見るとお前さん達の兄だと云ふ人も、矢張り惡人らしいが、俺が入獄したら若しや又其の兄さんと云ふ人に逢はないとも限らない。傳言があつたら何でも云ひませう。」

お澄は惣太の心を呑込んで、漸う〳〵涙を拭つたが、「あゝ、難有う御座います。兄さんが家へ歸りました其の翌日、村の衆や長安寺の坊さんなどが來て、あんな物騷な奴が些い〳〵歸つて來るやうでは到底此の村に置くことが出來ないと大變怒られて、到頭二人は追ひ出されてこんなになつて了ひました。けれども、私どもはどんな難儀をしても、兄さんの罪滅しだと思へば何ともありません。——何うぞ兄さんが御改心なすつて、例へ世間では何と云ひませうとも、兄弟三人で睦しく暮すやうになれば、

それが何よりの幸せですつて……。」と、後は涙に咽び入つて言葉が出ない。

「あゝ、さうですか。――お前さんがそれだけに兄さんを思つてる其の心を聞いたら、兄さんはまあどんなに嬉しいことか！　能く分りました。屹度さう云ひませう。」

「妹も弟も、それだけが一生のお願ひで御座います。」

「そんな優しい心根の妹や弟の難儀をして居るのを殘して、此の世からの地獄へ行かねばならぬ兄さんの心はまあどんなでせう。嘸ぞ、熱……熱鐵を呑むより愁かつたでせう。」と、火のやうに熱い息を空に向つてほつと吐いた。

樣子がそれと覺つたけれども、餘りの哀れさに血も涙もない鬼のやうな刑事も流石に大目に見てそれ迄は許して居たが、何時まで經つても果てしがないので、

「最う好い加減で切り上げえ。さあ、急いで歩くんだ。」

「はい、旦那、直ぐ參ります。」と、口ではさう云つたけれども、流石骨肉の哀別に此の場を去り兼ねて躊躇して居るのを、刑事は無理に引き立てるのであつた。

音次は、兄に追ひ縋つて、

「兄やは知んめえが、今度出來る長安寺の鐘の臍にや、兄やの顏が彫つてあるせ。」

「何、俺の面が？」と、惣太は踏止まる。

「鐘拵へる錢を盜んだり、村の家や寺を燒いた惡徒だから、村の衆も寺の人も、皆兄やが憎い兄やが憎いと、百年も千年も其の面あ撞いて腹癒せをするだつて、兄やの顏を撞木を當てる臍のとこに彫つてあるだあ。此の月の十九日は鐘の撞き初めだあによ、賑かだらうに、行つて見てえな。」

「俺の面を彫つて、百年千年の後までそれを撞くんだと？」と繰り返して呻くやうに云つた惣太の眥は見る〳〵上つて、屹と空を睨むと、齒をキリ〳〵と嚙み鳴らした。

お澄は、身も心も疲れ切つたところへ、今日の晝からの重なる心の激動に、纖弱い身には此の時最う堪へられなくなつて血の循環も一時にはたと止まつたやうに胸元が硬張ると、息若しく身を悶へて、苦しい聲を一聲叫んで其所に倒れた。

「あゝ、姉や、しつかりして……」と、音次はお澄の身體を兩手に抱き起した。それを見た惣太は、我を忘れてよろ〳〵と駈け寄らうとした。と、情けのない刑事は聲

を尖らして、

「こら、さつさと歩け！」

「旦那、何うぞ一寸お待ちを願ひます。現在此所に妹……いや、病人が……」

「病人があらうと何があらうと、さうべん〳〵と猶豫は出來ん。愚圖々々言はずに歩かないか！」と聲を勵まして叱咤した。

「旦那、お慈悲です、之れですから何うぞ……」と、手を合せようとしたけれども、あはれ其の手は細い麻繩に固く縛られて居るのである。

「ならん。さあ來い。」

「何うぞ……」と、繰り返して哀願するのを、二人の刑事は荒々しく引つ立てた。其の引き摺られながら次第に遠くなつて行く惣太の後姿を、音次は苦しむ姉の身體をしつかと抱いて見送つて、悲しさうな聲に叫んだ。

「兄や、行つちまつちや厭だ。——兄や、厭だ。」

「おゝ、音次。お澄、身體を大事にしろよ……。」と惣太の聲が遠く聞える。

「兄や。」と、音次は再び叫んだ。

お澄は蒼い顔を上げて、

「音さん。」

「何だ？」

「音さん、あれはねえ……」と、お澄は苦しい聲を振り絞つて、「あれは、お前と私の兄さんではないのですよ。」

其三

惣太は此の儘引かれて行けば、どうせ絞首臺上の露と消えて了はねばならぬ儚ない生命の重罪人である。再び此の娑婆の風に當つて、妹や弟に優しい言葉の一言もかけて遣ることの出來ない情けない身である。しほらしい心根に此の惡徒の兄をあんなにまで思つて居てくれるものを、如何に囚はれの身とは言へ、只一目會つたばかりで

兄弟の名乗りもせずに、此の儘一生の別れになつて了ふかと思へば如何にしても殘り惜しい、遣る瀬ない。あゝ、あの哀れな貧しい乞食の姿——況して別れ際に持病の癪が起つて苦しさうに倒れた儘起き上ることも出來なかつたお澄を、愚かな音次一人で何うしたらう。お澄の身になれば、さぞ愁く心細いことだらう。と、さう思ふと矢も楯も堪らなくなつた。斯うしてのめ〳〵と引つ張られて、永久に別れて行くに忍びない。後髪を引かれる思ひでそれ迄澁々と歩いた惣太の足は、やがて急な阪道を上つて海岸に峙つた崖上に建てられた辻堂の前まで來た時、ひたと止まつて了つた。茫々として際涯もない大きな海の上の中天に月は細く掛つて、沖は仄白く煙つて見えた。

「こんなとこで止まつて了つて、何うしたんだ？　早く歩かんか。」

「少々お願ひが御座います。」

「何だ？」と、さう云つて油斷なく惣太の擧動に注意した。惣太はべこりと一つ腰を折つて、

「何うぞ、一寸の間で宜しう御座いますから、元の處へ歸して下さいませんか。」

「何だ——元の處とは？」と、眉を寄せる。

「實はお隱し申しましたのは、私の妹と弟で御座います。」

「大抵さうと察したから、それで猶豫して遣つたのだが……此の上又引返すことは出來ん。」

「でも御座いませうが、一寸の間で宜しう御座います。俺も久振で逢つた兄弟ですから、綺麗に名乗り合つて、改心するから安心しろと、たつた一言さう云つて安心さして遣りたいのです。」

「そんなことは、未決の中に手紙でも言へることぢやないか。」

「只今別れます時に妹が癪を起して倒れた樣子で御座いますが、弟と云つても御覽の通りの白痴で、妹の邪魔にこそなれ助けにはならん奴ですし、人通りもないあんな淋しい街道で嘸ぞ困るだらうと思ひますから、何うぞ妹の癪が治まるまで、水の一ぱいも飲ませて遣りたいのです。」

「今更此所でそんなことを云ひ出しても仕方がない。——下らんことをつべこべ言つ

とらんで、さつさと歩くんだ。」

「御尤で御座います。けれど俺もは重罪犯人です。此の儘引かれて行けばどうせ刑場で首を縛られるに決まつて居る身體なのですから、後に心の殘らんやうにせめて最う一度妹と弟の顏をしみ〴〵と見て置きたいのです。――兄弟一生の別れで御座いますから、何うぞお情けに一寸でも……」

「そんなことを云つて、逃げようと思つとるのだな。」

「何で逃走をしませう。逃走するくらゐなら初めから尋常に繩にかゝりはしないのです。俺に微塵そんな氣がないことは御存知だと思ひますが――何うぞ一生の……。」

と哀願するのを皆まで聞かずに、「喧ましい。さあ、早く歩け。」と、慳貪に叱り付けた。

「あゝ、こんなに云つても許して貰へないのですかなあ。」と、惣太は溜息を吐いて、

「それでは妹も弟も食ふ物も飲む物もない樣子ですから、せめて私の着て居る此の着物だけでも何うかするやうに脱いで遣りたう御座いますから、何うぞお屆けを願ひたう御座います。」

「出來んと云ふに諄いぢやないか。着物を脱ぐと云つて繩を緩めさせやうと云ふ腹なんだらう。――そんな手をうま〴〵と食はされるもんか。」

「いや、決して逃げはいたしません。」

「惡徒の云ふことを一々信用して居られるかい。」と膠もなく退けて、頭から受け付けない。

「俺がすつかり決心して繩に就いたにも拘らず、未だに疑つて居るのですか！」と、むつゝとした惣太の聲は尖つて來た。

「煩いわ！　早く歩かんか！」

惣太の眼はギロリと光つて、「何うしても妹弟に逢はしては貰へないんですか！」と、鋭く云つたが、又弱々しく折れて、「何うぞお願ひです。――私は罪さへ決まれば明日にも殺される身體です。」

「殺されるのは貴樣の罪の報いだ。――」

「ぢや、何うしても！」と聲が鋭い。

「諄い奴だな、歩かんか！」と、縄を持つた刑事は、惣太の横面を平手でぴしやりと打つた。惣太は「あつ」と云つてよろ〳〵としたが、漸く踏み止まつて、

「奴！」と叫んで、はつたと睨め付けた。「慈悲も情けもねえ蟲のやうな奴等だ。之れ程腰を低くして頼んでも許さねえばかりか、能くも男の面あ打つたな。」と、キリ〳〵と齒を噛んだ。

「打つたが何うした。好い顔をして居れば本職を侮辱して何彼と文句を云つて歩き居らん。命令に從はない以上、職權を以て打つんだ。」

「職權を以て打つ？　ふん、面白えや、手前達のやうな蛆蟲に此の惣太が打てるなら打つて見ろ。――斯うなりや山が崩れて來ても此處一寸も動くやうな惣太ぢやねえのだ！」

「何を！」と、刑事の手は再びぴしりと惣太の面上に加へられた。

「おゝ、見事打つたな。――斯うなれば最う……。」と、獸のやうに叫ぶと、固く縛

られた縄は何時の間にかするりと脱けて、大手を擴げて衝つ立つた。其の早業に相手が、「あつ。」と呆れて居るところを付け込んで、片足上げて力に任して磴と蹴ると、刑事の身體ははづみを打つてばつたり倒れて、ころ〳〵と轉ぶ。續いて最う一撃を加へると、小さい身體は一たまりもなく轉り乍ら深い崖の底へ落ちて行つた。

「此の野郎！」と、最う一人の奴が組み付いて來るのを、惣太は滿身の金剛力を兩腕に集めて相手の襟首を掴むとブル〳〵と振つた。そして、脆くも相手のひるむところを付け入つて足を上げて胴の邊りを強か蹴飛ばすと、「きやつ。」と異樣な悲鳴を擧げて、之れも其の儘身體は崖の下へ落ちて了つた。惣太は喘んで來る息に肩を刻みながら、足下の深い海を暫く見入つたが、やがて、

「あゝ、妹や、弟に逢ひたいばつかりに、氣の毒なことをして了つた。俺は矢張り惡徒だ！」と、嘆息すると空を仰いだ。――蒼い光りは其の髯面に流れて、物悽く見えた。

やがて、偶と人の話しながら來る物音が耳に入つたので、ぎよつとして振り返つた

が、遙かに朧ろな二人の人影を認めた。と、それを遣り過す間素早く辻堂の中に身を忍ばして息をひそめた。

そんなことゝは夢にも知らない二人の人影は、次第に近づいて來て、辻堂の前まで來ると、「此所まで歸ると別莊は最う直ぐね。」と女はほつとして立止つた。そして、

「あゝ、貴方は餘まり足が早いのですもの——こら、こんなに息が切れて……」と如何にも疲れたらしい太息をほつと吐いて、女と同じやうに立止まつて振り返つた男の手を握ると、そつと單衣の上から自分の乳の下へ持つて來た。

「ね、ほら、こんなにドキ〳〵と動悸がしてるでせう。」

「隨分歩きましたからね。——嘸ぞ疲れたでせう。」

「えゝ、可也。」と、手を放してキラ〳〵と月に煌めく波の上を眺めたが、「まあ絶景ね。」と思はず嘆美の聲を洩らして恍とりとして眺め入つた。海から來る凉しい風は、束髪の廣いリボンをひら〳〵と飜る。

「あゝ、僕も疲れて了つた。」と、男も獨言つて、「何うです、暫く此所へ休んでから歸

りませう。」

さう云つて辻堂の段を顧みたが、つか〳〵と寄つて行つてハンケチで塵埃を拂ふと、自ら先づ腰掛けた。

「だつて、二人だけで餘まり遲くなつて歸つちやまづいわ。」と、女はそれを氣にして躊躇つて居る。

「好いでせう。——お父樣や、あの嚴格家の鳥山も皆で五の谷へ行つたのですから、何うせ歸りは遲くなるに決つてます。未だ九時一寸過ぎたばかしですもの……。立つてないで、お掛けなさい。」

「えゝ、難有うよ。」と、女は氣は急きながらも、それでも男と並んで腰を下した。男は月に白い女の美しい横顏を惚れ〴〵と覗き込んで、

「斯うして見ると、貴女は實に美しいですよ。」と、調戯ふやうに一寸人指指で女のふつくらした頰を突いた。

「お止しなさいよ。」と、女は男の下等な仕科に眉を顰めたが「ね先生、先生と私のこ

とを、皆に感付かれて了つたやうよ。」

「感付かれたつて關はないぢやありませんか。」と、男は一向平氣である。

「だつて私、不斷道德だの宗教だの、そんなことばつかし云つてるんですもの。何だか極りが惡いわ。」

「何に、戀愛は藝術以上の自然だから可いでせう。」

「本當にさうね。」

「それはさうと……」と、男は嚴かな調子になつて、「僕貴女に御相談があるんですが……。」

「どんなこと？」と、女は眼を輝かす。

「今此所で云ふのも變ですが、今迄は人が居たりなんかして機會がなかつたものですから、聞かう〳〵と思ひながら遂ひ言ひ出せなかつたのです。實は、あのことは何うなりました。——早く決めて了ひたいですな。」

「あのことつて、何に？」と、女は會得出來なくて、不審さうに眉を寄せる。

「結婚のことです。」

「結婚……」と冷淡になつて、「私、結婚なぞ急ぎはしなくてよ。」

「急がない？」と反問して女が頷くのを見ると、「何故です。——そんなことを云つて、貴女は結婚をする氣がないのでせう。」

「そんなこと云つても……私はそんなに急がなくても好いと思ひますもの。」

「何故です？」

「公に結婚して了ふと、良人の妻のと、何だか窮屈になるぢやありませんか。それよりか斯うして戀愛關係で居る方が、自由でどんなに樂しいでせう。」

「それぢや、お約束が違ひませう。初めから貴女は僕を弄ぶ氣であつたのですな。」と聲が尖る。

「弄ぶなんて、そんな……そんな大それたことがあるものですか。」

「ぢや、何故結婚が厭なのです？」と男は鋭い語勢と共に詰め寄るのであつた。

「厭だと云ふわけぢやありませんけれど……」と言葉を濁して、「先生は又何故そん

なに結婚々々と結婚をお急ぎになるのです？」

「露骨に言へば子爵家を相續したいからです。」

「まあ！」と呆れて、「そんなことは駄目ですわ。秋夫が還俗して相續することになつたのですもの、到底駄目よ。」

「駄目でせう。――駄目なら第二の條件を果して下さい。」

「第二の條件と申しますと……？」

「再度の洋行費を支辨することです。」

「えつ。――それは少しぐらゐなら私にだつて都合出來ますけれども、洋行費なんて……考へて見て下さい。そんな大金が何うして私の手に自由になりませう。」

「出來なければ仕方がない。――結婚して下さい。」

「そんなことを仰言つても……。」と、當惑して俯向いた。

「貴女が約束を履行して下さらんなら、――貴方がそんなに頼みにならなければ、貴女にお手數はかけません。僕が直接貴女のお父様に一切を打明けて、談判しませう。」

「え、打ち開ける……？」女はぎよつとして、「そんなことを父に打開けられては、私の名譽に係ります。」

「名譽？　だつて僕は何も無いことを言はうと云ふのではありません。有つたことを有の儘に打開けるのです。其の結果が自つと貴女の名譽に拘はらうと拘るまいと、それは僕の知つたことぢやないのです。――貴女の名譽を左右する權利は、僕の掌に握つて居るのですからな……。」

「それは餘りです。」

「何が餘まりです。一體貴方の身分で三千や五千の金が何うにか都合出來んと云ふことはない筈です。それをして下さらないのは、初めから僕を弄ぶ意りであつたのでせう。」

「貴方は、私を脅迫して金を出させるお考へなんですね。」

「脅迫と云ふと語弊があるが、兎も角も僕の目的は爵位か、然らずんば金にあるのです。」

「神聖の愛が何うの、藝術が斯うのと云つて置きながら、貴方こそ卑しい物質慾の爲めに……」

「口ではそりやいろんなことも云ひませうさ。貴女が口では立派な道德とか倫理とか云ひながら、實際の素行は動物と同じやうにね。——人間は何うせ口で云ふほど立派な動物ぢやないのですから……兎に角今幾らか持つてるでせう。それをお渡しなさい。」

「ほんのお小遣ひですわ。——何うせ貴方にせびられるんですから……。」と云ひ乍ら、紋紗織の丸帶の間から赤い琥珀の裏の着いた襦珍の紙入を出して渡した。

男は幾枚かの札を月明りに調べて見て、「たつた四十圓か、之ればかしぢや仕樣ないんだけれど……。」

「でも、私、それが今月のお小遣ひの有つたけなのよ。——貴方に皆卷き上げられて了つて、明日からは一文なしだわ。」

「まあ、こんな愛人を持つたのを不運と諦めるんですな。いづれ又戴きますが、之れだけはお返しいたしませう。」と、中味だけ自分の懷ろに收めて、空の紙入を女に返した。

「弱身につけ込んで餘り些い〳〵苛めないで頂戴。」と女は甘へるやうに云つた。

「僕は一介の音樂師です、貴女には爵位や名譽の大きな背景があるのですから、何うせ貴女の方が苛められても仕樣がないんです。飛だ災難ですね。」と笑つて、「それはさうと、さあそろ〳〵歸りますかな。」と立上つた。

「えゝ、何だか氣味が惡いやうね。並んで行つて頂戴。」と、女も立上つて男の傍にひたと寄添つて、二三歩歩くと後ろから大きな聲で、

「こら、待て！」と呼び止められた。——二人は吃驚して立止まつて振返ると、恐ろしげな髯面の巨漢がのつそりと衝つ立つて居た。

男は震へる足を踏み緊めて、それでも女を後ろに庇ふやうにして、

「貴樣は何だ？」弱味を示すまいと力んで見せた。

「何でもない俺は强盜だ。——今其の女から卷き上げた四十兩の金を俺に渡せ。」

「えつ――。」と、わな〳〵と胴震ひのして來るのを我慢して、「お前なぞに渡す金ぢやない。」

「渡す金ぢやないだと――此の青蜻蛉奴！　小癪なことをほざくな。渡さんとあれば腕づくで渡さして見せるのだ。」と、男の襟首を引つ攫んで膝の下に組み敷いて、恐怖の叫びを上げて逃げようとする女の手首を右の手を伸ばして引つ囚へて、ぎゆうと捩ぢ上げる。――男女は全で獅子に捕へられた小兎のやうに、他愛もなく捩ぢ伏せられて了つた。そして聲を立てることも出來ないで、哀れにもガタ〳〵顫へて居る。

「こら、之れでも金を出さんか！　出さんと貴樣達の身體を此の崖の底へ放り込んで了ふぞ。」

「いえ、〳〵。出しますから何うぞ命ばかりはお助を願ひます。」

「先生、生命には代へられませんから、早くあのお金を渡して……。」と、女も泣聲を上げる。

「何うも苦しくて手が出せませんから、何うぞ少しばかり手をお緩めなすつて……

……。」と、哀れな聲を上げて哀願した。

惣太は男の首筋を抑へ付けた右の手を少し緩めて、「さあ早く出せ。」

「何うぞ生命だけは御勘辨願ひます。」と、顫へながら差出す金を惣太は受取ると、全で子供のやうにくる〳〵と男を後手に縛り上げて、傍の松の根へしつかりと結んだ。

「今度は貴樣、着物を脱げ！」と、女に向つて云つた。

「え、着物を……。」

「脱がんと二人とも生命はないぞ！」

「はい、脱ぎます〳〵。」と、齒の根も合はずがた〳〵顫へながら、帶止めの金具を外し、水色縮緬の春負揚げを解いて一寸躊躇つたが、やがて思ひ切つてさや〳〵と帶を解いた。しかし流石に着物を脱ぐのは如何にしても躊躇はれて、手を止めた。と、

「愚圖々々せずに早くせい。」

恐ろしい聲に嚇されて、しほ〳〵と小波お召の單衣を脱ぐと、白地に涼しい水を描いて、それに赤い捻ぢ紅葉をあしらつた絽縮緬の長襦袢が、夜目にも匂はしく艶めい

て見えた。

「其の長襦袢も脱げ！」

「あゝ、之れまでも……」と、悲しさうに溜息を吐いて、「何うぞお慈悲に之れ一枚だけはお助けを願ひます。」と、祈るやうに哀願した。

「いゝや、可けねえ。——皆、脱いで了へ。脱がねえと生命はねえぞ。」

「あゝ。」と儚なげに溜息を吐いたが、最う絶體絶命である。燃えるやうな緋縮緬の扱帯を解くと、眼を瞑つて思ひ切つて長襦袢を脱ぎ捨てた。香料の匂ひに混つて柔らかな女の肌の匂ひがしつゝとりとした夜氣の中に微かに漂つた。——短かい袖の麻の肌襦袢と、裾前の石竹の模様涼しげな水色縮緬の蹴出しを纏つた女の肌の柔らかな曲線が、月の光りに匂はしく浮いて見えた。女は恥しさうに兩手にひたと顔を蔽うたのである。

惣太は、女の着物を一束ねにすると海に放り込んで、恐怖と、羞恥とに顫へて居る女に向つて、

「お前は佐原子爵の娘だらう。」

「はい……」

「ハ、、、、、いくら華族でも裸にされちや犬ころと違ひないわ。」と、氣味好げに笑つたが、「まあ、暫くはさうして居て、些たあ愁い思ひをするが好い。」と、さう云ひ捨てゝ急いで阪下の方へ引返して行つた。

「先生。」

「おゝ、鞆音さん。」と、後に殘つた二人は、何うしたら好いか途方に暮れた。

第七章

九月も最う半ばを過ぎた。そよ〳〵と着物の袖や裾を煽つたり、草の葉などに呟いて取り止めもなく何處へともなく通り過ぎて了ふ風の輕いのにも、草間に歌ふ蟲の聲の妙に佗びしげに聞かれるのにも、淋しい秋の氣勢が立つた。空は次第に濃い藍を加へて、星の光りも一夜毎に冴えて來る。

明日は彼岸の入の十九日である。長安寺では一度惡魔のやうな惣太の呪の火に燒かれた本堂も、庫裡も、釣鐘堂も、幾多の信徒達の喜捨金と、信仰に燃えた汗と膏と勞力とに、伊豆は言はずもあれ關東有數の大伽藍は再び新しく築き上げられて、明日は恰度彼岸の入の法會を兼ねて、堂開きと、新しく鑄上げられた釣鐘の撞き初めがある。

――あゝ、其の鐘の臍にこそ、此の村、此の寺に惜い祟りを成した惡人惣太の面が彫り込んであるのだ。

村の人々は、最後の仕事たる八百貫目の大釣鐘を、昨日から百人の勞力を費して、今漸く釣り終つたところである。打てばカンと響くやうな檜造りの釣鐘堂の梁に、女の頭髪で綯つた太い繩を以て釣り上げられた其の釣鐘の青黑いすべ〳〵とした青銅の肌には、折から眞直ぐに側面から射し付けて來る夕日の光りをかッと浴びて、燃えるやうに輝いた。其の鐘の臍に彫り込められた惣太の面は、恰度夕日の光りを正面に受けたので、人々の眼を射るやうにキラ〳〵と鋭く光つた。

鐘が釣れたと云ふので明日の日が待たれないで續々と見物に集つて來た近在の老若男女は、釣鐘堂のぐるりを取卷いて、皆此の釣鐘を仰ぎ見た。あゝ、其の肉を食ひ、其の血を啜つても猶ほ慊りない此の村人達の怨みの一念を其の撞木の先端に籠めて、鐘に彫り付けられた惣太の面に當てる時、天に響き、地に響く此の大釣鐘の嫋々たる哀音は、村人の心にどんな誓きを與へるであらう！　物狂はしい其の滿足と歡喜の情は、最う此の鐘を眺めたばかりでも人々の胸に波打つのであつた。――明日こそは……

……明日こそは憎い惣太の面を此の撞木が撞き出す其の響きが聞かれるのだ。と、群

集の血は波立ち搖れて、血走るやうに燃え輝いた人々の眼は鐘に鑄込んだ惣太の面に集つて來た。

「見ろ、能く出來たもんでねえか。酷似だあによ。」

「ほんになあ、あの眼付から、髯の工合まで、寸分の違ひもねえ。」

「此の面に、あの巨え棕梠の撞木が突き當る時にや、どねえな音がするだんべえかの？」

「素晴らしいものだんべ、五里も十里も先まで聞えるだらうよ。」

「さうだらうなあ。——明日の撞き初めの音を聞いた時に、近在の者は一齊に惣太の身の上を呪つて遣るだあな。」

「さうとも！　彼奴の爲めに此の村の者は一軒殘らず家も財産も燒かれて了つたい。孫子の代まで此の鐘の音を聞く度に、惣太のことを想ひ出して呪ふだ。撞木に當る面が擦り減つても、此の鐘が腐つても、惣太の野郎、七生までは浮ばされねえだ。」

「ほんに、惣太が死つても、鐘の音は地獄まで響いて、其の度びに憎い彼奴は苦しい

苛責を受けるだ。」

「生きとる間は此の鐘の音が鳴る度に、何處の空に居ても、彼奴の魂の底まで響かずには居ねえ。——家を燒かれたばかりか、私等が佛樣まで燒かれた皆の怨みの思ひが、鐘の音に籠つて響くだあもんな。」

「何しろ、好い見せしめだ。どんな奴でも惡人は、善道には何うしても勝つことの出來ねえ生きた手本だ。」

「明日の撞初めを聞いたら、すうつと胸が輕くなるだんべえ。——まあ見さつせえ。」

と話頭を變へて高く中空に聳えた堂宇の棟を見上げた。「伊豆一番の大きな寺も、彼奴の火に二時間ばかりの間に燒かれて了つたゃが、それでものう、こんなにまあ立派なものが建つたゃに。」

「おゝ、建てゝで置くものか、あんな惡人の惡火に燒かれて其の儘建てずに置いては、佛樣に勿體ねえだ。——私等が佛樣の御座らつしやるところだに……。」

「何遍燒かうとも、佛樣を信心する間は何度でも建て直して見せるだ。」

「あゝ、えらあ立派なものだな。――明日は嘸ぞ賑かだんべえ。惣太のことを例へにした難有いお説教があるだと云ふに、皆聞きに來べえ。」

口々にそんなことを話し合ひながら、鐘を眺める者、堂宇を見上げる者など、流石に廣いお寺の境内も一頻りは人を以て一ぱい埋まつたが、それ等の人々も明日の參詣を樂みに何時か散り〳〵に歸つて、日が暮れる頃には廣い境内は寂として、一人の影も見られなかつた。日は何時か入つて了つて、空に漂つた名殘りの光りは、高く嚴めしく聳えた新しい甍の上に薄く漂つて居た。

其二

夜が更けて行くに從つて、濱に鳴る波の音は次第に高くなつた。其の夜を籠めて鳴り響く波の音の外、草も、木も、人も――天地の萬象は皆深い眠りに落ちたやうに閑寂とした眞夜中、新しく建てられた長安寺の釣鐘堂の下に泣き沈んで居る一人の女があつた。面長な顔に眉の細い色の白い、その美しい顔に明日は撞き初めに鳴ると云ふ新しい鐘を見上げては、又、さめ〴〵と泣いて伏し沈む。――哀れげな巡禮姿の袖や裾などを、時々ほそ〴〵と吹いて來る秋の夜の風がひら〳〵と嬲つて行くのが、一層淋しげである。

「姉や、何泣いてるだよ。――又、腹が痛えだか。」と、之れも貧しい巡禮姿で、おろおろ聲に聞いたのは、紛れもない音次の聲であつた。

「いゝえ、何所も痛くはないけれども……音さん、私はお前が可哀さうで……」と云ひさして、涙に濡れた眼に弟の顔を眺めた。

「俺あ、可哀さうでも何でもねえが……姉や、早く寢たいなあ。」

「おう、寢ませう〳〵。野に寢たり、山に寢たり、人の軒下に寢て責め折檻を受けるよりは、姉さんが誰れも居ない安心な處へ連れて行つて寢かして上げませう。」

音次は嬉しさうに、「姉や、そりや温けえ處か？」

「おう、温かい處ですとも！　其處には綺麗なお花が咲いて、美しい鳥が鳴いてる、

それはそれは好い處よ。」

「其處へ行つても誰も叱りはしねえだか……？」

「誰も叱りはしないよ。——こんな愁い世の中より、どんなに好い處だか知れやしない。」

「何か食ふ物があるだか……姉や、早く行きてえな。」

お澄は、無上に喜ぶ音次の罪のない顏を、可憐さうに眺めて、

「お前早く行きたいの？　え、早く行きたいの？」

「あゝ、早く行つて寢てえだ。」

「音さん、連れて行つて上げるからね、何うぞ姉さんと一緒に……」と咽び泣いて、

「何うぞねえ、姉さんと一緒に死んでおくれ！」と云つて、音次の手を取つた。

音次はぎよつとして飛び退ひて、

「えつ、死ぬの？」と、おど〳〵とお澄の顏色を伺つて、「俺あ厭だ。——父さんのやうになるなあ俺あ恐ねえだ。」

「おゝ、厭だらうとも、幾ら足りない人でも、折角此の世に壽命を享けて生れて來たのだもの。」と、終ひは獨言のやうに云つて、暫くは後の言葉も續かなかつたが、やがて、「ねえ音さん。厭だらうが何うぞ姉さんと一緒に死んでおくれ。姉さんだつてもね、些つとも死に度くはない、生きて居たいの……生きて居て、せめて最う一目でも若樣にお目にかゝりたいのだけれども、何うせ私はこんな卑しい身分で、それに惡人の娘で、惡人の妹なのだもの……此の間のやうに折角お目にはかゝつても、最う口を利くことも出來ないのだから、」と肩を刻んで泣き入つたが、「音さん、生て居たつて苦しい思ひをするばかりで、お前も私も同じ人間に生れながら、世間から人間扱ひにされることはないのだからね。それに兄さんは此の間のやうな繩目の恥を受けて、一度捕まつたら何うせ二度と再び娑婆の日の目は拜めない人なのだから……之れから先の長い生涯を、お前と二人で食ふ物もなければ寢む處もないこんな乞食になつて愁い思ひをして長らへるより……音さん、私は一層一思ひに死んで了ひたい！」

「死んだら饅頭食へねえだもの、俺あ死ぬのは厭だ。」

「罪のないお前まで殺すつて、姉さんは……姉さんは……。」と、更に新しく湧き上る涙に後は咽んで言へなかつた。

「姉やも矢つ張り死に度くねえだから泣いてるだな。——俺あ厭だ。」

「あゝ、姉さん一人で死んで了へば好いのだけれども、兄さんはあの通りの身で、又、私が居なくなつて了つて、後にお前を一人殘して置いては何うなるか……それを思ふと生かして置くのが却つて不憐なのだから、何うぞ姉さんの云ふことを能く聞き分けて、一緒に死んでおくれ。——頼むから死んでおくれ。」

「厭だ、〳〵。俺あ生きとる身體だから死ぬなあ厭だ。姉や、死んだら俺あ又生きて來られねえだ。」

「あゝ、そんなに死ぬのが厭なのかねえ。——こんな苦しい世の中に、そんなにまで生きて居たいのかねえ。」と、つく〴〵と嘆息して空を仰いだ。青い空には星が瞬いて、次第に濃くなつた天の川が、其の青い空を一筋白く區切つて南から北に流れた。やがてお澄は兄の面を鑄込んだ釣鐘に又してもしみ〴〵と眺め入つて、「音さん、村の人達

の兄さんを憎い〳〵の一念が集つて此の釣鐘の臍には兄さんの面が彫り込んであるのだよ。兄さんの面に撞木が當つて此の釣鐘が鳴る度に、村の人達は兄さんや私達のことを思ひ出して呪ふのだからねえ。音さん、今姉さんと音さんとが此の釣鐘の下で死んだなら、何ぼ酷い村の人達でも、少しは可哀相だと思つて一家の者にかゝつて來る怨みも幾らか薄らぐだらうから、お父樣や兄さんの罪滅しに死んでおくれ。」

「父も兄やも何も惡いことはしねえだ。俺あ死ぬわけはねえだよ。——そんなことを言はねえで、早く寢かしてくんろよ。」

「あゝ、こんなに云つても聞き分けがないのかねえ。」とお澄は呟いてつく〴〵と嘆息した。何うぞして納得さしてから……と思つたけれども、斯うして居ては只時間が過ぎるばかりで、若し其の間に人に見付けられるやうなことがあつては、折角此處まで死に來た甲斐がなくなる！　と、懐ろに隠した短刀に手をかけた。けれども……

ああ、罪もない音次の顏を眺めては、心も鈍り、腕も痺れるのであつた。

しかし、生きて居ても何の望みもない身なのである。人から憎まれたり、卑められ

たり、愁い、苦しい、恥しい悲しい日を涙の中に送らうよりも、此處は戀しい秋夫と僅かな間でも儚ない樂しい日を過ごした思ひ出のある處である。況して、村人の怨の一念が凝つて兄の面を鐘の臍に鑄込んだ釣鐘の明日は釣き初めである。其の鐘の鳴らない中、此の身を此の釣鐘の下で潔く死んで戀と義との二筋道――戀しい懷しい秋夫にせめて只の一度でもあはれ可憐しい者と思はれて、一方には兄に對する村の人々の怨みを少しでも解きたいと、固い決心をして遙々忍んで此處まで引き返したのである。今の機會を取り外して明日になれば最う兄の面に撞木を當てる鐘の音は、此の村々の人々の耳に響き渡るのである。――と、心を取り直して、再び短刀の柄を屹と握り緊めると、キラリと拔き放つた。

「あゝ、姉や、俺を殺すだかよ、姉や。」

「音さん、何うぞ勘忍して……」

泣きながら逃げ惑ふ音次の後を必死となつて追つかけた。振り翳す其の度びに短刀の刄先は夜目にも物凄くキラリ、キラリと閃めいた。

「姉や、勘忍して……俺あ何でも云ふことを聞いて柔順しくするだあによ。勘忍して……」と、音次はぐる〳〵と釣鐘堂の周圍を廻つて逃げるのであつた。其の逃げる弟を、お澄は倒れつ轉びつ追つかけた。月もない夜の闇の中に、二人は暫くの間さうして夢中になつて居た。

と、松明の燃える赤い焰が此方に近づいて來るのを音次は目敏く認めて、

「あゝ、誰か來たゝ。」と、思はず叫んだ。

「え？」と、お澄も同じやうにそれを認めて、ぎよつとしたが、二人は素早く釣鐘堂の後ろに身を潜めた。

暗い中に松明の火は眞赤に燃えつゝ次第々々に近づいて來た。幾月にも刈つたことのない髪も髯も蓬々と長く延びて、ところ〴〵の破れた粗末な着物の裾を端折つた巨漢の姿の半面に赤い火の光りが映つて、赤く、物凄く見えた。彼は、松明を振り翳しつゝ釣鐘堂を眼がけて眞直ぐに來て、其下まで來るとぴたりと止まつた。そして燃え盛る焰を翳して暫くの間は鐘の臍に彫り込んだ面を睨むやうに眺めて居た。――松明

の光りにそれと分る振り仰いだ其の髯面は、恰度、鐘の臍に刻まれたそれと同じ面であつた。

「うむ。能く彫つてあるわ。」と、其の厚い脣を洩れて呻くやうに云つた。其の聲は紛れもない惣太である。

物蔭に隠れた二人は思ひ設けぬ兄の姿を確めると、訝る間もなく、

「おう、兄さん。」

「兄やか！」

と、二人は一緒に叫んで両方から犇と兄の身體に抱き付いた。

「おう、お澄、音次！」と、餘り突然なのに驚くと云ふより寧ろ呆れて、急には後の言葉が續かなかつた。――沼津在の松原で癩に倒れたお澄と、それを介抱する音次の二人の身の上の氣遣しさに、せめて最う一度しみ〴〵と言葉を掛けたいと、無理なことをして二人の處に戻つて見た時には、其處には最う二人の姿は見えなかつた。それから心掛けて行方を尋ねても、皆目分らなかつた二人に、此處で會はうとは夢にも思はなかつた。

お澄の方でも意外と云ふよりは實に夢のやうな氣がした。あの時正しく後手に縛られて二人の刑事に引かれて行つた兄が、今夜此所へ來ようとは何うしても思はれない、全で狐にでも撮まれたやうな氣がして、暫くはぼうつとして居たが、漸う〴〵氣を取り直すと、

「兄さん、何うして今夜此處へ來たの？」

惣太も偶と我に返つて、

「逃げて來たのだ。」と、只一言云つた。

「え、逃げて！」と、お澄は思はず聲を喘まして息をひそめた。

「兄や、此の間縛られて居たあだが、俺あ腹が立つて腹が立つてなんなかつたせ。」

「……」

「それで何うして今夜此處へ來たんです？」

「何うしてゃもない。お澄あれを見てくれ。」と釣鐘に彫られた我が面を腮で示すと、

キリ〳〵と齒を噛んで、「明日は撞き初めだ。俺の面に撞木が當らねえ中に、又此の寺も此の鐘も燒いて了ひに來たゞ。」

「えつ。燒くんですつて！」

「お丶、燒いて了ふだ。」

「面白えな〳〵。お寺に火い放けたら、又此の前のやうな大火事になるだんべえ。—俺アはあ寒いだに、火事に當つて温まるべえ。」と、音次は手を拍つて喜んだ、

「待つとれ、今燃やして遣るわ。何度び建て直さうとも惣太の息のある限りは燒き拂つてくれるから。」と、暗い空に高く聳えた寺の家根を屹と睨んで、ずか〳〵と進んで行つた。

「兄さん、待つて下さい。兄さん！」

お澄は思はず泣聲を上げて、惣太の後から追ひ縋つた。

「止めるな〳〵。」

「兄や、早く火い付けてくれ。——俺あ寒い。」

「お丶、今燃して遣る。——待つとれ！」と、松明を振翳して行く其の赤い焰は、暗い中に物凄かつた。

「兄さん、何うぞ待つて……」と、惣太の袂を捕へた。

「お澄、邪魔をせずに俺の怨みを晴らさしてくれ。」

「あ丶兄さんは……」とお澄は泣聲で、「未だに改心なさらないのですねえ。」と、胸を押へて情けなさ丶うに云つた。

「改心？」と惣太は嘲笑つて、漫々と潮を湛へた暗い大きな海面を指示したが、「あの海の水が乾く時はあつても、俺が世の中を憎む心の改まる時はあるまい。お前はお父つさんがどんなに世の中からも村の者からも苛められたか知るまい。俺をこんな惡人にしたのは誰だ。お前と音次を乞食にしたのは誰だ！怨み死に死んだ父さんを葬らせなかつたのは誰だ！世間が俺の一家族をこんなにまで呪ふのに、此の怨みを復さずに居られると思ふか！其の上に……」と涙を呑んで、「あの鐘を見てくれ。俺が死んでから百年千年の後までも俺の顏を撞いて俺を憎まうと云ふのだ。之れ程まで

にされながら、改心出來ると思ふか！　幾度び思ひ返しても俺は善人にはなれないのだ。世間は俺を善人にしないのだ。惡人と言はゝ言へ、俺は立派な惡人になつて此の怨みを晴らさずには置かないのだ！」と、太息を吐いた。其の惣太の一語々々は火のやうに熱かつた。

お澄は流れる涙にべつとり濡れた顏を振り上げて、

「兄さん、怨みを晴らしたところで貴方の罪が消えると思ひますか！　それは罪に罪を重ねるのです。兄さん！　怨みを晴らさうと思つたら、何うぞ改心して善人になつて下さい。私、一生のお願ひで御座います。」

「幾度繰り返しても同じことだ。俺は到底善人にはなれんのだ！　お澄、お前は俺の邪魔をせずに、音次を連れて何うぞ遠いところへ行つてくれ！　賴みだ。」と泣き入るお澄の脊を優して撫でた。あゝ、之れ程までに思つてくれる妹の言葉をむげに退けて、我が怨みを晴さうと云ふのは、妹に對して餘りに慘酷い仕打ちだ。と、一度は心も折れたけれども、我が面を彫り刻んだ鐘のことを思ふと、怒りに胸は焦立つて、最う辛

抱は出來なかつた。

「お澄、邪慳な兄と思はずに、何うぞ俺の怨みを晴らさしてくれ。村の奴等が俺の顏を撞いて鳴らす此の釣鐘が撞き初めの響きを出さない中に、寺も鐘も俺の火に燒かしてくれ！」と、お澄の身體を突き退けて行かうとするのを、よろ〳〵として漸く踏み止まつたお澄は狂氣のやうに再び惣太の袂を捕へて、

「兄さん、之れ程云つても思ひ止まつて下さらないなら、何うぞ私を殺してからにして下さい！」と、涙ながらに叫んだ。

「お澄、賴みだ、何うぞ止めてくれるな！」と、再び振ぎ取らうとする袂をお澄は必死に掴んで、

「いゝえ、私の息のある間は腕を折られても決して此の袖は放しません。——兄さん、貴方と、私と弟とは、たつた三人限りの兄弟ぢやありませんか！　兄さんは今此のお寺や鐘を燒いて、それで怨みが晴れるかも知れませんけれども、燒かれた寺の人や村の人達の兄さんに對する憎みが、一緒に重なつて來る私や音次の身は何うなると思

ひます。強ひて兄さんが自分の非を遂げようとなさるなら、私を殺してからにして下さい。私と音次を殺して此の鐘と一緒に燒いて下さい。燒け落ちた鐘と一緒に黒焦になつた二人の死骸を見たなら、今建てたばかりの寺を燒かれ、鐘を燒かれた村の人達の兄さんに對する憎みも幾らか薄らぐでせう。」

「そんなことは出來ない。」

「出來なければ私は此の下で自分で死にますから、何うぞ燒いて下さい。兄さんの呪ひの火で私の死骸を燒く！　それがせめてもの罪滅しです。」と、しつかと摑んだ惣太の袂を放すと、つか〳〵と釣鐘堂の下まで走り寄つて、キラリと短刀を拔き放つと、あはや其の白刃はふつり白い丸い咽喉元に擬せられた――其の一刹那！

「待て！　何故死ぬ！」と、惣太は飛んで來て、短刀を持つた手首をしつかりと押へたのである。

「兄さん、何うぞ死なして下さい！　私は覺悟を決めて參りましたのです！」と涙に咽ぶ悲しい聲を振り絞つて、「兄さん、私は生きて居ても何うせ望みのない身體です。

阿呆に生れた音次と二人で此の釣鐘堂の下で死にましたなら、たとへ鬼のやうな村の人達でも、少しは可哀相だと思つてくれるでせう。生き甲斐のない私と、愚かな音次の二人が生命を捨てれば、少しでも兄さんの罪滅しになつて、世間の人が石山一家に對する怨みも幾らか柔らげば、兄さんを憎む心も薄らぐだらうと、私は音次を連れて此の釣鐘堂の下で死に來ましたのです。兄さん！　私は之れまでに思つて居るのに兄さんは未だ改心して下さらないのですね。お父さんの來世を願ふ氣は起らないのですね。一旦僻んだ心の迷ひから、段々恐ろしい惡魔のやうな心になつて、我が手で一度燒いて漸う〳〵建てられた此のお寺を、又むざ〳〵と燒かうとは餘りで御座います。」と泣き入つて怨じた。

「あゝ、お澄！　お前は此の兄をそんなにまで思つて居てくれるか！　死んでまで……！」と、感極まつて後は聲が出ない。

「はい、生きて居ても世間の人は許して下さらず、若樣のお傍へ參ることも出來ず、何の望みもない儚ない身なんですもの……せめて、若樣の居らした此のお寺の此の

釣鐘の下で死ねば、それが悲しい心遣りです。又、此の鐘の下で私の死んだことが若しも若様の耳に入れば少しは不憫な者と思つて下さるでせう、村の人々も可哀相な奴だと思つてくれるでせう。死ぬ私の身は些つとも厭ひませんけれども、兄さんの手で若しも此のお寺が燒かれるやうなことがあると、私が死んだ後までも若様にどんなに恨まれるでせう。たとへ此の世では添はれなくとも、若様の思ひの留まつた此の寺で死んで來世では……と果敢ない望みに戀しい思ひを繋いで死んで行きますのに、それでは到底……」と稍々暫くは泣き入つて、やがて涙に濡れた顔を振り上げると、

「ねえ兄さん、兄さんの放けた火に此のお寺が跡方もなく燒かれて新らしく再建する時に、若様は此のお寺を自分の一生棲むところだからつて、お寺へ上る時に持つて入らした、二千圓の金をすつかり喜捨なすつたのですよ。さうして世を捨てた、一生を此のお寺で靜かに送らうと決心なすつた、謂はゞ此のお寺は若様の魂の留まつたところなのです。それを……それを兄さんの手に又燒いては、折角儚ない望みを未來に繋いで、死んだ後まで村の人ばかりではなく、若様にまで憎まれねばならないと思ふ

と、兄さん、私それが悲しくて……」と、又さめ〴〵と泣き沈んだ。

「あゝ、さうか！　それ程迄に想つて居るものを……あゝ、俺の心は鬼か蛇か！」と火のやうに熱い息と共に松明を投げ棄てゝ、「あゝ、お澄、俺も死なう！」と、呻くやうに云つた。

「あの兄さんも！」

「さうだ。——哀れな兄弟三人が、一緒に此處で死なう！」

「では兄さん、改心なすつて？」

「いや、改心はしない。世間の奴等が改心しない中は、俺も決して改心せん！　僅かばかりの罪を憎んで一家の者を斯うまでにした世間の罪は、俺の罪より更に重い。——あゝ、しかし、死んで了へば善も、惡も、何もないのだねえ。」

「さうですとも！　兄さん、世の中から憎み嫌はれて、天にも地にも行き處のない惡人の子が兄弟三人で、今夜此の鐘の下で死にましたら、世間の人が此の鐘の響きを聞く度に、少しは可哀相だと思つてくれるでせうねえ。」

「それを思つてくれる程の世間の人間に温い心があるなら、俺だつてこんな惡人になりはしないのだ！」

「兄さん、明日の撞き初めに此の鐘が鳴る時に、若樣の別莊へ聞えるでせうかねえ。」

「聞えぬこともあるまい――。」と惣太は妹の可憐らしい心に髯面を涙に濡らして、「あ、最う何も云つてくれるな！　胸が煮えるやうだ。」

「兄さん、私が死んだら、何うぞ此の鐘を撞いて下さい。――若樣の別莊に聞えるやうに、力を籠めて……。」

「お、、力一ぱい撞いて遣る。――音次。音次！」と、叫んだが、返事がなかつた。

――疲れ切つた身體を釣鐘堂の柱に凭れて、何時の間にかぐつすりと眠り込んで居た。惣太は暗い夜目に凝つと透して其の罪もない寢顏を眺めて、

「あ、、可哀さうだ。幾ら馬鹿とは言へ、俺の弟だ。今死ぬると云ふことも知らないで、斯うして心地好さ、うに眠つて居るわ。」と、傍に寄つて其の顏を覗き込んでつくづくと眺めたが、「お澄、此の眠つて居る顏を見てくれ。是が……是が殺されると思

ふか――お前起してくれ。」

「ほんに能く眠つて居ますわねえ。全で神樣のやうに――。不具に生れただけ猶更不憫で……、」と、潸々として溢れる涙を拭ひもあへず、「音さん。音さん。」と肩に優しく手を掛けて搖り動かしたが、深く眠つた音次の魂は、却々我に返らなつた。

「兄さん、音次はぐつすり眠入つて居ます。」

「あ、、不憫な者だなあ。――音次、音次！」と、底力のある聲でひそやかに呼んだ。呼ばれてやう〳〵音次は初めて眠りから覺めて、長々と一つ伸びをすると、

「あ、、夜が明けたゝか……。」と、眼を、擦り〳〵きよろ〳〵するのであつた。

「夜が明けた？　これから夜が明けるのだ。――暗い、苦しい、慘酷な此の世から、明るい處へ三人で行くのだ。」

「三人で行くだか！　好いなあ。――姉やと二人で今迄で歩いて居たら、姉やは女だもんだから皆なに苛められて愁かつたゝが、兄や、三人なら嬉しいなあ。」

「あ、、嬉しいか。音次、死ぬのだぞ！」

「何！　死ぬだ？」

「兄やも、姉やも、音次も、三人一緒に死ぬのだ。」

「兄やも一緒だか……三人一緒になら死ぬべえ。」

「死んでくれるか！」

「あゝ、死ぬだ。」

「可憐らしい奴だ！」と、惣太は妹と弟とを兩の腕にしつかりと抱へた。――三人の眼からは熱い涙が降るやうに流れた。

時は靜かに、そろ〳〵と過ぎて行く。一秒……一秒……一秒……と。

やがて、惣太は二人の身體を手から離して、

「さあ、二人とも覺悟は好えだか！」

「兄さん、何うぞ私から先に殺して下さい。」と、短刀を惣太の手に握らして、襟元を廣げて胸を出すと瞑目して手を合せ、微かに口の中に念佛を唱へた。――今年十九の若い處女の血を盛つた白い柔らかな乳のあたりの肉は、夜目にも仄のりと匂はしく見

えた。

惣太は幾度か、力を籠めて短刀を振り翳したが、觀念の眼を潔く閉ぢて、靜かに合掌した妹の其の胸の邊りまで冷たい刄先を持つて行くと、流石に腕は痺れ、心は鈍つた。

「兄さん、何うぞ……私は喜んで死にます。」と、涼しい眼をぱつちり見開いて、心のひるんだ兄を勵ましたが、直ぐに又眼を瞑る。

惣太は漸う〳〵心を取り直して、

「おゝ、お澄。」と、眼を閉ぢ力を籠めて、鋭い刄先を柔らかな胸に刺した。――さつと迸る紅の血潮！　あはれ、十九年の短い生命を繋いだ絲は、其の一瞬間にぷつつり斷たれて、手を合した儘がつくりと倒れた。

「お澄、兄さんも直ぐに行くだぞ！」と、ほつと息を吐いて、傍に衝つ立つた音次に向つて、「さあ、音次、好いか！」

「兄やも死ぬなら、俺も死ぬだ！」

「おゝ、兄やも死ぬだとも！　此の世に思ひを留めるなよ。」と、血に濡れた短刀を振り上げた。

「兄や、死んだら何處へ行くべえか？」

「死ねば父さん處へ行くだ。」

「そしたら皆が一緒に暮されるだあな。――さあ死ぬべえ。」

「さあ、好いか！」

音次は胸を突き出して、

「兄や、其の短刀はえらあ光るだあな。――痛かんべえの。」

「いや、痛くはない。」

「兄や、俺が死んだら、お寺で饅頭上げてくれるだか。」

「音次、好いか！」と最う一度念を押して、殊勝に胸を張つた其の廣い胸の上へ、惣太は愛し哀れむ一念を其の腕に籠めて、短刀を突き立てると、音次の身體はお澄の身體に重なるやうに倒れた。――先刻投げ捨てた松明が頭の方で燃えて、其の赤い光り

は苦もなく死んだ血の氣のない蒼い二人の顏に映つた。

惣太は太い息を肩で刻んで、二人の死骸を眺めて、暫くは石のやうに衝つ立つて居たが、やがて、釣鐘堂に上つて撞木の綱を左の手に固く握つて鐘を振り仰ぐと、

「あゝ、能く彫つてある。俺の面を俺が撞く。是れが此の鐘の撞き初めだ。――お澄、若樣の別莊まで聞えるやうに撞いて遣るから、お前も聞いてくれ。」

右の手に短刀を握つて、我と我が腹に突き立てると共に、撞木の綱を握つた左の手に最後の渾身の力を籠めると、一撞き……二撞き……三撞き……殷々たる鐘の哀音は、村に響き、山に響き、海に響き、其の果ては遠い空に入つて雲に響く……

「あゝ、夜明けの鐘だ。」

低い力ある聲で呻いて、其の大きな身體はばつたりと地に倒れた。

月の出かゝつた東の空は美しいミルク色に白々と染まつて、海は次第に明るくなつたが、やがて上の方の缺けた二十日ばかりの冴えた其の姿は、水平線の上にぽかりと浮いて、キラ〳〵、キラ〳〵と波は黄金色に煌めくと、仄白い其の光りは天地に溢れ

て、山や、木や、草や、寺の建物や、釣鐘や――そして並んで倒れた三人の死骸の上にも蒼白く流れ渡つた。

――雲の響了――

大正二年七月十三日印刷
大正二年七月十七日發行

（定價金九拾五錢）

著作者　東京市麹町區飯田町三丁目廿五番地　佐藤紅綠

發行者　東京市麹町區有樂町二丁目一番地　佐藤義亮

印刷者　東京市麹町區有樂町二丁目一番地　中村政雄

印刷所　報文社

不許複製

發行所　東京市麹町區飯田町三丁目廿五番地　新潮社
電話【番町】二、二三三番
振替【東京】一、七四二番

全國三十有餘の劇場に演ぜられたる傑作

佐藤紅綠氏著

名取春仙氏筆

新作小說

俠艶錄

三版賣切
四版出來

櫻吹雪朧月夜の夢を亂して、小金井堤上一夜の情の、思へば悲緣なりしかな、眞に最愛の子を奪ひ、更にまた、最愛の夫を奪はんとする無情の世よ。燈火のゆらぎ壁に淋しき時、泣いて別離を促して、紅淚雨の如し、一片の俠氣、毅然として義に就きたれども、弱き者よ、汝の名は女也。悲しい哉、悲恋怨恨途に身を破り、紅塵び絲亂れて彼女は狂せるなり。あゝ俠にして艶なるわが坂東力枝の戀物語よ。

小金井堤上の密語

（俠艶錄口繪縮刷）

特製頗美本
定價金八拾五錢
郵送料金八錢

佐藤紅綠作

小說

潮（うしほ）

再版

名定郵
取價送
春入料
仙拾八
畫錢錢

近頃の小說の中で、斯くの如く變化に富み波瀾に富み、全く息をもつかせぬ面白さに充ちてゐるものは他に無いことを斷言する。作者の作のあらゆる階級から受けるのは要するに此の爲めである。『潮』のいかに面白きかは、また多言するまでもあるまいと思ふ。

俠艶錄と同じく紅綠子の作にして全國至るところの大小劇場に演ぜられ頗る評判の高き傑作なり……

●世評一斑●

▼東京每日新聞評　曾て脚本として全國幾百の劇場に演ぜられ、『俠艶錄』と相並んで新派の双璧と稱せられたる『潮』は、同じ作者左藤紅綠氏の筆により て、小說に書き改められたるもの也。山水明媚の境を背景とし、若き男女が熱烈なる戀愛を主題とし、哀別歡會の幾曲折に絡ふに、結んで解き難き世相の紛糾を以てす、劇としての變化は更に小說としての波瀾を加へて興味を二重にし、其色彩に富める筆は、能く混綿の趣を描いて一幅濃艶の活畫圖、青年子女の血を騷がさずんば止まざるの概あり。劇として舞臺に觀ざるの人も此一卷によりて、名優の技を髣髴せしめ得可し。興味を主とすれど、彼の低級の卑俗に媚ぶるを旨とせるの駄小說とは全く選を異にせるところ、近來の好著として推奬するに憚らず。……

最上製美本
紅葉全集型

小包料八錢
定價金壹圓

終編

金色夜叉

小栗風葉氏新著

▲時事新報評　故尾崎紅葉の大著『金色夜叉』が作者早世の爲めに遂に完結を告ぐるに至らず、永く未完の著として遺されしは、吾人共に遺憾とする處なりしが、作者の高弟小栗風葉、深くこれを遺憾とし、如何にもして完結せしめんとするの志あり、爾來、專ら故人の腹案覺書により て稿をつぎ、苦心慘憺の末、稿漸く成り、これを『金色夜叉終編』と名づけて漸く世に問へり。最もよく故人の特色を體得せる風葉によりてエンドを附せられたるは、適人適所を得たるものと云ふ可く、延いて明治文壇に一光彩を添ふるものと云ふべし。故人の『金色夜叉』と併せて、永く後代に遺すべき名著として洽れく之を文壇に薦む。

■賣切又賣切、無前の歡迎を得て第二十版發賣の盛況に達す■

▲萬朝報評　文章字句共に能く故人の筆致に擬し、其圓熟と洗錬とは殆んど故人の墨を壓するの概あり、著者の苦心と困難とは蓋し甚だ大なりしならん、大體の脚色は故人の腹案覺書によりたりと謂へば、素より之を雖ぜん樣なく、描寫の精微にして輕妙なる亦大體に故人の作を讀むの感あり、各種人物の性格に於ては前後能く照應し、殆んど別人の作と思ふべからず。貫一の漸く改悛せんとするに方つて人情の芳醇に醉ふて覺醒の域に突進し、更に身邊の寂寥に愛の光明を發見するの邊り、其描寫極めて自然にして巧妙なるを覺ゆ。蓋し此著の洛陽の紙價をして高からしむべきは、また疑ふべくもあらず。

金色夜叉外編

荒尾讓介

小栗風葉氏作

▲報知新聞曰く、風葉氏早く本篇の稿を起せしが例の癖骨の苦吟を重れて業容易に成らず、黑法師と名乘る無恥の徒あり今春同名の書を出し、人をして、肇墾せしめしが、今回漸く風葉氏の稿成りて公にせらるゝに至れり。結構は金色夜叉と終始するの用意を忘れざるも、而も氏が萬斛の奇想自ら流れて、結びて解け難き人情の葛藤は荒尾の四周に羅綿し、喜ぶ可き泣く可き各種の事件を經て終に滿枝と握手するに至り、始めて讀者をして破顏一笑せしむ、行文は清新流麗なる言文一致體をとり、事件の推移に劇的趣味あり、感興極めて饒なる小說としてこれを大方に薦む。

無前の歡迎＝第六版また〳〵、發行即日賣切

「第七版印刷出來」

紙數大判四百三十頁　▲定價金壹圓
（口繪）名取春仙氏畫　▲小包料八錢

＝警告＝　同名の書あり『小栗風葉作』に注意あれ！

島崎藤村氏作

小説 破戒

■綠蔭叢書第一編——全一冊■鏑木清方氏畫——定價金八拾錢、郵稅八錢

淺間大麓の灰砂の谷に、若き日の熱と夢とを葬りて、詩より物語に轉ぜる著者が長篇の第一作たる本篇は、新文藝の先驅として風に世を騷かしつゝあるもの也。丑松の悶え、お志保の嘆き、ある特殊の階級を描いて社會問題に觸れ、信濃の地方色を鮮かに寫して鄕土藝術の匂ひ豐かも也。此一篇の爲に著者は、三年間の勞苦と困厄とを拂ひし事實に見ても、尋常一樣の作品にあらざるを知るに足らん。

小説 春

■綠蔭叢書第二編——全一冊■和田英作氏畫——定價金九拾錢、郵稅八錢

これ著者が青春の思ひ出を描けるもの也。彼の「文學界」の若き詩人の群と、其清新にして芳醇なる雰圍氣との中に、著者自身の炎の如き若き日の夢を描き出せるもの、當年の涙漫的運動の眞相は遺憾なくこゝに活寫せらる。戀と涙と、憧憬と苦悶と、通篇六百頁、これ客觀化せられたる一大詩篇也。熱烈なる詩人の情緒を、冷靜なる藝術家の筆を以て描ける所に、わが新文藝の一大異彩たる本篇の特色は存する也。

小説 家

■綠蔭叢書第三編——上下二冊■有島壬生馬氏畫——價七拾五錢宛、郵稅八錢宛

本篇は、明治の年代が有せりし文藝の中に在りて、最も偉大なるもの也、上下二卷を通じて千頁に近く、量に於いても亦無比の大作たり。描く所の二大家庭の二十有餘年に亙れる歷史にして、幾波瀾、幾情景、凡そ人間の悲喜哀歡は悉く此一卷に集りて、其合奏の裏に一脈の高調の幽かに宗教的氣分を傳ふるを見るべし。其の描寫の筆に至りては、著者が傑れたる技巧のまさに頂點に達したるものと稱せらる。

德田秋聲氏作

■傑作中の眞傑作 ▲五版賣切六版出來 ▼洋布製美本定價五拾五錢郵送料六錢

小説 黴

▼島崎藤村氏曰く 自分の氣質に最も近い作を作り得た點に於て確に成功して居る、殊に女性の描寫に成功して居る。

▼正宗白鳥氏曰く 女をこの位ゐ巧みに描いたものは此頃の作物には外に例がない。普通人の生活の苦しみが遺憾なく書いてある所に此作の價値がある。

▼島村抱月氏曰く 小說壇の第一位を占む可きものである。あのじみな作風で新しい道を辿つて來て一の頂點に達した、のではないかと云ふ意味で注目すべき作である。

近時小說の出版せらるゝもの多し、而も一世を動かせる『黴』の如きは、斷じて他に看る可からず。藤村氏の『家』と相並んで、小說壇の第一位を占むる傑作さは何人も許せるところ、本書を看ざるは、新文藝に志ある人の大なる恥辱也！

▲早稻田文學評……質に於て自然性を、形に於て客觀性を十分に具有した、眞に充實した作品として明治文壇稀有の大作たることを斷言して憚らない。

小説 足迹

再版發賣

總洋布製 定價五拾五錢 郵送料拾五錢

▲田山花袋曰く、お庄さいふ女の東京に來てからの生活を印象的に書いたもので、其かよわい女のかげに廣いライフが無限に展開されてゐるさまが、いかにも人なして物を思はしめずには置かない。第一に全篇を透した綜が單純でそして混亂してゐないのがこの一篇をして纏つた感じを與へせしめる大きな原因である云々

田舍から出て來た少女が、心と肉との、おのづから發達するにつれ、その經て來た種々の暗い境遇に眼を開かせられ、我れと我が身を持ちくづして縱いまゝな肉の生活に墮ちゆく徑路——少女の印した足迹をあるがまゝに書いた傑作。

◎戀に生き戀に死せる多感の男女の運命に哭せよ

風俗壞亂の故を以て發賣を禁止せられたる
本書は青果氏によりて世に公にせられたり！

好色五人女

井原西鶴作

樽屋おせん
八百屋お七
お夏清十郎
おさん茂右衛門
おまん源五兵衛

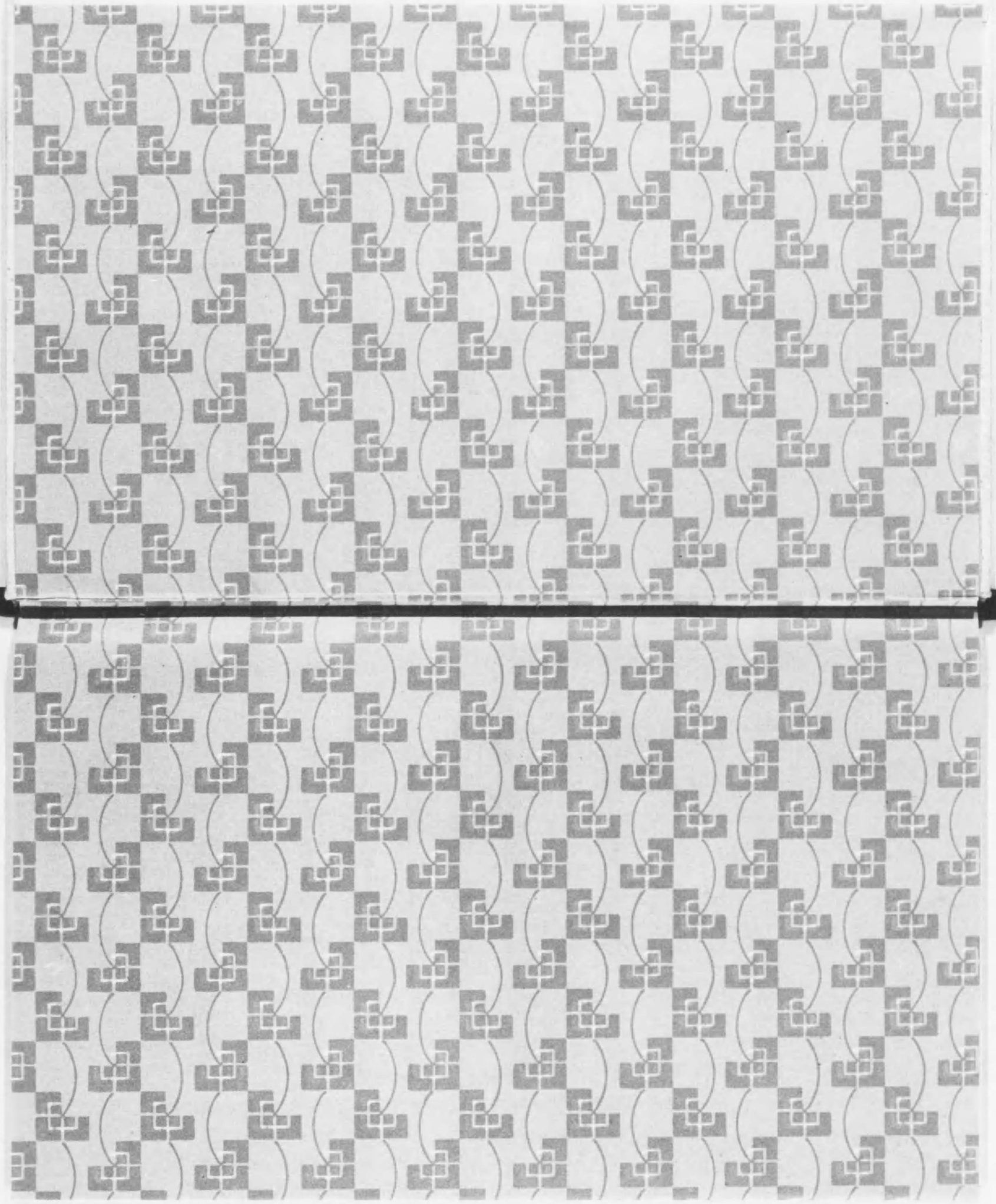
眞山青果氏譯

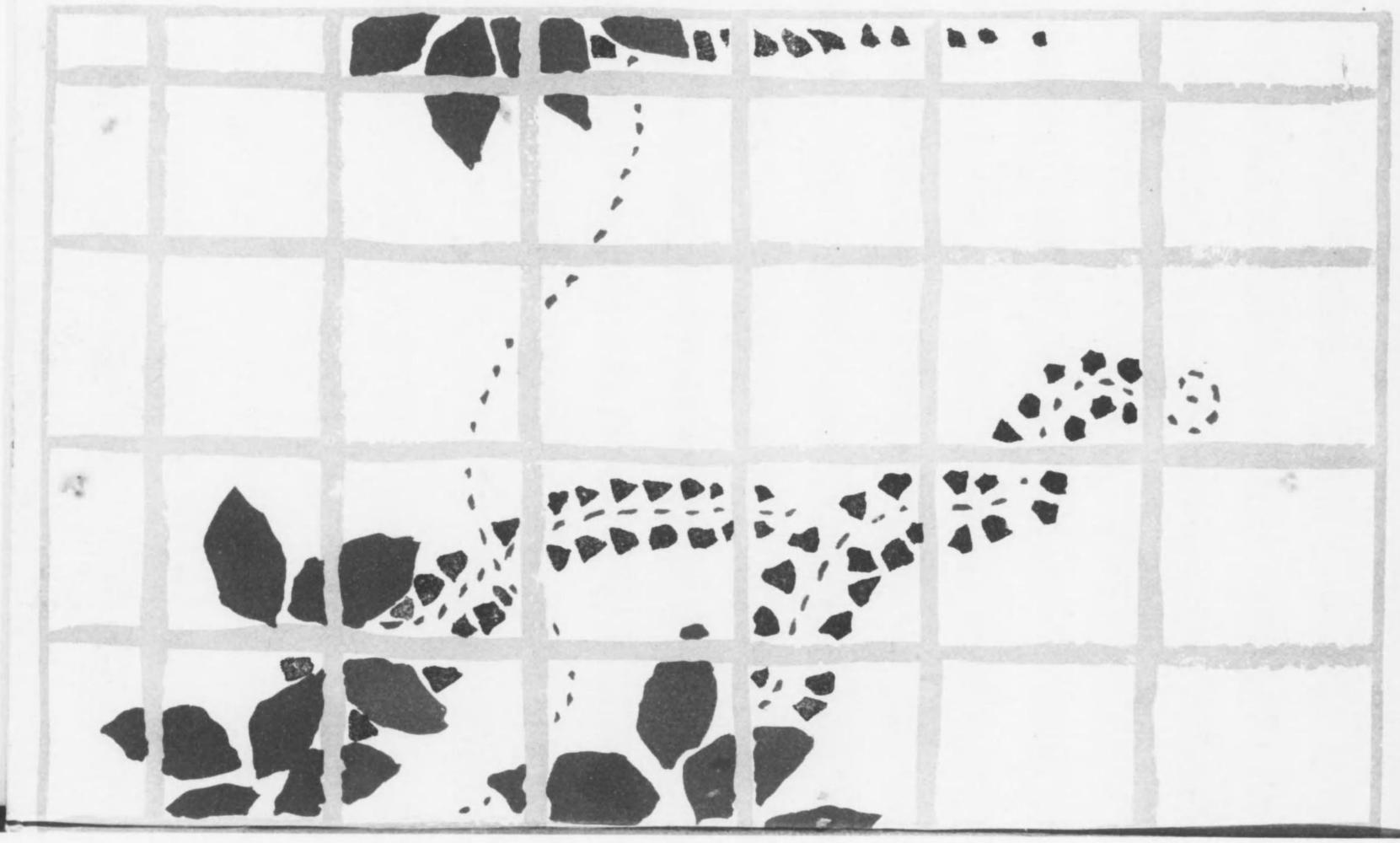
▲好色五人女は西鶴作中の最傑作なるも、卑猥なりとの故を以て發賣禁止せられ、世人多くは其絶妙の詞意を味ふこと能はず。青果氏之を憾み今時流の文に譯して公にせり。流石に文章に於て自然派中第一に推さるゝ人だけありて、其文字を斡旋するの巧みなる事驚く可きものあり。簡勁にして豐艶なる西鶴の文、時樣の色彩を施されて、妙味更に新たなるを覺ゆ。近來最も興味多き書として、之を讀書界に薦む。（日本新聞評）

▲文の豐婉清秀よく原文の妙を傳へて、抹するに新時代の色彩を以てす。西鶴が奇警の著眼と著筆と青果氏の色彩多き筆致と相待ちて一讀津液の生ずるを覺ゆ。（報知新聞評）

▲定價五拾八錢▲郵稅六錢

◎稀有の名文章！　これ世評の一致せるところ也





幾